

# 向日庵

6



## 目次

寿岳文章「卒業論文 ウィルヤム・ブレイクの『ジェルーサレム』研究」の背景 ——なぜブレイクを仏教の言葉で語ったのか・・・・・・・・・・	1
佐藤 光（東京大学大学院総合文化研究科教授）	
寿岳文章のウィリアム・コベット小伝・・・・・・・・・・	10
川端 康雄（日本女子大学文学部英文科教授）	
寿岳文章の書物愛——出版文化を主軸に・・・・・・・・・・	17
長野 裕子（特定非営利活動法人向日庵理事）	
『絵本どんきほうて』の形成—共作者の視座から—・・・・・・・・	48
中島 俊郎（甲南大学名誉教授）	
向日庵資料紹介 寿岳文章『癩祭記』・・・・・・・・・・	69
解説／井上 琢智・中島 俊郎・長野 裕子	
会員による新刊案内・・・・・・・・・・	101
Meher McArthur & Holis Goodall eds., <i>Washi Transformed: New Expressions in Japanese Paper</i> (International Arts and Artists, 2021)	
Ibe Kyoko & Elise Thoron, <i>The Way of Washi Tales</i> (The Legacy Press, 2023)	
「あとがき」 長尾 史子（特定非営利活動法人向日庵理事）・・・・・・・・	102

## 寿岳文章「卒業論文 ウィルヤム・ブレイクの『ジェルーサレム』研究」の背景 ——なぜブレイクを仏教の言葉で語ったのか

佐藤 光（東京大学大学院総合文化研究科教授）

寿岳文章（1900-92）は1919年4月に関西学院高等学部英文科へ入学し、1923年3月に卒業した<sup>1</sup>。寿岳が提出した卒業論文は、縦書きの罫紙を二つ折りにした袋綴じになっており、罫紙中央の魚尾下部には「私立関西学院文学部」と印刷されている<sup>2</sup>。本文はインクを用いて手書きで記されており、頁数が中央右上部に記された罫紙141枚と、頁数の記されていない罫紙8枚からなる。頁数の記されていない罫紙は、表紙1枚、「佐藤清」の署名の入った罫紙1枚、凡例1枚、参考書目2枚、目次1枚、第一章序説の扉1枚、裏表紙1枚である。表紙には4行に分けて「卒業論文／ウィルヤム・ブレイクの『ジェルーサレム』研究／英文科四年／寿岳文章」とある。本論では、寿岳が卒業論文において、どのような文献を参照し、どのような議論を展開したのか、を検証する。

### 1 柳宗悦『キリアム・ブレイク』の重み

寿岳の卒業論文は「第一章 序説」、「第二章 『ジェルーサレム』の生るゝまで」、「第三章 『ジェルーサレム』の内容」、「第四章 ブレイクの『想像』について」の四つの章から構成される。「第一章 序説」において、寿岳は卒業論文執筆の背景を次のように説明した。

早くより私の心に訪れた彼に対する愛は、遂に四年（よとせ）の在学を記念すべき卒業論文にも彼を書くことを促した。大正十一年の春頃には、私の心は人としてのブレイク、芸術家としてのブレイクを、彼の全生涯を通じて書きたい願ひに燃えてゐた。彼が世に残した多くの絵画に就ても言ふつもりであつた。しかるにそれは限られたる卒業論文の内容としては余りに多くの紙数を要するのみならず、日に多くの時間を夜学校の机の前に送つて生活の資を得べき境遇に置かれてゐる私には到底みたされぬ望みであつた。こゝに於て私はその願を捨て、当初の計画の一部を取つて、彼の全作品中最も難解と称せらるゝ『ジェルーサレム』に就て書くことにした。（「卒業論文」、6-7頁）<sup>3</sup>

<sup>1</sup> 笠原勝朗編「寿岳文章年譜」、『寿岳文章書物論集成』（沖積舎、1989）、1050-1051頁。

<sup>2</sup> 寿岳の卒業論文は関西学院大学学院史編纂室で閲覧することができる。調査にあたり、井上琢智関西学院大学学院史編纂室主任研究員・元経済学部教授・前学長と同編纂室石野利香氏の御力添えを得た。

<sup>3</sup> 本論では「卒業論文 ウィルヤム・ブレイクの『ジェルーサレム』研究」を「卒業論文」と略記し、罫紙中央右上部に記された数字を頁数とする。振り仮名が付されている場合は（ ）に入れて示す。漢字の旧字体は、一部を除き、新字体に改めた。

卒業論文でブレイクに取り組むことを決めた時期として、寿岳は1922年の春を示す。寿岳は「彼の全生涯を通じて書きたい」と考え、絵についても触れるつもりだったと述べた上で、限られた紙数で卒業論文を書かねばならないことと、夜学で教えなければ生活が成り立たないことを挙げて、「当初の計画の一部を取つて、[中略]『ジェルーサレム』に就て書くことにした」と言う。つまり、「当初の計画」とは、ブレイクの生涯を見渡しながらか、ブレイクの絵画も視野に入れたブレイク論を書くことだったと考えられる。

当時、ブレイクの「全生涯」を扱った研究書として、柳宗悦『キリアム・ブレイク』（洛陽堂、1914）が存在した。柳の浩瀚な研究書を支えるのは、巻末に置かれた主要参考書一覧である。複製本2点、活版本8点、書翰集1点、伝記15点、評論17点、雑誌5点、目録3点、複製7点、合計58点の書誌情報のそれぞれには、柳による簡潔な紹介文が付け加えられた。例えば、ハウスマン編のブレイク詩集については「序にある論文は参考になる。嘗て‘An Island in the Moon’の原稿の所有者だつたハウスマンは、その散文の三章を此詩集に加へてゐる。此散文は他の詩集に加つてゐない」と書き、エリスのブレイク伝については「著者の態度には他の凡てのブレイクの評論家（例へばサムプソンの如き人迄をも）を嘲る様な調子がある」と辛辣な意見を披露した<sup>4</sup>。これらの寸評は柳が現物を手にしたことを示している。柳は58点の欧文文献にどのようにして触れ得たのか。

欧文文献に接触する場として、柳が在籍した東京帝国大学図書館が考えられる。しかし、柳の友人で英文科の学生であつた長与善郎がブレイクについて卒業論文を書こうとして、外国人教師ジョン・ロレンスに却下された逸話を思い出すならば<sup>5</sup>、当時の東京帝国大学図書館がブレイク関連の文献で充実していたとは考えにくい。むしろ、柳がこれらの文献を自費で購入した可能性が高い。鶴見俊輔は、柳が洋書を次々と購入することができた背景に、母勝子の存在を見る。

柳は、高校生のころから、大変な数の洋書を読みこなし、メチニコフやロッジやロムブローズの著書などをその中から見つけだして自分の養いとしたのだったが、それは、父がなくなってから決してゆたかとは言えない家計の中で、母が、彼の洋書購入を許してきたからこそできたのである。三人の男の子の中の末である宗悦に対して、母勝子は限

---

<sup>4</sup> 柳宗悦『キリアム・ブレイク』、『柳宗悦全集』（筑摩書房、1980-1992）第4巻、494、502頁。 *The Poems of William Blake*, ed. by W. B. Yeats (London: Lawrence and Bullen, 1893); *Selections from the Writings of William Blake with an Introductory Essay by Lawrence Housman*, ed. by Lawrence Housman (London: Kegan Paul, 1893); Edwin J. Ellis, *The Real Blake: A Portrait Biography* (London: Chatto and Windus, 1907).

<sup>5</sup> 柳宗悦「編輯室にて」、『白樺』第5巻第4号（1914年4月）、『柳全集』第5巻、70頁。寿岳もまた「私が神戸の関西学院高等部に学んでいたとき、ブレイクを卒業論文のテーマにすると知った当時の学院長ベイツ博士は、私への愛情から、「ブレイクは狂人だ、なぜ君はあのような狂人を研究の題目にとりあげるのか？」と、なかばあきれ、なかばあわれむように、私をたしなめたものである」と記しているのだから、ブレイクはそのような扱いを受ける存在だったようだ。寿岳文章「ブレイクと日本」、『学燈』第70巻第3号（1973年3月）、『わが日わが歩み——文学を中軸として』（荒竹出版、1977）、81-82頁。

りない信頼をおいていた。<sup>6</sup>

鶴見の見解は柳兼子の証言によって裏付けられる。兼子は宗悦と結婚した時、勝子に宗悦が「御飯にジャムをつけたり、チョコレートを嚙りながら御飯を食べたりする」こと、「神保町から古本買って来ると [ママ]、それを一頁ずつめくって、脱脂綿にアルコールをつけて、一枚ずつ頁をふいている」ぐらいにきれい好きであること、「それから丸善の支払いが多いこと、それだけ言っとくから驚いちゃいけないよ」と言われたという<sup>7</sup>。鶴見は「決してゆたかとは言えない家計」と述べたが、柳の奇癖に柳家の資産の大きさがうかがえる。柳のブレイク研究は柳家の経済力の賜物だった。

翻って寿岳の卒業論文の参考書目を見ると、英語文献は百科事典 2 点、英文学史 2 点、ブレイク関連 12 点で、これらに加えて柳宗悦『キリアム・ブレイク』と山宮允『ブレイク選集』が置かれており、合計 18 点である。柳の主要参考書と比べると、質量共に明らかに見劣りがする。後に寿岳は「本当にブレイクへの愛着が私に根ざしかけたのは、関西学院文学部在学当時、あのエイツが編纂した詩神文庫中のブレイク選集を買ひ求めてからであった」<sup>8</sup>と語っているので、自費で洋書を購入したこともあったようだ。しかし、「日に多くの時間を夜学校の机の前に送って生活の資を得べき境遇」にあり、「中学三年のとき以来学資というものをもらったことがないので、神戸市の裏のほうにある再度山大竜寺という寺に寄食して [中略] 当時神戸市の東はずれにあった関西学院へ入った」<sup>9</sup>寿岳にとって、洋書を自由に購入することは難しかったのではないか。寿岳の参考文献のいくつかは『佐藤清文庫目録』に収録されており、指導教員であった佐藤清が文献を融通した可能性も考えられる。柳と寿岳の参考文献を比較すると、裕福なブレイク研究者柳宗悦と苦学生寿岳文章の研究環境の格差が顕著である。寿岳は卒業論文執筆の背景として、ブレイクの「全生涯を通じて書きたい願ひに燃えてみた」にもかかわらず、それは「私には到底みたされぬ望みであった」と記した。柳の『キリアム・ブレイク』は寿岳の「到底みたされぬ望み」を実現した書物として、寿岳の前に屹立していたものと思われる。

## 2 柳のブレイク研究を踏まえて

寿岳は「第一章 序説」を次のように結んだ。

猶この貧しき研究（もし研究と言ふ名が許されるならば）を草するに当つて、巻首に掲げた参考書のうち、殊に前記 Berger 及び柳宗悦氏の著作に負ふところの多かつた事を

---

<sup>6</sup> 鶴見俊輔『柳宗悦』、『鶴見俊輔集』（筑摩書房、2001）続 4 巻、79 頁。

<sup>7</sup> 柳兼子・水尾比呂志「柳宗悦の人間像」、蝦名則編『回想の柳宗悦』（八潮書店、1979）、346 頁。

<sup>8</sup> 寿岳文章「ブレイク研究への序説」、『ブレイクとホキットマン』第 1 巻第 1 号（1931 年 1 月）、30 頁。

<sup>9</sup> 寿岳文章「柳宗悦を語る」、『展望』第 211 号（1976 年 7 月号）、『柳宗悦と共に』（集英社、1980）、216 頁。

附記して、ブレイクのためにこの篤学なる研究者に対して熱い感謝を捧げたい。(「卒業論文」、10頁)

「柳宗悦氏の著作に負ふところの多かつた事」の一例を「第二章 『ジェルーサレム』の生るゝまで」に見ることができる。この章で寿岳は、ブレイクからトマス・バッツに宛てた「二通の書簡に現れてゐる可謂『最も荘厳なる詩』が何であるか」(22頁)という問題を詳細に論じた<sup>10</sup>。それまで『ミルトン』を指すという説と『ジェルーサレム』を指すという説があったところに、当時のブレイク研究の定本とされたブレイク詩集の編者ジョン・ Sampson は、『ミルトン』と『ジェルーサレム』の共通の原型となった詩が存在したのではないか、という第三の説を示した<sup>11</sup>。

柳は Sampson の説を支持すると述べ、その根拠を六項目に整理して示した<sup>12</sup>。寿岳は「自分も亦柳氏と同じ理由でこの第三説を肯定したい」(24頁)と記し、卒業論文の24頁から26頁にかけて柳の六項目を列挙した。寿岳の議論は全体として柳の受け売りではあるが、完全な受け売りではない。柳の議論に含まれていなかった先行研究を追加し、柳が引用しなかった Sampson のテキストを引用した。また、柳が「その手紙には彼の「敵」に対する考へが多く書かれてゐる」とだけ記した箇所について<sup>13</sup>、ブレイクの手紙の原文を引用して該当箇所を示した。山岳案内人の足跡を忠実に辿る登山者のように、寿岳は柳の『キリアム・ブレイク』を踏襲し、補足を行った。

寿岳はもう一人の先達として Berger を挙げた。ピエール・ベルジェ (Pierre Berger) はフランスのブレイク研究者である。寿岳はなぜベルジェに注目したのか。柳の『キリアム・ブレイク』の主要参考書には、ベルジェの著書について次のような記述がある。

P. Berger: William Blake, Mysticism et Poésie. / Soc. Franç. d'Imprimerie et Librairie, Paris, 1907. / 此本はブレイクに関する最もいい評論の一つとして認められてゐる。<sup>14</sup>

珍しく柳は自身の評価ではなく、当時のブレイク研究における評価を記した。柳は学習院で英語とドイツ語を学習し、1929年に渡欧した際もこれらの二言語を駆使したが<sup>15</sup>、フラ

---

<sup>10</sup> William Blake, '[To] Mr Butts' (April 25, 1803), '[To Thomas Butts]' (July 6, 1803), in *The Complete Poetry and Prose of William Blake*, ed. by David V. Erdman, New Revised Edition (New York: Doubleday, 1988), E728, 730. 同書からの引用は頁数の前に E を付けて示す。

<sup>11</sup> John Sampson, 'Bibliographical Introduction', in *The Poetical Works of William Blake*, ed. by John Sampson (London: Oxford University Press, 1913), p. xlii.

<sup>12</sup> 柳『キリアム・ブレイク』、『柳全集』第4巻、445-448頁。

<sup>13</sup> 柳『キリアム・ブレイク』、『柳全集』第4巻、446頁。

<sup>14</sup> 柳『キリアム・ブレイク』、『柳全集』第4巻、506頁。

<sup>15</sup> 「只因縁と云へば、大拙先生が米国から帰朝せられて、初めて学習院に教鞭をとられた時、偶然に私はその最初の生徒の一人であつた。多分明治四十年頃であつたらう。然もその時先生から教へを受けたのは

ンス語の運用能力については不明である。

寿岳の参考文献にもベルジェが含まれる。

William Blake: *Mysticisme et Poésie*. By P. Berger. (Eng. Translation by Daniel H. Conner.) (「卒業論文」、頁番号無し)

ベルジェの著書の英訳は1914年に出版された。柳の『ウィリアム・ブレイク』は1914年刊行なので、柳は執筆中に英訳版を参照することができず、だから「ブレイクに関する最もいい評論の一つとして認められてゐる」という書き方をしたのかもしれない。そして、柳のこの言葉が寿岳をベルジェに導いたのかもしれない。或いは指導教員の佐藤清の示唆があったのかもしれない<sup>16</sup>。いずれにしても、寿岳はBergerを「バージア」と表記し、ベルジェからの引用を英語で行っている(41、122頁)、英訳版を使用したことがわかる。寿岳はベルジェが「ブレイクを‘The Mystic’『神秘家』及び‘The Poet’『詩人』の両面に区分して観察し、従つて‘doctrine’『教条』と‘works’『著作』とを分類してゐる」ことに触れ、「賢明な研究の方法であるが、私は寧ろその両者を分つ事なく、以て直ちに彼の『想像』の本質に触れたい」(9-10頁)と述べた。ベルジェの研究を受け継ぎながらも、寿岳自身の研究を打ち出そうとする姿勢がうかがえる。ベルジェについて寿岳はこれ以上のことを語らないが、ベルジェのブレイク論に目を向けるならば、寿岳が「Berger 及び柳宗悦氏の著作に負ふところの多かつた」と書いたもう一つの理由が見えてくる。

### 3 ベルジェのブレイク論における仏教

ベルジェの著書『ウィリアム・ブレイク』は「第一部 人」、「第二部 神秘家」、「第三部 詩人」の三部構成である。第二部の「第六章 神秘主義とその多様な形態」で、ベルジェはブレイクの根底に神秘主義がある、と論じた。ベルジェによると、神秘主義とは超自然的な存在に魂の力を集中することであり、その有り様は人によって様々である。しかし、それがどのようなものであれ、現世に対する幻滅を出発点として、よりよいものや真の存在との結合を希求するのが神秘主義の特徴である。それは超自然的な存在との双方向の愛を意味する。従つて、ギリシアやローマのように、崇拜され畏怖される神々のもとでは、神秘主義はあり得ない<sup>17</sup>。このように議論を進めた後、ベルジェは仏陀に言及した。

---

仏教学ではなく、英語であつた。当時私共の独逸語の先生は西田幾多郎先生であつた」(柳「仏法多子なし」、『柳全集』第18巻、272頁)。「明日モスコーでは停車時間が充分あるので、美術館廻りを計画してゐる。車中では英語とドイツ語との交ぜ合せで事が足りて行く」(柳「第一信 シベリアより」、『大阪毎日新聞』京都版、1929年5月28日、29日、『柳全集』第5巻、360頁)。

<sup>16</sup> 『佐藤清文庫目録』にはベルジェの著書の英訳版が含まれている。関西学院大学図書館『佐藤清文庫目録』(関西学院大学図書館、1967)、11頁。

<sup>17</sup> P. Berger, *William Blake: Poet and Mystic*, trans. by Daniel H. Conner (London: Chapman & Hall, 1914),

It was only in the East that any idea of love between gods and men was to be found. Buddha loved all living creatures and was loved by them, “conquering the world with spirit of strong grace.”<sup>18</sup>

ベルジェは、神々と人との愛という考え方が見られるのは「東洋」においてのみであり、仏陀は生きとし生けるものを愛すると同時に、生きとし生けるものに愛され、力強い恩寵の精神で世界を征服した、と述べた。仏陀に関する説明の中でベルジェが引用符に入れて紹介した言葉は、脚注によると‘Edwin Arnold : *Light of Asia*, VIII’に基づく。エドウィン・アーノルド (1832-1904) は英国生まれのジャーナリストであり、ロンドンのキングズ・カレッジとオクスフォード大学を卒業した後、インドの近代的な教育機関とされるデカン・サンスクリット校 (Deccan Sanskrit College) の校長を務めた。在任中にインドの諸言語を習得し、ヒンドゥーの經典の翻訳を手掛けた。帰国後デイリー・テレグラフ紙の記者を務めながら、仏陀の生涯とその教えを韻文で表現した『アジアの光』 (*The Light of Asia*, 1879) を出版した。同書は絶大な人気を博し、英国で 60 版、アメリカでは 80 版まで版を重ね、多くの言語に翻訳されたという。アーノルドはその後日本を訪れ、日本人女性と結婚し、近代日本の進展とその文化について楽観的な著作を残した<sup>19</sup>。

仏陀について語りながら、その根拠として仏典や仏教研究ではなく、仏陀の言葉をもとにした創作詩『アジアの光』を引用するのは、学術的な論証として充分とは言えない。ベルジェは「第十三章 教義の源」においてもブレイクと仏陀を比較した<sup>20</sup>。ベルジェはブレイクの思想の特徴として、知覚と理性の否定、想像力による不可視の世界の認識、可視の世界と不可視の世界との照応、神からの分離としての天地創造、分離を解消することによる神との合一などを挙げ、これらはヒンドゥーの經典に現れており、現在のインドで広く信じられている、と述べる。そしてベルジェは、仏陀の教えとして、自己中心的な自我の破壊を通して人は宇宙全体と靈的交渉をし、そうすることによってすべてを包含する統一体の一部になることができるという考えを示すが、仏典を参照することはない。脚注にドイツの神秘思想家ヤコブ・ベーメの説と共通点があると記して、ベーメについての参考文献を示すにとどま

---

pp. 68-70.

<sup>18</sup> Berger, *William Blake*, p. 70.

<sup>19</sup> Edwin Arnold, *The Light of Asia* (London: Trübner, 1879), p. 237. J. P. Phelan, ‘Arnold, Sir Edwin (1832-1904), poet and journalist’, *Oxford Dictionary of National Biography*, online edn (Oxford University Press, 2004).

<sup>20</sup> Berger, *William Blake*, pp. 198-199. なお *The Light of Asia* の表紙には‘As Told in Verse by an Indian Buddhist’ とあるが、序文冒頭に‘In the following Poem I have sought, by the medium of an imaginary Buddhist votary, to depict the life and character and indicate the philosophy of that noble hero and reformer, Prince Gautama of India, the founder of Buddhism.’ (p. vii) という説明がある。



る<sup>21</sup>。

ブレイクと仏陀を関連付けながら、仏典に触れないベルジェの論述が、仏典に囲まれて育った寿岳の研究者魂に火を付けた可能性が考えられる。寿岳は『ジェルーサレム』より、自我をサタンとみなし、自己中心性に滅びの原因を認め、相愛に理想があることをうたったりを長々と引用した後（70-79頁）、次のように続けた。

一人の胸には一仏の国土を、千人の胸には千仏の国土を建てんとする愛は、自己の完全なる流出、無上なる自我の実現によつてのみ完成される。寂滅とは否定の謂ではない。そは聖教に説いて、『寂滅とは可謂一縁なり。一縁とは是れ最勝三昧なり。此より能く自証聖智を生じ、如来蔵を以て境界となす』（楞伽經勸請品）と言ふものこれである。生死を離れて涅槃なく、また涅槃を離れて生死もない。生命の否定はブレイクにとつて自我の毀損であり、他への愛の排除である。（「卒業論文」、79頁）

仏典を引用し、ブレイクと仏教との共通点を具体的に示すことによって、寿岳はブレイクと自己寂滅に関するベルジェの議論を補強した。

同じように、ブレイクに汎神論を見る研究についても、寿岳は仏典を援用して補足をした。A. C. スウィンバーンは、ブレイクの汎神論には自己放棄（‘self-abnegation’）が含まれ、それを実践したのがイエスであり、「東洋の汎神論的な詩」（‘the Pantheistic poetry of the East’）との類似が見られる、と指摘した<sup>22</sup>。柳はブレイクの特徴として「汎神論的見解」を挙げ、「特にその想像又は生命の観念に於てブレイクの思想は本質的に東洋最古の哲学思想を示してゐると云はねばならない」と記した<sup>23</sup>。寿岳も山川草木すべてに人の姿が見えることをうたったブレイクの詩を引用して<sup>24</sup>、次のように述べた。

これは実大乘仏教の『我は己に一切の煩悩を断除す。我は己に一切の習気（じっけ）を浣滌（くはんてき）す。我は己に諸心の智慧を択び、大悲平等にして、普く衆生を観るに猶ほ一子の如くす。云何ぞ声聞の弟子の、肉を食ふことを許さんや。何（いか）に

---

<sup>21</sup> ‘Buddha himself, also, taught the doctrine of regeneration through the destruction of the “ego,” the detachment of ourselves from all that is individual in us, so that we may enter into communion with the whole universe, and become at last an integral part of the great Whole in the all-embracing Unity which is God’ (Berger, *William Blake*, p. 199). Franz Hartmann, *The Life and Doctrines of Jacob Boehme, the God-taught philosopher* (London: Kegan Paul, 1891).

<sup>22</sup> Algernon Charles Swinburne, *William Blake: A Critical Essay* (London: John Camden Hotten, 1868), pp. 263, 301.

<sup>23</sup> 柳『キリアム・ブレイク』、『柳全集』第4巻、362頁。

<sup>24</sup> ‘Each grain of Sand / Every Stone on the Land / Each rock & each hill / Each fountain & rill / Each herb & each tree / Mountain hill Earth & Sea / Cloud Meteor & Star / Are Men Seen Afar’ (Blake, ‘[To] Mr [Thomas] Butts’, September 23, 1800, E712).

況や自ら食（くら）はんや』（楞伽經断食肉品）の信仰と相通ずる菩薩の行願である。汎神論の極致は実にこゝに存するのである。（「卒業論文」、130頁）

寿岳はブレイクのテキストを分析しない。自我の寂滅や汎神論のように、鍵となる概念を抽出し、その概念と呼応する仏典を提示するという形で論を進める。「第三章 ジェルーサレムの内容」で『ジェルーサレム』の大筋を「太古の原人 Albion（アルビオン）が、神を出でて再び神に皈る歓喜の歌」とまとめた時も、寿岳は「その分離と結合とは、かの華嚴經の入法界品に於て善財童子が象徴する靈魂巡礼の記録である」（49頁）と述べた。自我の寂滅については「これこそは人間最後の祈願、詩人最高の情熱である。六度（ろくど）を修行する菩薩の念願である」（54頁）と記して、ブレイクと仏教を結び付けた。ブレイクの想像についても『「想像」とは即ち「到れる彼岸」である。‘Bodhi’『菩提』である』（138頁）と説明し、卒業論文の末尾に「華嚴經盧舎那仏品の、『此の蓮華蔵、世界海の内に於いて、一の微塵の中に一切の法界を見る』微細相容の姿を見て、この拙ない小論を終る」（140-141頁）と記し、ブレイクの「無垢の予兆」（‘Auguries of Innocence’）より冒頭4行を引用して締めくくった<sup>25</sup>。

#### 4 寿岳文章の卒業論文

『ジェルーサレム』成立の経緯、内容、文体、ブレイク神話の構造、ブレイクにおける想像力の位置付けについて、寿岳は先行研究に基づいて堅実な議論を展開した。それが堅実であったのは、寿岳が『ジェルーサレム』と『ジェルーサレム』研究について勉強し、その成果を忠実に披露したからであり、逆に言えば、そこに新味はない。寿岳の卒業論文の特徴は、ブレイクのテキストと仏典からの引用を並置したところにある。結果として、ブレイクと「東洋」の思想との類似について不十分な指摘に終始していた当時のブレイク研究を、ブレイクと仏典とを対比することによって、類似を事実として示した。寿岳の関心がブレイクを論じることよりも、ブレイクと仏教との比較にあったことは、晩年に当時を回想して、関西学院の「卒業論文は「ウィリアム・ブレイクの思想に見出される華嚴思想の用語」であった」と語ったところに見てとれる<sup>26</sup>。

寿岳が準拠した Sampson 編ブレイク詩集は当時のブレイク研究の定本ではあったが、『ジェルーサレム』の全文ではなく、Sampson が選択した三十の抜粋を収録している。寿岳はそのうち二十三の抜粋を引用し、日本語訳と解説を付けた。独善性や自己中心性からの脱却をうたったブレイクのテキストを論評する時、寿岳は仏典に言及した。ブレイクに善悪

---

<sup>25</sup> ‘To see a World in a Grain of Sand / And a Heaven in a Wild Flower / Hold Infinity in the palm of your hand / And Eternity in an hour’ (E490).

<sup>26</sup> 寿岳文章「ウィリアム・ブレイクと柳宗悦の大いなる出会い——向日庵本の思い出をこめて——」、寿岳文章訳『ブレイク詩集』（岩波文庫、2013）、287頁。初出はウィリアム・ブレイク『無染の歌 無明の歌——向日庵私版』寿岳文章訳（集英社、1990）全3巻。

の二項対立を超越する「肯定の思想」を読みとった柳と同じように<sup>27</sup>、寿岳もまたブレイクの宗教性に注目した。寿岳はブレイクの「想像」について、次のように述べた。

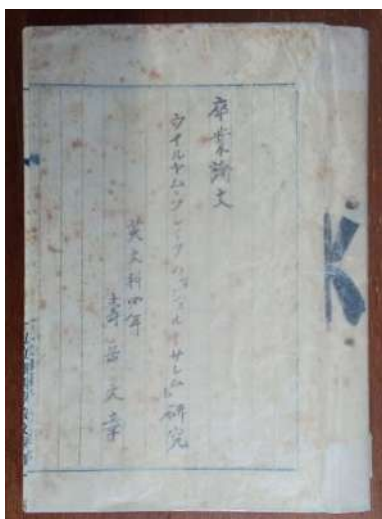
彼を神につなぐ糸、それが彼の想像である。彼を時代の民意につなぐ糸、それが彼の想像である。宗教と芸術の名に於て、彼を一切の宇宙的關係、時間的因果につなぐ糸、それが彼の想像である。（「卒業論文」、127-128 頁）

「時代の民意」という言葉を用いることで、ブレイクの芸術が宗教性だけでなく社会性を帯びていたことを寿岳は強調する。寿岳はさらにブレイクにおいて「愛」と「想像」が同義語であることを指摘し、「愛は理解にもとづき、理解は想像より生るゝからである。無道と残虐とは想像なきによるところの罪業である」（128 頁）と続けた。理解に基づく愛を平和の礎と見るならば、「無道と残虐」の事例の一つが戦争である。

卒業論文を執筆してから半世紀が過ぎた頃に、「民芸運動は、それを支える堅固な土台として、平和を守りぬく強い信念に徹しなくては、本物にならないのではないか」と寿岳は記した<sup>28</sup>。長く続いたベトナム戦争を意識した言葉と思われる。卒業論文で柳とベルジェに導かれるようにして、寿岳がブレイクに見てとった、宗教性と社会性が一体化した芸術と万物の共生を探求する思想は、寿岳自身の芸術観を貫くものでもあった。

#### 付記

本論は日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (C)「ウィリアム・ブレイクとウィリアム・モリスにおける自他共生思想の比較研究」(19K00388) の研究成果の一部である。



寿岳文章「卒業論文 ウィリアム・ブレイクの『ジェルーサレム』研究」(1923年)  
関西学院大学学院史編纂室所蔵

<sup>27</sup> 柳『キリアム・ブレーク』、『柳全集』第4巻、94頁。

<sup>28</sup> 寿岳文章「私の民芸教室」、『日本の民芸』第246号(1976年3月)、『わが日わが歩み』、295頁。

## 壽岳文章のウィリアム・コベット小伝

川端 康雄（日本女子大学文学部英文科教授）

### アテネ文庫

日本での書籍の一形態として文庫本はごく一般的なもので、大型の書店をのぞいてみるとその種類の多さに圧倒される。そんな文庫のなかでも盛衰があって、最近興隆した文庫もあれば、新潮文庫（1914年創刊）や岩波文庫（1927年創刊）のように長命を保っていまなお健在の文庫もある。そしてもちろん、廃刊となって久しい文庫もある。後者のなかでは、旺文社文庫やサンリオ文庫、あるいは福武文庫といった名が思い浮かぶ。そして本稿で取り上げる壽岳文章の著作『この英国人——ウィリアム・コベットの場合』は、これもいまはないアテネ文庫から1949（昭和24）年に出されたものだった。中身の前にまずこの文庫について概要を記しておく。

アテネ文庫の版元は弘文堂で、長らく法学系・社会学系の書物の刊行で知られている。創業は1897（明治30）年なので老舗といってよい。創業者は京都人の八坂浅次郎（1876—1948）で、当初は寺町通押小路（京都市中京区）で弘文堂書店として古書店を営んでいたが、大正期に入って丸太町通寺町東への移転を機に出版業に乗り出し、1917（大正6）年に河上肇著『貧乏物語』を刊行したのが爆発的に売れて大成功を収めた。1936（昭和11）年、東京神田駿河台に支店を設立。1938（昭和13）年、左京区田中西浦40に移転。同年に本社を東京に移したが、編集・製作は京都でも継続、昭和20年代の改組（合名会社から株式会社弘文堂へ）までは長らく京都の出版社というイメージが色濃く残っていたように思われる。

アテネ文庫は1948（昭和23）年3月に創刊され、1960（昭和35）年4月までの13年間に併せて301点を刊行した。A6判サイズ、8ポイント活字で組まれ、基本が64頁という薄い冊子で、内容は人文学から自然科学まで広くカバーし、スタイルも評論、評伝、エッセイ、概説、詩集など多岐にわたる。創刊時の1948年3月といえば、敗戦からいまだ2年半で戦後復興の途に就いてそれほど日がたっていない。いまから見れば新刊書も極めて少なく、読書層にとってはいわば書物の飢餓状態にあった時期だといえよう。清水康次氏は「あらゆるジャンル・さまざまの形式を試みながら、矢継ぎ早にコンパクトな小冊を多産」していき、「絶対的な本の欠乏状況に対して、いわば、干ばつの地にスコールを降らせるように、301点を供給して」<sup>1</sup>といったこのアテネ文庫の文化史的意義を強調している。文庫各巻の巻末に附された「アテネ文庫刊行のことば」は戦後日本の復興期における出版人の気概と志を示している。その全文を引いておこう。

---

<sup>1</sup> 清水康次「『アテネ文庫』の研究（その1）」『京都光華女子大学研究紀要』44（2006年12月）、4頁。

昔、アテネは方一里にみたない小國であつた。しかもその中にプラトン、アリストテレスの哲學を生み、フィヂアス、プラクシテレスの藝術を、またソフォクレス、ユウリピデスの悲劇を生んで、人類文化永遠の礎石を置いた。明日の日本もまた、たとい小さく且つ貧しくとも、高き藝術と深き學問とをもつて世界に誇る國たらしめねばならぬ。

「暮しは低く思いは高く」のワーズワースの詩句のごとく、最低の生活の中にも最高の精神が宿されていなければならぬ。本文庫もまたかかる日本に相應しく、最も簡素なる小冊の中に最も豊かなる生命を充溢せしめんことを念願するのである。切り取られて花瓶にさされた一輪の花が樹上に群る花よりも美しいごとく。また彫刻におけるトルソーが、全身において見出されない肢節のみのもつ部分美を顯現するごとく。

壽岳文章はアテネ文庫で2点執筆している。創刊時に同時刊行された15点に含まれる『河上肇博士のこと』（文庫 no. 2）、そして1949（昭和24）年3月に刊行された『この英国人——ウィリヤム・コベットの場』（文庫 no. 47）である。前者は河上肇（1879—1946）の死からまもなく書かれた追悼文で、河上の子息の家庭教師をつとめた回想をふくめ、直に知る河上についてのエピソードにその思想の共感者としての壽岳の称揚が綴られている。河上と壽岳との関係、壽岳が受けた影響を検証するうえで必須文献のひとつであろうが、本稿ではそのテーマには立ち入らず、後者のコベット小伝について見ていきたい。

### 「変わり者」で「實際的」な英国人

まず著者は英国における「変わり者」の系譜に連なる人物としてコベットを導入する。本文開始前に一頁を取って挿入りのエピグラフとしてシェイクスピアの『ハムレット』の第5幕第1場、墓掘りとハムレットとのダイアローグを引いている。デンマーク王クローディアスが邪魔者のハムレットをイギリスに送って亡き者にしようとしたが、王子は機転を効かせて密かに帰国した。墓掘りは話し相手がハムレットであることを知らず、彼が気が狂ったためにイギリスに送られたのだと説明する。

ハムレット　なるほど。だがなぜイギリスへやられたのだ？

墓掘　そりゃ気狂ひになつたからさ。あの国に居れば正氣に戻るよ。よしまた正氣に戻らなくつても、一向構はないことになつてゐる。

ハムレット　そりゃまたどうして？

墓掘　眼立たないから。何しろあそこでは皆が同じくらひ気狂ひと来てゐる。

—シェイクスピア—<sup>2</sup>

---

<sup>2</sup> 壽岳文章『この英国人——ウィリヤム・コベットの場』弘文堂（アテネ文庫）、1948年、2頁に引用。以下、『この英国人』からの引用箇所については本文中に頁数を注記する。

イギリス人に変人が多いのは何を意味するのかという問いを立てる導入として劇的アイロニーの典型といえるこの対話を引いてくるのは、読者への「掴み」として効果的であろう。アメリカ人のラルフ・ウォルドー・エマーソンが「イギリス人の変人ぶりを絶対に確保された自由の表看板と見た」ことを特筆して、著者はこう続ける。

絶対の自由は個性の確立に直結するであらう。一切他人の生活に干渉せず、めいめいが好きずきの生活を営んでゆく。秋が深くなっても、隣りは何をやる人ぞと恋しがらないのがイギリスの流儀である。しかしそれでいて、別段秩序が乱れるでもなく、社会の関節はきちりとつながつてゐるやうだ。もし「ハムレット」に出てくる墓掘の言葉通りに、イギリスを一箇の大きな瘋癲病院と見做すなら、そこにはアジア的な絶対主義の物さしでは到底測り知られぬ健康な狂気、或は狂気健康性とでも言ふべきものがあつて、個性の発揮と集団の秩序とが、強ひられない調和をたもち、正気であるつもりで他人を羨しがらせる。かう言ふイギリス人の性格の基盤には、一体何がひそんでゐるのであらうか。(3頁)

この問いから、「イギリス人の性格の著しい特徴」として「実際性」を著者は特筆し、「積分型」と「微分型」という対立概念を用いて、長らく「積分型」の人間が主であったのが、近世以降に「微分型」人間が増大し、「積分型」は少数派になったと言う。イギリス人は「議会制度や産業革命などを高速度に且つ甚だ実利的に発達させ、その限りに於いては、近代文明圏に属する世界中の殆どあらゆる国家を征服」した、それは「近世資本主義の典型的な軌道」に沿つての道筋であったのだが、それに伴つて人間の「微分的傾向」が激化していった。少数者となった「積分型」の人びとは、産業化の進展のなかでも「楽しい古いイギリス」への郷愁を捨てることなく、「新しい金融的・産業的国家」(ドーソン)への反抗者として重要な働きを及ぼしたと著者は見る(6頁)。ヴィクトリア朝期におけるこの反抗者として著者はジョン・ラスキン、マシュー・アーノルド、チャールズ・ディケンズ、ジョン・ヘンリー・ニューマン、ウィリアム・モリスといった人びとの名前を挙げる(7頁)。別言するならば、イギリスが権勢を誇る19世紀においてそのマイナス面にあえて目を向けて、産業化のもたらす弊害を批判した文人たちということになる。こうした名前を挙げた後で、彼らの先人としてヴィクトリア朝以前に時代の趨勢に抗つた人物として本書の主人公ウィリアム・コベットの生涯の記述に入つてゆく。

### コベットの生涯への壽岳の共感

上記のラスキン、アーノルド、ディケンズ、ニューマン、モリスといった面々と比べて、コベットは英文学研究、あるいはイギリス思想史のなかで取り上げられることは少ない。日本で名前を知る人はあまりいないのではないだろうか。いまから40年近く昔に出た研究社

版の『英米文学事典』（第三版）ではコベットはこう略述されている。

イギリスの著述家・政治家・農業家。Surrey の農民の子。8年間兵士となり、のち 1792 - 1800 年アメリカにいて、‘Peter Porcupine’の筆名でイギリスびいきの小冊子や *Porcupine's Gazette* を発行した。帰国後、週刊誌 *Political Register* (1802-35) を創刊し、はじめは Tory を支持したが、数年にして急進主義に移行し、Tory および Whig 双方に反対して、労働者・農民のために議会と経済の改革を唱え、同誌は国内で最有力の改革運動機関誌となった。論争的著述家として当代無比で、たびたび筆禍も招いたが、1832 年の議会改革後、国会議員に選ばれた。数多い著書のうち、農民と農業に関する彼の識見を示す紀行 *Rural Rides* (1830) は名文としても聞こえ、有名な *A Grammar of the English Language* (1838) は労働者解放の一助として書かれた。ほか *Cottage Economy* (1822), *Advice to Young Men* (1830; 日付け前年) などがある。(青)<sup>3</sup>

壽岳のコベット伝では、公的なキャリアについては概ねこれを踏襲するかたちで記述される。同時に限りあるスペースのなかで丹念に書き込まれているのが母や妻らとの私生活の細部である。主人公のウィリアムは四人兄弟の三男だった。父のジョージは農家の雇われ人だったが、勤勉家で「〔英国南部サリー州の〕ファーマムのウェイ河の畔に『陽気な田吾作』と云ふ屋号の旅宿を営み、文字通り陽気な自作農として独立する身分となつてゐた」。母のアンはといえば、読み書きがまったくできなかつたという。ウィリアムは幼少期から読み書きを覚え、のちに著述家として身を立てることになるのだが、母が無学であることを決して欠点とは考えなかつた。「農家の主婦としては、それよりももつと大切な資格の必要さを、後年コベットは幾度か筆にしてゐる」（11 頁）。ある農家の主婦を讃えたコベットの文章を引用しつつ壽岳はこう書いている。「『この婦人は読みも書きもできなかつたが、パンの作り方、ビールの醸造法、牛の飼ひ方、豚の育て方、肉の塩漬法、家禽の飼ひ方、蜂蜜の取り方、蠟燭の代りに使ふ燈心の製法等に至つては、もののみごとくに心得てゐた。』思ふに彼の母も、かうした型の婦人であつたに違ひない」（11-12 頁）。

コベットが初恋の少女アンを妻としたいきさつについても著者は敬意と共感の意を込めて記述している。軍隊に入っていた 21 歳のときのある朝、町中を歩いていると、ある家のかたわらで洗濯仕事に集中している少女を見かける。顔がよく見えないけれども、美しい少女に違いないと彼は思い込む。「しかし顔だちの美しさよりも、余念なく洗濯するそのきまじめな物ごしが、なにとはなく、なほ強くコベットの心を惹き、咄嗟に、この少女を措いて、他日自分の妻となるべき人はこの世にみないと思ひ定める。〔……〕人事百般、最初の直感を躊躇なく実行に移すと言ふのが、彼の主張であり主義であつた」（19 頁）。このとき少女

---

<sup>3</sup> 齋藤勇・西川正身・平井正穂編『英米文学事典』第三版、研究社、1985 年。なお、「(青)」とあるのはこの項目の執筆者が青木雄造であることを示す。

は 13 歳、9 年後の 1792 年に二人は結婚、幸福な結婚生活を送る。妻を称賛するコベットの文章を著者は以下のように引用する。

愛がやつて来て、私をこの恐ろしい奴隷状態から救った。私の時間の凡てを、思ひのまま使へるやうにしてくれた。私を空気のごとく自由とした。考へてゐることを他人に伝へたいのが天性の、私の心の働きの上に置かれてみたあらゆる抑制をとり除いた。さうして、仕事のほかに時間を共にすごすひとりの伴侶を与へてくれたが、その伴侶は、所謂学問を身につけるどんな機会にもめぐまれなかつたにも拘らず、まこと多くの良識と、まこと多くの有用な知識とを有ち、実に無邪気で、挙措動作が極めて正しく、思ひ、言葉、また行ひが非常にきよらかであり、依怙地なところは少しもなく、非常に鷹揚で、ある限りの愛情を私と子供たちにささげ、微塵も自分を伴り飾らうとするところはなく、しかもそれでゐて実に美しく、よくしゃべり、その聲がまたまことにうるはしく快いので、神の摂理によつてこの婚姻の結果私の得た健康と能力とを思ふと、もし私が今までに成しとげてきた程度のことを成しとげずに怠けてみたとしたら、定めし私は犯罪者であつたに違ひないとの感が深い。また私はいつもかう言つてきた、もし私の国が、私の働きに対して何程かの謝恩の念を感じずるとすれば、その謝恩の念は、私に対して寄せられるのと全く同量に、アンに対してもまた寄せられねばならない、と。(22-23 頁)

このくだりに壽岳の妻静子に対する密かな称賛の辞が隠されていると読むこともできるのかもしれない。むろんコベットの妻とは異なり静子の読み書く力は非凡なものだった。だが上の引用で言祝がれているアンの美質を静子も備えている——そのように二者を重ね合わせてみたくなる。コベット夫妻の幸福な結婚生活について文庫の限られた分量のなかで比較的多くの紙数の紙数を費やしていることの裏に、壽岳夫妻自身の生活への暗黙の称賛が示されているように私には読めるのである。

### 『田園騎乗』の魅力

コベットの数ある著作のなかでももっとも名高い『田園騎乗 (*Rural Rides*)』についても、壽岳ならではの記述が見られる。これは 1832 年 7 月から第一次選挙法改正案が議会通过するまでの 11 年間にわたって、イギリスの農村を息子あるいは従者一人を伴って訪ね歩いた紀行文だった。コベットが 58 歳から 69 歳までの時期にあたる。騎乗は一日平均で 20 マイル (約 32 キロ) から 30 マイル (約 48 キロ) に及んだ。この「隈もおちず見て歩いたイギリス農村生活の実態報告」の足跡は「殆どイングランドの全州に亘り、至るところ触目の事象に対し事情から発する率直な感懐がしるされる」(48-49 頁) として、壽岳は具体的な記述を列挙していく。

数多くの家畜が悠々と草を食み、畑には金色の穂波のうつ豊かな村景が眼に入ると、農



民の産児制限を説くマルサスをつれてきて面罵したい衝動を覚える。サセックスやセントでは、村の少女たちの血色の良さが、いたく彼を喜ばした。しかし行きずりのどの労働者も青菜のやうな顔色をしてゐる教区へはひると、教会へ納める十分の一税がいまいまして、広大な牧師館にじろりと嫌悪の流し眼を与え、畑に下り立つて刈株をつつく鳥を見てさへ、その真黒な色から、無為徒食の国教会牧師の法服が連想されてやりきれぬ。イギリス農民を特色づける途方もない偏見や矛盾や頑固さが全巻にみちみちてゐながら、この書物が既にイギリス文学の古典の一つとなり、数多くの読者に親しまれてゐることの秘密は、それが徹頭徹尾、コベットその人の全人格を以て書かれてゐるからに他ならない。どんな些細な一句にもコベットが生きてゐる。(49頁)

「楽しい古いイギリス」を留める風景を見れば慰安され、逆に「ブルジョア好みの近代風都市」への批判は激烈である。また、当時湯治場であったチェルトナムをコベットは「東インドの富をふんだくつてきた亡者ども、西インドで奴隷を鞭打つてしこたま金を儲けた連中、税金で腹をふくらしたイギリス人などが、男女を問はず、あらゆる種類の大ぐらひ、酔ひどれ、道楽者と一緒に、数々の罪悪や不義の祟つてきた体の病気を治さうと、陰で笑ふ藪医者 of 指図に従ひ赴くところ」と定義し、「このやうな場所へはひる時には、私はいつでも指で鼻をつまみあげてみたい衝動を覚える」(51頁)と、嫌悪の情をこれでもかというばかりに書き連ねる。好悪両面について筆を走らせる際に迸るコベットのエネルギーに読者は圧倒させられる。そんな『田園騎乗』の魅力が壽岳は読者に過不足なく伝えている。

壽岳はウィリアム・モリス(1834-96年)の先駆的な研究者としても知られているわけだが、モリス自身が『田園騎乗』の愛読者であったことをここで想起しておいてもよいだろう。コベットとモリスとは、世代の差(生まれた翌年にコベットは没している)のみならず、両者の政治的信条においても相違があるものの、田園への愛着、産業化と近代都市への嫌悪などについては共有している。大都市ロンドンを評したコベットの「大きな腫物(Great Wen)」という表現をモリスはたびたび自著で援用している。『ユートピアだより』の未来社会の景観は、コベット自身が嫌悪したイギリス近代の諸要素がすべて廃棄された世界であると見ることもできる。コベット、モリス両者に壽岳が深い愛着を抱いたのも故なしとしない。

### 壽岳のコベット小伝の意義

『この英国人』の「あとがき」の日付けが「一九四八年晩秋」となっていることからして、本書の執筆は1948(昭和23)年であったことが明らかである。『壽岳文章・しづ著作集』に再録された版では初出時の「あとがき」は割愛されているが、末尾に「昭和二十三年」と執筆年が明記されている。<sup>4</sup> 未だ占領下であり戦後復興にあたっていた日本の読者層に向け

<sup>4</sup> 『よき人を語る 壽岳文章・しづ著作集3』春秋社、1970年、79頁。

てコベットの生涯を解き明かす壽岳の狙いはいかなるところにあったのか。この拙稿で十分な論証はできず、示唆するだけにとどめることにするが、それは冒頭で引いたコベットのな「積分型」の観点の必要という点にあったのではないか。

明治期以来の国家規模の殖産化の推進は権威主義体制の瓦解とともに敗戦によって頓挫した。戦前から壽岳は「文明の微分的傾向」がもたらす弊害について、例えば日本全国の紙漉村の訪問を通じて具体的に感知していたように思われる（ついでながら、妻を伴っての彼の紙漉村行脚とその記録は、コベットの農村の旅と『田園騎乗』を想起させるところがある。夫妻はもちろん馬で旅をしたわけではなかったのであるにせよ）。その後日本は高度経済成長期に入り、「微分的傾向」は戦前にも増して強まり、農村および都市の様相も様変わりした。壽岳の目から見て、変わってはならぬもの、なくしてはならぬものが時流に合わぬものとして打ち捨てられた。『この英国人』は、そうした迷妄の方向に社会が突進せずに、工芸なり、風習なり、古くからの価値あるものをいまに活かしつつ暮らしを営んでゆく道筋を暗に示している書であるように私には読める。コベットは経済成長をアприオリに肯定する見方を疑問視し、むしろ社会の「持続可能性」に価値を置いていたと言える。「あくまでも土臭かつた」コベット——「密室の中でしめやかに、または密かに読むには適せず、日の光がふりそそぎ、また風が颯々と吹き過ぎてゆく戸外で読むにふさはしい文章」（60）を書いたコベットの生涯と仕事を復興期の日本の読者に解き明かすことで、壽岳は今後社会が進むべき道、指針を示し、またそこに含まれる希望を共有しようと図った——アテネ文庫のこの一冊の小著には、そんな大きな狙いが込められていたと、75年後のいま再読して感じられるのである。



壽岳文章『この英国人』（アテネ文庫、1949年）表紙

## 寿岳文章の書物愛 ——出版文化を主軸に

長野 裕子（特定非営利活動法人向日庵理事）

書物ずきには、読書家、蔵書家、愛書家の三つのタイプがある、と寿岳文章（1900-1992）は大別する。読書家は専ら注意を内容に向けて、書型、装釘、用紙にはこだわらず、ただ正確に内容を摂取しようとするタイプの人、蔵書家は、内容は問題にせず、珍しい版、装釘や活字、用紙がみごとな本をできるだけ数多く集めることを誇りとするタイプの人である。そして愛書家とは、書誌学者ウィリアム・ブレイズ（1824-1890）が『書物の敵』に示したような、火、水、埃、蟲、などの書物にとってのあらゆる「敵」から書物を守る人である、と定義した<sup>1</sup>。

寿岳の場合はどうか。自身、向日庵私版における書物の作り手として、つねに読者本位にたった書物のすがたを追求する出版者であろうとした。「すぐれた読書人でなければすぐれた書物をつくれぬ」と寿岳はいう。寿岳は、林達夫が編集長を担った『世界大百科事典』（平凡社、1958年）において「書物」「装幀」の項目を執筆したが<sup>2</sup>、いずれにも読書人としての視点がみとれる。「書物」の項目においては、「核兵器が無制限に用いられるとすれば、それがどのような形の書物にとっても最大の敵となるであろう。今後の書物の運命は、ひとえに、人間がどんな社会を作るかにかかっている。」とむすび、「将来の書物」のありかたを「人間の運命」として問うた。「装幀」の項目においては、「印刷者が出版者でもあった時代には、製本師が出版社と読者との間に介在して装幀するのを常とした」が、今日では、たとえば表紙の「ジャケット（おおい）」についていえば「書物を保護するよりは、多く売るための商業主義に由来する」と述べ、装幀がもつ本来の目的の変容を示した。

寿岳は、書物の世界の三つの頂点を「著者」「読者」「出版者」におき、出版事業の役割とは三者に共通の利益をもたらすことである、とした<sup>3</sup>。ブレイズがいう「書物の敵」とは「物体としての書物」にとっての敵であるが、一方、書物を「読者」の視座からとらえる寿岳にとっての「書物の敵」とは、人のうちに潜む存在ではなかったか。寿岳が生きた1900年から92年間の歳月と時代において、日本の出版文化はなにを経験してきたのか。明治から大正にかけて、日本においては活版印刷の黄金時代であった。文章少年が愛読した雑誌や書籍にもその時代性が反映されているはずである。1923年の関東大震災をきっかけとして昭和初期の出版界にも地殻変動がおきた。それは寿岳が、書誌学や書物工芸に目醒め、向日庵私版を花開かせた時代でもあった。そして、書物の書き手、読み手にとって生命を奪われた暗

<sup>1</sup> 寿岳文章『書物への愛』（栗田書店、1959年）、pp. 38-39., p. 50.

<sup>2</sup> 寿岳は『世界大百科事典』（平凡社、1958年）において「地獄」「書誌学」「書物」「装幀」「ケルムスコット・プレス」の項目を執筆した。

<sup>3</sup> 寿岳文章『書物の世界』（出版ニュース社、1973年）、p. 33.

黒の時代、戦中戦後にかけての書物をめぐる禍については、戦争体験が後世に語り継がれるべきであるのと同様、繰り返してはならない史実として記憶にとどめておくべきであろう。

本論では、寿岳が歩んだ「書物道」の足跡を、同時代の日本の出版文化における歴史の証言として捉え、それらが示す普遍的な書物の存在意義を探りたい。時代のなかで寿岳が到達した出版と読者をつなぐ書物論は、現代にこそ説得力をもって響くにちがいない。

## I. 活版印刷黄金期における光と影

### 印刷・活字への愛着

真言宗寺院に生まれた寿岳文章は、部屋にかかる扁額の「谷響重来」の文字を見せられると泣き止むような赤ん坊であったという。「表装」や「装幀」への興味がすでに芽生えていたのか、小学校へ通うようになると、校長先生が読む教育勅語の巻物を真似て、奉書紙に教育勅語を書き写し、母からもらった反物の芯になっている桐の丸棒と織物でつくった。これが最初の「自表装巻物」であった、と寿岳は自身の最初の書物との触れあいを振り返る<sup>4</sup>。

小学生のころに愛読した少年雑誌『日本少年』（実業之日本社）は、ちょうど1906年に創刊されたばかりで、当時は江戸川乱歩も読み耽ったという『冒険世界』（博文館、1908年創刊）や『少年倶楽部』（大日本雄弁会、1914年創刊）、文章少年が親しんだ『少年園』（少年園社、1888年創刊）や『少年世界』（博文館、1895年創刊）など、少年たちの想像力をかきたてる魅力に満ちた人気雑誌が多くあった。「もと秀英舎で印刷されていた『日本少年』がいつからか日清印刷で印刷されるようになり、それが秀英舎の活字と印刷ぶりを好んでいた私にひどく物足りなく、新しく雑誌が届く度に今度は秀英舎かと胸を躍らせてあけてみてはいつも失望を感じたことを思い出す。<sup>5</sup>」「その形、その活字、その木版さし絵が、今もなお私の脳裏にはっきりと印影されているのは、土蔵の二階で何冊か見つけた雑誌『少年園』である。<sup>6</sup>」と寿岳は幼い頃の読書体験を回想する。この「印刷への本能的な関心」の芽生えは、十五歳の文章に「印刷された字体への不思議な識別力」としてさらにはっきりと意識されはじめる。「私は印刷された活字体をひとめみると、その印刷がどこで行われていたかが、本能的に活字のくせですぐに見わけられた。友人が新しい本を買ってくると、まず私は奥付を見ずにそれがどこで印刷されたかを言いあてて友人を驚かした。同級生のうちには『寿岳は本屋へ行ってさきに奥付を見てきとる。』などと言うものもいた。<sup>7</sup>」東京で出版される雑誌や書物の印刷は、おもに秀英舎、築地出版、三秀舎、日清印刷に限られていた当時とはいえ、のちに書物づくりに携わる寿岳の活字と印刷に対する愛着心は、すでに文章少年の読書体験のなかで培われていたといえよう。

<sup>4</sup> 寿岳文章「向日庵夜話」『書物の道』（書物展望社、1934年）、p. 36-37.

<sup>5</sup> 前掲書、p. 38.

<sup>6</sup> 寿岳文章「土蔵の二階で」『寿岳文章書物論集成』（沖積舎、1989年）、p. 860.

<sup>7</sup> 寿岳文章「向日庵夜話」再掲、pp. 38-39.

## 土岐善麿とローマ字

十五歳の寿岳は、郷里播磨の真言宗寺から京都に出て、宗立東寺中学の二学年生に編入学する。「文学がすきなのに、一軒の本屋もない田舎で小学校尋常科卒業後の数年を送ってきた私は、その間の文学への飢えを一挙にみたす勢いで、東寺から一番近い烏丸仏光寺東に入るにあった東枝という新聞販売と書籍取次とを兼ねた店へ毎日のように通い、片っ端から新刊の文学書を手にとって拾い読みした。」と寿岳は回想する。乏しい学費をさいて毎号購読予約をした雑誌のなかには歌人の土岐善麿が 1913 年に創刊した『生活と雑誌』（東雲堂書店）もあった。「寺に生まれて、寺を守るべきか寺を捨てるべきかにその頃から思い悩んでいた」中学生の寿岳は、同様に寺院出身である土岐に特別な親近感を抱いた。

1925 年のこと、京都大学の英文学徒であった寿岳は「敬念に駆られて」土岐に年賀はがきを送る。土岐の影響をうけて「日本式ローマ字運動」に関心を持ち、ウィリアム・ブレイクの名画「チョーサーのカンタベリ巡礼者群像」を複製して「ひとのよのすがたとみればカンタベリの道者のむれもなつかしきかな」と「自作のまづい短歌一首をローマ字でその下に印刷したもの」であった。「私はその行為だけで心満ち足り、まさか土岐さんから返事が来ようなどとは夢にも思っていなかった。」と歓びを回想する。やがて「名もない一大学生」である寿岳のもとに届いた土岐からの年賀はがきは、「うぐいすの卵手にとりて下目黒」と始まる一首を、寿岳が想像した通りローマ字で印刷したものであった。「この年賀ハガキ交換が爾来五十五年にも及ぶ心の通いの発掘であった。」と寿岳はのちに土岐善麿への追悼文を寄せている<sup>8</sup>。

土岐善麿（1885-1980）は哀果と号した歌人で、ローマ字綴りによる文学表現を追求し、一首三行書きのローマ字歌集『NAKIWARAI』（ローマ字ひろめ会、1910 年）を出版した。明治期以降、世界に通用する利便性や能率重視の観点からローマ字への関心が高まりをみせ<sup>9</sup>、文芸においては土岐のほか、島崎藤村『ローマ字藤村詩集』（研究社、1917 年）、北原白秋『思ひ出』（阿蘭陀書房、1918 年）など、文学表現としてのローマ字がそれまでにない「モダン」な印象を作品にあたえた。

児童にもローマ字に親しむ読書環境がそなえられていた。文章少年が愛読した雑誌『日本少年』には、「英字欄（えいじらん）EIJIRAN（エイジラン）」として、英語、日本語、ローマ字綴りによる日本語、の三列併記による会話文が掲載されている。筆者「Sosui」による文例をみてみよう。「*Father*：“I’m the captain of this ship”／父『私は此船の船長だよ』／*Chichi*：“Watakushi wa kono hune no senchōdayo.”」*Mother*：“Then I suppose I’m the

<sup>8</sup> 寿岳文章「追悼 土岐善麿 思い出のほんのくさりを」『短歌現代』4 卷 7 号（短歌新聞社、1980 年）、土岐善麿「老学徒の交遊」『ことば随筆』（宝文館、1957 年）、p. 214.

<sup>9</sup> 「羅馬字会」（1885）、「ローマ字ひろめ会（ヘボン式中心）」（1905）、「日本のローマ字社（日本式）」（1908）などがある。加茂正一『国字問題十講』（文友堂、1925 年）、田丸卓郎『ローマ字国字論』（岩波書店、1930 年）、安田敏朗『『国語』の近代史』（中央公論新社、2006 年）、紀田順一郎『日本語大博物館』（ジャストシステム、1994 年）、等に詳しい。

pilot? ”／母『それじゃ私は水先案内ですね』／Haha: “ Sore ja watakushi wa mizusaki annai desune.” 「Little Tome: ” Then I must be the compass, because the captain and pilot are always boying[ママ] the compass.<sup>10)</sup>／留君: 『じゃ僕は羅針盤だ。いつでも船長と水先案内にこづきまはされるんだもの』／Tomekun: ” Ja boku wa rashinban da. Itsu demo sencho to mizusaki annai ni kozukimawa sare run damono.”」またこの「英字欄」の前頁には、「自分で活字を造って初めて英語の辞書を著した学者」として、「日本で一番最初のオランダ語と日本語対訳の辞書」である『ハルマ和解』を作成した鳥取藩の蘭学者、海上随鴟を紹介している。標題や本文中の「英語」は「英字」を意味したものであろう、「和蘭（オランダ）のハルマという人の著した辞書の翻訳」をした随鴟は「自分で英語を書いて木版で活字を彫って、最初にまず原書を三十部造った。」「今の青年や少年が楽に英語を習えるのは、全く随鴟のような学者が刻苦精励して辞書を造った為であるから、昔の学者が難儀苦学したのを想うて、一層勉強せねばならぬ。<sup>11)</sup>」と結んでいる。十歳の文章少年があるいは目にしたかもしれないこれらの記事から、『日本少年』を愛読する少年たちが身近にローマ字に触れていたことが想像できる。

### 秀英舎

『日本少年』の印刷者である「秀英舎」は、すでに1887年にはアメリカ製の手廻活字铸造機「ブルース型カスティング」を一台と欧文活字の鋳型を二丁購入しており、和文、欧文ともに活字铸造の優秀性がうたわれた日本有数の活版印刷所であった<sup>12)</sup>。寿岳が少年時代に親しんだ印刷文化の一端を、「秀英舎」の歴史を例にみてみよう。

日本においては、木版印刷時代から活版印刷の黄金期へむかう時代である。1876年に佐久間貞一（1846-1898）が創業した秀英舎は、のち1935年に日清印刷と合併して大日本印刷株式会社となる。旧幕府出身の佐久間は廃藩置県後の1873年、神職と僧侶が共同一致して新しい教義を宣布する機関「大教院」に勤務し、布教紙の印刷に携わる。布教紙が新たに出版社から隔日刊行されることになったとき、その社主から相談をうけた佐久間は活版所を開業しようと考えた。かつて西洋人の宣教師から聞いたように、日本もやがて活版印刷が木版印刷にかわる時代になると考えたのだった。折しも設備一切を売りに出していた高橋活版所を買収し、社名は「将来英国の右に秀でる覚悟で事業の発展に努力せよ」との激励をうけて「秀英舎」とした<sup>13)</sup>。

秀英舎が印刷を引受けた最初の日刊新聞は、1875年に仮名垣魯文が創刊した『仮名読新聞』を前身とする『かなよみ新聞』であった。当時秀英舎の印刷工であった林徳太郎という

---

<sup>10)</sup> ‘boying’のyはxの誤植であろう。‘boxing’（拳闘）と‘boxing the compass’（羅針盤）をかけている。

<sup>11)</sup> 辻善之助「自分で活字を造って初めて英語の辞書を著した学者」『日本少年』5巻7号（実業之日本社、1910年6月）p. 54.

<sup>12)</sup> 『七十五年の歩み 大日本印刷株式会社史』（ゆまに書房、2003年）[大日本印刷株式会社、1952年刊の復刻]、p. 27.

<sup>13)</sup> 前掲書、pp. 1-6.

人物が語る、現場の奮闘をみてみよう。「ある日の事、機械が如何に工夫しても運転しなくなって、始末に負えなくなってしまいました。その間に『かなよみ新聞』の発行時間が迫って来る。仕方がないので組版を持って他の同業者の所へ行って印刷を頼まなくてはならないので、紙面の一と四の組版を私と小使いとで天秤棒を担いで弓町活版所（後の三協舎）へ持って行く事になりまして、丸一屋の前まで行くと、天秤の綱が外れて組版は往來に落ちて滅茶苦茶になってしまいました。ソレツというところの混乱は大変なもので、文選、植字の連中が総出で、壊れた組版を掻き集めて新たに組み直しに取掛かる。私は大剣突を喰ってメダマを白黒する。ようやく組上って今度は組版を千両箱でも運ぶように人力車に乗せて送り届け、ヤットコサで翌朝の十時頃に新聞が配達になるというような次第」。印刷所には当時まだ珍しい 16 ページ掛のロール機械が初めて据え付けられたが、「和製の安物」ですぐに緩んでしまうバネを締めるために「沢庵石を二つもブラ下げてやるという有様」だった。こうして新聞は無事刷り上がったが、標題の『かなよみ』が『かみなよ』となっていることに気がつかなかった。翌日の紙上には仮名書魯文が、「昨日の新聞はちょうど四四四号であったのでやはり『シ』の字の附く時は云々」との弁明文をしたためた<sup>14</sup>。

### 少年印刷工

地方における活版印刷所の様子はどうかであったか。小説『太陽のない街』で知られる作家徳永直（1899-1958）は、少年時代に郷里熊本印刷工場職工として働いた経験を、私小説『幼ない記憶』（桃蹊書房、1942年）に描いている。1910年12月、主人公の民治が語る印刷工場の様子である。K地方にはまだ電燈がなく12歳の民治の仕事はランプ掃除からはじまった。文選見習工として入ったK・N新聞社では、K市で一台しかない輪転機がまだ蒸気機関で動いていた。「馬をひっぱった百姓衆など、通りがかりの人間が一人や二人は、いつも硝子に鼻をおっつけて覗きこんでいたし、カララン、コットン、カララン、コットンと、印刷機の輪転音が大通りの方まで流れだしていた。<sup>15</sup>」そして「中央にちょこなんとならぶ」二台の鑄造機がK市のすべての活字の源泉だった。「中脚つきの写真機みたいにスマートで、ハンドルを廻すと銀色の活字がこちんと音をたててころがりでてくる。」「くっついてくる脚を折って四隅の角角に鑢（やすり）をかけて、新聞紙にくるんだまま温かい活字の塊りを掌に握らせて貰うまで、民治はいつもボンヤリと見惚れていた。」字母は彫りの浅い大阪物で、字母の数が少いために、なかには木版から鑄込む活字もあったが、このような活字は、二度の印刷機にも耐えることができなかった。それでも貴重なもので、民治は何日分の賃金にもなるほどの高価な活字を「掌のなかで溶けてしまう程かたく握って持って帰る」のだった<sup>16</sup>。活版所に響く音、職人たちの熱気が伝わるこれらの逸話からは、活版印刷黄金期を迎える印刷文化の一端がみてとれる。

日本と同様に漢字を使用する、隣国中国の印刷工場にも民治のように働く少年工がいた。

<sup>14</sup> 前掲書、pp. 19-20.

<sup>15</sup> 徳永直『幼ない記憶』（桃蹊書房、1942年）、pp. 12-13.

<sup>16</sup> 前掲書、p. 36.

中国の作家、茅盾（1896-1981）が1930年代に描いた小説『少年印刷工』は、家が貧しく見習い工として印刷工場に寝泊まりして働く少年の物語である。少年は製紙見習、植字見習として働くうちに、活字鑄造の仕事に興味を持ち、いつか欧文植字機のような中国語の植字機ができることを夢みるようになる。あるとき、拾い間違った活字を正していると「棒組みに誤植があるのはあたりまえなんだから！」と先輩からばかにされ「なんだ、かれがあんなに速くひろえるのは、まちがってようがいまいが、おかまいなしだからじゃないか」と心のなかで思う<sup>17</sup>。この体験から少年は、夢をかなえるためにもっと自分の腕を磨けるような大きな工場で仕事をしたい、と願うのだった。

向上心や知識欲が満たされることなく、仕事にもの足りなさを募らせたのは、日本の少年見習工、徳永直も同様だった。『幼ない記憶』について徳永は、「これは明治末期、いまを去る三十余年前のことであることを考慮にいていただきたい。昔の小工場では技術向上に対する少年の憧れをこんな風に妨げる空気があった。改善された今日の工場からみれば隔世の感があると思う。<sup>18</sup>」という。

### 労働と芸術

これらの小説に描かれた少年印刷工の姿から思い起こしたいのは、英国の工芸家ウィリアム・モリス（1834-1896）の思想である。工芸における芸術観は労働観と無関係ではない。1934年5月23日の午後、モリス生誕百年を記念した講演会と展覧会が関西学院文学会に学院内で催された。壇上には寿岳文章、北野大吉、志賀勝、竹友藻風、富田文雄が立ち、咳風邪の病床にあり出席が叶わなかった新村出による草稿が代読された。本講演の内容は、書誌と年表を加えて同年の10月に『モリス記念論集』として刊行され、寿岳の考案によって簡素な装幀の書物に仕立て上げられている。本書において寿岳は「書物工芸家としてのモリス」として、モリスの印刷工房「ケルムスコット・プレス」が活字印刷と出版における一般の水準を高めた意義を論じているが、ここでは北野による内容をみておきたい。

本書において北野は「モリスの人及思想」として英国の産業革命が民衆の生活に及ぼした社会問題から論を展開する。関西学院において「英国産業革命史」を講じ、工場法運動の先駆者であるロバート・オーウェン（1771-1858）を学生時代以来の研究対象としていた北野は<sup>19</sup>、モリスの論文 *Art and Socialism* を「労働の理想」に基づく芸術観を示すものとしてこう繙いた。「一、仕事は価値あるものになされるべきである」「二、仕事はそれ自体が愉快であるべきである」「三、仕事には変化を認めるべきである」「四、仕事は退屈過ぎたり、心痛が多すぎたりするような条件のもとに行われるべきではない」とモリスはいう。すなわち、モリスがいう「労働の理想」とは、賃金に交換される強制労働ではなく、自身が価値を認める仕事を愉しみ、時には別の仕事を経験することも許され、余暇と休養を確保できる美しく

---

<sup>17</sup> 茅盾作『少年印刷工』白水紀子訳（太平出版社、1984年）、pp. 130-131.

<sup>18</sup> 徳永直『幼ない記憶』再掲、p. 2.

<sup>19</sup> 北野大吉『ロバート・オーウェン 彼の生涯、思想並に事業』（同文館、1927年）、pp. 1-4.



健康的な生活のもとに仕事をする事、である。北野は、モリスの根本思想は「芸術とは人の労働における歓喜の表現である」という芸術の定義にあるとした<sup>20</sup>。

ひるがえって、印刷工場における徳永や民治のような少年印刷工が体験した労働は、モリスの労働観と芸術観に照らせば理想との隔たりは大きい。寿岳は、自身の書物論を収めた向日庵私版『書物』（1936年）にこう述べる。昔の印刷工が手引印刷機で印刷するときには、「どうすれば彩飾本にひけをとらない立派な書物が作られるか、その工夫と責任とにかかれらの仕事は明暮れて行った。仕事が即ちかれらの生活であった。」「かれらは輪転機の如く真夜中に輪転する必要を認めず、起きるべき時に起き、眠るべき時に眠った。<sup>21</sup>」寿岳がいう「仕事が即ち生活」とはつまり、作られた書物がなによりも作り手の生活の態度を語る、という意味である。わたしたちが本を手にとったとき、印刷された活字や用紙、本の造りを通して作り手の心をも感じ取れることがある。仕事や労働のあり方は「美」と無関係ではない。

### 工場法

文章少年が雑誌『日本少年』を愛読した明治末期の同時代において、徳永が熊本の印刷工場で使用していた活字が「彫りの浅い大阪物」であったというように、対する「東京物」は印刷するとくっきりと美しい彫りの深い活字であったことが想像される。文章少年は秀英舎の活字をとくに好んだが、「東京物」である秀英舎の活字の美しさの背景に、ひとつには秀英舎が採用した徒弟制度があったのかもしれない。創業者の佐久間は、労働者保護を目的とする「工場法」の制定運動にも尽力し、生前には実現しなかったが、死の床にありながらも法案のことを気にかけるほどであった。秀英舎の工場をいわば労働問題に対する実験の場として、職員の福利厚生と、印刷に必要な学科実技を教授する徒弟教育に力を入れた。寄宿舎を建て、印刷に必要な学科実技を教授した秀英舎の習業生養成制度は1916年まで継続され、卒業者416名を世に送って東京を中心とする印刷業界に貢献した<sup>22</sup>。

1911年に制定された「工場法」では、12歳未満の就業を禁止し、15歳未満と女子の就業を一日12時間までに制限、午後10時から午前4時までの深夜労働を禁止した。のち1923年に改正された「工場法」では、16歳未満と女子の就業について、一日11時間まで、深夜労働時間の範囲を午前5時まで延ばして禁止している。国外と比べてみる<sup>23</sup>。世界最初の工場立法は、英国において1802年に制定された、綿工場での児童労働を保護する「徒弟健康風紀法」であった。1819年には、英国最大の紡績工場の支配人であったロバート・オーウェンによって「紡績工場法」が制定され、9歳未満の労働禁止と16歳未満の労働時間を12時間に制限するなど、日本よりも早く法整備が進んでいた。

日本のロバート・オーウェンともいわれる秀英舎の佐久間貞一であるが、1904年に習業生として秀英舎に入舎した水沼辰夫は、その経営ぶりや職工、徒弟の処遇を振り返り、社会

<sup>20</sup> モリス生誕百年記念会『モリス記念論集』（川瀬日進堂書店、1934年）、pp. 43-55., p 67.

<sup>21</sup> 寿岳文章「装本について」『書物』（向日庵、1936年）pp. 49-50.

<sup>22</sup> 『七十五年の歩み 大日本印刷株式会社史』、再掲、p. 34.

<sup>23</sup> 『大百科事典』（平凡社、1984年）「工場法」「オーエン」の項を参照した。

の佐久間に対する評価に疑問を呈する。徒弟には食堂があり三食の米飯で分量に制限はなく、「徒弟は毎日舎監から班長を通じて菜札と称する小判型の木札を渡され、それでおかずを買うのであるが、夕食のおかず代は出ないから自弁で買うか、さもなければたくあんで済ませるのである。入舎した当座は、一カ月にもらう小遣い五〇銭のうち一〇銭を貯金に引かれて手取り四〇銭しかない。これで毎日一銭のおかずを買って食べると残り一〇銭、一度散髪すると一銭も残らない。」このほかに夜業があり一時間に五厘から一銭の手当がついた。秀英舎でさえこのような実態であり、その頃の活版印刷工がいかに余暇のない悲惨な生活をしてきたか、これが水沼が伝える「職事情」であった<sup>24</sup>。

### 関東大震災による被害と景気

1923年9月1日に発生した関東大震災は、関東地方の出版印刷業界に甚大な被害をもたらした。記録によれば、東京市内における印刷同業組合員688のうちその8割以上の552が焼失または倒壊し、震災のあった1923年末までに納本された全国の雑誌書籍出版物は17.5パーセント減少した<sup>25</sup>。当時東京の印刷所に勤務していた上野山博は地震発生時の様子をこう記す。「博文館印刷所では前年10月末に完成した鉄筋三階建ての白亜の自慢の新工場が提灯をつぼめたようにくずれ落ちて、ここで従業員男女41人が圧死した。この工場は一階を印刷と鉛版料、二階は植字解版の組版部と欧文科、三階は文選部で、二、三階には相当重量の活字がのっていたので、太いとはいえ細い鉄筋の柱は途中から折れてつぶれた。」人々は「さけた道路をつたわり植物園の森蔭の草原に集合」し、「活版協会の人々は申合わせたように積極的に救護活動をおこした。<sup>26</sup>」

活版印刷になくってはならない活字も焼失した。字母の焼失により再整備には相当の時間がかかり、復興の兆しがみえはじめるまでに15年以上を要した会社もあった。全焼により製造をストップした築地活版製造所にかわり、いち早く復興の波にのって活字を売り出した博文館印刷所や、凸版印刷、秀英舎、日清印刷など、比較的被害が少なかった印刷会社が需要に応じてゆく。小規模の印刷工場にも印刷物の需注が殺到し、東京近県や京阪地方にも印刷物の注文が流れていくなか、大震災は一方で印刷業界に「震災景気」をもたらした。ある印刷会社の社長はこう語る。「組版代一円のものが一円五〇銭となり、次に来た人には仕事は一杯だと断ると是非にと頼むので、二円と恐る恐るいっても通った。そこで試みに、今度は二円五〇銭といたらそれでも通った。遂に一カ月の間に一円の組代が三円になった。それも先方さんが現金を置いて行くのだ、一カ月みっちり稼ぐと震災前の半年分位の収益があった。」

関東大震災がおきる前年の1922年頃から、軍縮による不景気と物価高騰がつづく巷には失業者があふれ、子の多い印刷労働者家庭では、遊び盛りの小さな子どもが母親と一緒に製

<sup>24</sup> 水沼辰夫『明治・大正期自立的労働運動の足跡 印刷工組合を軸として』（JCA出版、1979年）、p. 22, p. 38.

<sup>25</sup> 横山和雄『日本の出版印刷労働運動（上）』（出版ニュース社、1998年）、pp. 319-320.

<sup>26</sup> 上野山博『闘った印刷労働者』（「闘った印刷労働者」刊行会、1983年）、pp. 83-84.

本の内職を手伝ったり、製薬工場や製紙工場に働きに出て家計を支えることが常態化していたが、震災前は 800 名であった従業員数が震災後には 1,800 名にまで激増した印刷会社もあらわれた。「印刷工は連日深夜業徹夜残業をしたが、若い青年工は体力にものをいわせ残業時間を競い合う程であった」、健康を損ねながらも「月末の収入が残業により増収するので、不平も出なかった。」とさきの上野山は「馬車馬的な労働強化」の実態を証言する<sup>27</sup>。関東大震災が生んだ「復興景気」は多くの印刷労働者にとっては、被災と労働強化の「二重苦」であったといえよう。住環境も悪質だった。博文館の印刷労働者が多く居住した地域は低湿地で、その中を流れるどぶ川が、ちょっとした夕立でも上流から押し流されてくるゴミのために氾濫した。飲料水は 4、50 軒に一本しかない共同水道と井戸を利用していたが、どぶ川の氾濫の度に行う井戸替えの費用として一軒一円ずつを負担しなければならなかった。家賃も物価も安く、工場が近いために深夜業ができるという理由で、印刷労働者たちがこの地域に集まってきたのだった<sup>28</sup>。

### 徳永直『太陽のない街』

徳永直はこの地域を「谷底の街」「東京随一の貧民窟トンネル長屋」と表現して小説『太陽のない街』に描いた<sup>29</sup>。徳永は 1922 年に共同印刷所の前身である博文館印刷所に植字工として勤務していたが、1925 年に博文館印刷所と精美堂が合併して共同印刷となり、従業員数が急増すると、会社側は鋳造、貯品、機械の三部門の現場作業日数を大幅削減しようとした。労働組合側がこれを拒否してストライキに突入した結果、工場の全面閉鎖によって労働組合側は完全敗退、全員が解雇された。『太陽のない街』は、この「共同印刷大争議」をモデルとしたもので、徳永自身この争議によって解雇されている<sup>30</sup>。治安維持法が公布された 1925 年の翌年に起きた、70 日間にわたる大争議であった。

『太陽のない街』は雑誌『戦旗』に 1929 年 6 月号から 11 月号まで連載され、初回掲載号にはほかに小林多喜二の「蟹工船」、中野重治の「鉄の話」、村山知義の「暴力団記」等が掲載されていた。反資本、反戦を基調とする機運が高まる 1920 年代、芸術においては「日本プロレタリア文芸連盟」(1925)をはじめとする革命運動体が次々と結成された。『戦旗』は 1928 年の三・一五事件直後の政治状況下に結成された「全日本無産者芸術連盟(ナップ)」の機関誌で、徳永によると『戦旗』は、毎号のように発禁処分をうけ『太陽のない街』が掲載された当時には発行部数は 2 万部まで急上昇していたほどの売れ行きであったと回想する。「はじめて自分の小説がのった雑誌を、私は本屋の店頭でみた。たぶん神田だったと思うが、『戦旗』という雑誌の売れぐあいにはふつうとちがっていた。電灯の光がとどかないような店頭の片隅に、ふあいそな顔で店員がたって眼を光らせている。次々と手がでる。その手は釣銭のいらぬようにそろえた金をもっているらしく、おそろしく早い。ほかには何の

<sup>27</sup> 前掲書、pp. 246-249.

<sup>28</sup> 前掲書、pp. 232-235.

<sup>29</sup> 徳永直『太陽のない街』(岩波書店、2018 年)、p. 18.

<sup>30</sup> 鎌田慧「解説」前掲書、p. 372.

用事もないようにさっさと消え、また次々と手がでてくる。そのとき私は子供をだいて、ぶあいそな店員のうしろに、ずいぶんながいことたっていた印象である。<sup>31</sup>」

当時の「大日本帝国憲法」が認める「言論著作集会及結社の自由」は適用範囲が限定され、「出版法」（1893年公布）第十九条と「新聞紙法」（1909年公布）の第二十三条によって出版の自由が制限された。「安寧秩序ヲ妨害シ又は風俗を壊乱スルモノ」と認められた出版物は、「発売頒布」と「刻版及印本」が差押えられ、新聞および一部の雑誌においては発行者、編集者だけでなく印刷人も処せられた<sup>32</sup>。

### 暗黒時代の出版活動

それでも、検閲方法が「届出」による事後検閲であったため、読者は発禁処分がくだる前に速やかに「発禁本」を手にとることも可能であった。寿岳は中学生の頃を振り返り「禁をおかして宮島資夫の『坑夫』をひそかに盗み読んだ。」「近代思想社から自費出版されたこの小説は、大正5年1月発売と同時に発禁処分となると、[活字組版を型取りした]紙型まで押収されてしまった」と語る<sup>33</sup>。当時寿岳が頻繁に通った書店といえば、東寺中学に近く、「机上は一個の小天地なり 諸君が要求せらるる智識の鍵は取めてこの内にあり まずこの書を開け」と販売目録の扉にうたった「東枝書店<sup>34</sup>」であるが、寿岳がひそかに読んだ『坑夫』は、あるいはこの図書雑誌大取次書店が入荷したものだだったのかもしれない。出版者の役割が書物によって著者と読者をつなぐことであるならば、書店の役割もまた書物によって出版者と読者をつなぐことにある。

1912年に大杉栄とともに雑誌『近代思想』（近代思想社）を創刊した荒畑寒村（1887-1981）は、「社会主義運動史上の暗黒時代」として創刊時をこう振り返る。「ある理学士の『昆虫社会』という自然科学の著者は、『社会』の二字が当局の忌諱にふれて発禁をくった。雑誌『スバル』中心の文士が『パンの会』というのを開こうとしたら、警視庁はギリシャ神話の牧羊神パンを食うパンと感[ママ]ちがいして、何か不穏な会合ではないかと大騒ぎをした。<sup>35</sup>」そのような時代に、「保証金を納めない非常事態雑誌で、三十二ページ定価金十銭という貧弱なものであったが、とにかく大逆事件以後、沈黙を強いられていた社会主義暗黒時代に微かながらも初めて公然と発した声なのである。」「編集発行の責任者は大杉、印刷人には私が署名していた。広告は大杉夫人、堀保子君が担当していたが、大杉や私もよく広告とりには

<sup>31</sup> 徳永直「作品について」、前掲書、p. 347.

<sup>32</sup> 検閲制度全般については紅野謙介著『検閲と文学 1920年代の攻防』（河出書房新社、2009年）を参照した。

<sup>33</sup> 寿岳文章「わたしの読書遍歴」『日本読書新聞』（1954年6月7日）

<sup>34</sup> 『現代出版業大鑑』（出版タイムス社、1935年）「人と事業京都篇」の項に「株式会社東枝書店は現社長東枝吉兵衛君が、明治十三年米屋を廃業して、新聞雑誌の販売を創めたのに端を発し、爾来向上の一路を辿り、出版界の興隆に順応して販売より取次業に転じ、益々業容を拡大し、東京発行の書籍雑誌の取次店としては実に京都各取次店の先輩」との記述がある。（p. 212.）また掲載広告に「図書雑誌大取次／株式会社東枝書店／京都市下京区佛光寺烏丸東」と記されている。（p. 371.）

<sup>35</sup> 荒畑寒村「刊行者としての思い出」『復刻版「近代思想」第一分冊付録』、地六社、1960年、pp. 4-5.

出かけた。お得意さまは雑誌『実業之世界』の野依秀市、丸善の顧問内田魯庵、文淵堂出版店の金尾種次郎、三越デパートの松宮三郎、ライオン歯磨きの中尾傘瀬の諸氏。これらの人々は、半ば私たちの仕事に対する同情、半ば雑誌の主張に対する興味から、いつも好意的に広告を出してくれた。<sup>36)</sup>

寿岳は交流があった出版人の金尾種次郎(1879-1947)について、「出版という事業は、冷徹な計算に基づかなければ、結局は長続きがしない」、金尾のように自分が借金してでも夢見る「ロマンチックな発想」は出版事業のうえでは大禁物である、という。金尾は大阪心齋橋筋の江戸期から続く仏教書の版元兼書店に生まれ、死去した父に代わって16歳で家督を継ぐが、造本に費用をかけた出版事業のために経営は常に苦しかった<sup>37)</sup>。寿岳は金尾が刊行した薄田泣菫の詩集について「手に取るからにとれがまぎれもなく詩集であることを肌を感じさせる」ようであったと振り返る。そして、もし金尾が出版した書物の完全な書誌があれば「おそらくそれは、日本の近代文学形成の、正面ではないにしても、側面に対してたいへん貴重な光を投げるものだろう<sup>38)</sup>」といい「文学の仕掛人たる素志と自覚」を捨てなかった出版人としての金尾の資質と、版元の意味が書物に寄与する役割を重要視した<sup>39)</sup>。

暗黒時代においてこそ、出版人には寿岳がいう「ロマンチックな発想」が求められるのではないだろうか。著者は書物に語らしめ、その書物を読者に届けるのは出版人である。

## II. 書物における「美」の追求

### 円本がもたらしたもの

1926年10月18日、『東京朝日新聞』紙上に改造社が一冊一円で予約刊行する『現代日本文学全集』全36巻の内容一覧を示した広告が掲載された。「善い本を安く読ませる！この標語の下に我社は出版界の大革命を断行し、特権階級の芸術を全民衆の前に解放した。」「日本第一の誇り！明治大正の文豪の一人残らずの代表作を集め得た其の事が現代の驚異だ。そして一冊一千二百枚以上の名作集が唯の一円で集めるのが現日本最大の驚異だ。」とうたった<sup>40)</sup>。この二ヶ月後には元号は大正から昭和へと改まり、いわゆる「円本ブーム」は、昭和初期の出版文化におけるひとつの象徴として語られるが<sup>41)</sup>、ここで検討したいのは、最

---

<sup>36)</sup> 前掲書、pp. 6-7.

<sup>37)</sup> 石原純一『金尾文淵堂をめぐる人びと』(新宿書房、2005年)、p. 10.

<sup>38)</sup> 寿岳文章「ある出版者の思い出 金尾種次郎と伊藤長蔵」『寿岳文章書物論集成』再掲、p. 528. なお石塚純一『金尾文淵堂をめぐる人びと』巻末の「金尾文淵堂刊行書目年表」により金尾と関わりのあった著者と事績を一覧できる。このうち真鍋由郎『先賢群像』(1943年刊)は、関西学院教員として真鍋の同僚であった寿岳が奥州白石産の和紙を用いた装本を手がけ、「後記」を執筆している。

<sup>39)</sup> 寿岳文章「共作者としての版元」『文学』49巻12号(岩波書店、1981年12月)、p. 70.

<sup>40)</sup> 紅野謙介『検閲と文学』再掲、pp. 156-158.

<sup>41)</sup> 前掲書、p. 160.

初の広告が掲載された翌月、11月7日付の『東京朝日新聞』紙上に掲載された広告の内容である<sup>42</sup>。

「第一回配本は尾崎紅葉集」「何故に総振がなとした?」「出版界の大革命」「世界に誇るべき我現代文学の粹」「僅かな金で完全な文学図書館が出来る」等の宣伝項目がずらりと並ぶ。このうち「総ルビを断行する」目的については、第一に、明治の誇るべき文藝を全民衆の手に解放するために、第二に、同じ漢語を使用しても明治開化期とそれ以後では読みかたに相違があるように、時代に応じて言葉が変わるということ、第三に、作家によって読ませ方が異なることも多く「その性癖そのままを」現代に伝える必要上、とした。この「総ルビ」に対して、作家の山本有三（1887-1974）が次のような問題提起をする。

### 山本有三と「ふりがな廃止論」

山本は自作『戦争と二人の婦人』（岩波書店、1938年）において、ふりがなを一切使用しない試みを行った。本書のあとがきに山本は「国語に対する一つの意見」としてこう述べる。「私は「クララ」を書く頃から、少しこの問題について考えはじめました。ふり仮名をつけるといふことは、ただ文章を読みやすくするというような、単純な問題ではないと思うのです。」「いったい、立派な文明国でありながら、その国の文字を使って書いた文章が、そのままではその国民の大多数のものには読むことが出来ないで、いったん書いた文章の横に、もう一つ別な文字を列べて書かなければならないということは、国語として名誉なことでしょうか。」「近頃私はルビを見ると、黒い虫の行列のような気がしてたまりません。なぜ、あのような不愉快な小虫を、文章の横に這いまわらしておくのでしょうか。<sup>43</sup>」

この山本の試みに対する読者からの反響は大きく、『戦争と二人の婦人』が刊行された同年には、『ふりがな廃止論とその批判』（白水社、1938年）がはやくも刊行されている。本書は、『戦争と二人の婦人』刊行後に新聞雑誌等に発表された「ふりがな問題」に関する記事を集めたもので、執筆者は寿岳文章のほか、作家、文学者、国語学者など142名である。「日本だけふりがなとしているのは国辱だといふ気持には反対」、「漢字は廃すべからず」、「結果として日本文化を引下げるような運動となる事を避けよ」、「大衆自身の言葉で書けば文章がむつかしいという事はない」など賛否両論が渦巻くなか、寿岳はひとり「美」の観点からこう論じる。

「二列がきは一流国日本の名誉にかかわるとか、小さいふりがなは眼のためにわるいとか、体面や衛生の方からばかり問題にして、印刷される紙面の美しさをいう人がないのはなぜだろう。この印刷面の美しさということは、ローマ字やカナモジをすすめる場合にも第一に考えられねばならぬはずなのに、その運動に従っている人たちは、国民の、ことに学童の負担が軽くなること、時間の浪費が避けられることを金看板にする。が、むつかしい漢字のよみ方や意味を知るためにささげられる尊い努力を、いちがいに時間の浪費といいきって

<sup>42</sup> [図版] 前掲書、p. 169.

<sup>43</sup> 山本有三「国語に対する一つの意見」『ふりがな廃止論とその批判』（白水社編刊、1938年）、pp. 3-7。（山本『戦争と二人の婦人』昭和13年4月8日記、岩波書店刊より転載）

しまえるだろうか。「書物」の側からいえば、問題はむしろ印刷面の美醜にある。そしてそれが大切な問題とされる日が来ないかぎり、いつまでたっても日本に書物らしい書物のできぬことだけはたしかである。<sup>44</sup> 寿岳は、「文化は美の問題と切り離して考えられないという人間性の根本問題」を「総ルビ」に問うたのだった。

### 印刷工からみた国字問題

このとき、漢字とルビに関して印刷工の視点から述べた人物がいた。当時、雑誌『科学ペン』（三省堂）の編集者であった小林茂は、「印刷術と漢字制限」（『国語運動』1938年7月号）に「印刷屋の第一の願い」としてこう述べる。「実際、呆れた話ではありますが、10,000種の漢字の中には鶏、鷄、纏、纏、併、併、鬱、鬱、箇、個、効、效、双、雙という様な字が入っています。場合によって、そのどちらかを使わねばならないのです。まずこれを一種に統一したい。」そして、漢字使用制限や、略字使用の運動が種々現れている当時の現状に関して、「歴史的なものに突然反逆することは、それが非常に合理的なことであつても、却って不合理な結果を招くことが多い様に私は思います。<sup>45</sup>」と印刷現場における国字改良運動の弊害を訴えた。

書体においては、日本で最も広く使用されてきた「明朝体」に加えて、「ゴシック体」や「宋朝体」、従来よりも細めの「明朝体」が現われ、大きさにおいては、従来「初号」から「七号」までの8種類に加えて、12ポイント、9ポイント、8ポイント、6ポイントの「ポイント活字」が新しく増えて12種類になった。一方欧文では、漢字一万種を使用する日本語文に対して、大小72文字のアルファベット、発音記号、書体は「ローマン」「ボールド」の2種、大きさ8種である。これは何を意味するか。小林は具体的にこう説明する。

「活字一貫匁10円とすれば、日本では10万円の準備活字が要るのに、欧米では5,000円ですむことを意味します。また、若し同一の資本がかけ得るとすれば、欧米では日本の100から200倍の種類のいろいろな字体や大きさの活字をつかって印刷物を美しく飾れることを意味します。西洋の書籍のどことなくアカ抜けた美しさに、日本の書籍の及ばぬことを歎く人は、日本の印刷技術のみを責めてはなりません。それは実に漢字の責任であります。<sup>46</sup> 文選工は、漢字の使用頻度によって拾う活字の配置を工夫し、無駄な動作が少なくなるよう努力したが、それでも文選工が一分間に拾う活字は約20本、活字の種類が少ない欧文のばあいでは一分間に約35本であるという<sup>47</sup>。

日本にはかつて「ルビ屋さん」と呼ばれた職業があった。現代において「ルビの美学」を論じた英文学者の由良君美（1929-1990）は、幼年時代に祖父の家にやってきた「ルビ屋さ

---

<sup>44</sup> 『ふりがな廃止論とその批判』前掲書、pp. 216-217.（初出：『大阪朝日新聞』1938年7月10日）なお寿岳は後年にも同様の論を展開している。（寿岳文章「国字の闇市場」『滴る雫』、河原書店、1947年、pp. 120-122. 初出：1946年8月）

<sup>45</sup> 小林茂「印刷術と漢字制限」前掲書、pp. 179-180.

<sup>46</sup> 前掲書、p. 175.

<sup>47</sup> 前掲書、p. 177.

ん」と「検印屋さん」が「玄関の上り框に、坐りこんで、終日、機械のように手を動かしている風景」を述懐する。「ものを書き、それで食べる祖父にとって、その頃、命となったのは、書きあがる原稿に、即座に《ルビ》をいれてゆく《総ルビ屋さん》と、それに応じて発行部数を、これまた即座に《検印紙》に捺印する《検印屋さん》だったのだ。いずれも 1970 年代の今、すっかり姿を消した職業に属する。<sup>48</sup>」由良は、「ふりがな」をいくら敵視しようとも、漢字をいくら制限しても、日本語の表記法の成立とともに三千年余を経過した日本語の性質はゆるがない、と言語としての日本語における「ルビ」の意義を論じている。

### 向日庵私版と英国の私版

「向日庵私版」において書物づくりに取り組むなかで、折にふれ日本の活字と印刷への不満について書いていた寿岳は、まさに小林のいう「日本の書籍の及ばぬことを歎く人」「日本の印刷技術を責める」人であったといえる。西洋の書物にある「どことなくアカ抜けした」美しさは、どこから生まれるのか。この「美」の問題こそ、寿岳が「向日庵私版」においてとりくみ続けた課題であった。

寿岳が歩もうとする書物道の燈明となったのは、英国の私版家たちの存在であった。寿岳が範とした「書物工芸」の理念は、コブデン＝サンダソン（1840-1922）、エリック・ギル（1882-1940）、寿岳の三者による書物論をおさめた向日庵私版『書物』（1936年）に実践として示されている。コブデン＝サンダソンは、1900年にエマリ・ウォーカー（1851-1933）とともにダブズ・プレスを設立した私版家である。ウォーカーは15世紀ヴェネツィアで印刷されたプリニウス『博物誌』に使われた活字を改良した「ダブズ活字」を造り、この活字は『聖書』全5巻（1903-1935）などダブズ・プレスの刊本すべてに使われた<sup>49</sup>。ケルムスコット・プレス版の「極端な黒さ」や「各篇の首尾を飾る図様」にくらべて、「所々につつましい頭文字」を置いただけの簡素な美しさと本文の読みやすさにおいて、寿岳はとりわけダブズ・プレス版を好んで範とした。寿岳はコブデン＝サンダソンが亡くなる1922年の6年前に綴った日記の内容を、活字を愛するあまりの私版家の心理として共感しこう紹介する。

健康が許さなくなり私版の仕事の続けることができないことがわかると、コブデン＝サンダソンはある偉大な私版家のひそみに倣い、ダブズ・プレスで用いた活字をテムズ河の川底へ沈めにかかった。「しかしそれは川底にではなく、ずっと離れた橋脚の棚にとまってしまった。思っても見よ、私の狼狽ぶりを、またその夜中私が耐えしのばねばならなかった気持ち。…ああ活字、あの活字…<sup>50</sup>」自分の活字を他人に使用されたくない、橋脚から救い出されて箱に入った活字が発見されたなら自分のものと認めるしか無い、どちらになるか「無限大の運命に私は身を託そう」とコブデン＝サンダソンは覚悟したのであった。

エマリ・ウォーカーについて寿岳はこう述べる。「モリスに印刷への熱情を燃えしめて遂にケルムスコット・プレスの創立を実現させた人」がいまなお「世界の印刷巨匠」(the Master

<sup>48</sup> 由良君美『言語文化のフロンティア』（講談社、1986年）、pp. 106-107.

<sup>49</sup> コリン・フランクリン著『英国の私家版』大竹正次訳（アトリエ・ミウラ、1983年）、p. 139.

<sup>50</sup> 寿岳文章「近英の私版」『書物の道』再掲、pp. 92-93.（初出：『英語研究』1933年10月15日）



Printer of the World) としての榮譽を担い続けていることは「激しく静かなる熱情を以て、理想の書物の製作の使徒をこころぎす私に、その声に接し、その教えを聞き、その姿を仰ぐ機会を望ましめてやまないのである。<sup>51</sup>」寿岳がこう思慕して記したのは、ちょうど向日庵私版を開始した 1933 年であったが、奇しくもエマリ・ウォーカーはこの年に死去し<sup>52</sup>、寿岳の願いは永遠に絶たれることになった。「わが国の作家たちは、書物とは何であるか、殊に、美しい書物とは何であるかを十分に認識していないのだ。」「作家が本当に自分の作品を愛するならば、その作品が伝達される容器である書物についても、もっと深い理解と敬念と愛着と関心を示されねばならぬ。<sup>53</sup>」と寿岳は書物道のありかたを世に問い、英国の私版家たちに続く仕事を「向日庵私版」の使命とした。

このように寿岳が「書物工芸」に開眼した背景には、1923 年の関東大震災により東京から南禅寺界隈に疎開していた柳宗悦との交遊と、柳が主唱した民芸運動をともにしたことがあるが、とくに寿岳が歩んだ書物道において、伊藤長蔵という人物が重要な役割を果たしているのでここで触れておきたい。

#### 伊藤長蔵と「ぐるりあ そさえて」

寿岳が、私淑する新村出 (1876-1967) を通じて伊藤長蔵 (1887-1950) と出会ったのは 1927 年のことだった。外遊の旅から帰国し、出版社「ぐるりあ そさえて」を創立したばかりの伊藤は、アシェデン・プレス、ゴールデン・コカレル・プレス、ナンサッチ・プレスなど名だたる英国私版の存在を寿岳の心に印象づけた。寿岳はこれを「私がついに書物道の一筋にいたった因縁」と回想する<sup>54</sup>。伊藤が、あまりにも「コンマンシアリズム」に陥りがちな日本の出版の現状を「洋書をもとり入れた書物の趣味」によってかえたいと願い、書物雑誌『書物の趣味』を主宰したのも同年 1927 年のことである。伊藤長蔵自身は西洋の書物にどのように惹かれていったのか。伊藤の回想記をみてみよう。

伊藤はそのとき偶然立ち寄ったロンドンの「新ポンド街からクリフォード街に入る二三軒目」にあった「トラスラブ・エンド・ハンス書店」での思い出を語る。この店の地下室にあった「ロンドン・リテラリー・ラウンジ」に出入りしていた伊藤に、あるとき女主人が印刷に興味があるならば、と「限定版の奢侈本」をいくつか見せてくれた。「私は装幀よりも活字とそのジスプレーの美しいのにまずうたれました。何もかも欲しくなりそして是非こういう美しいものを刷っている人と場所を見たくなったので紹介方を依頼しました。」翌日、伊藤の宿に届いた紹介状のなかにアシェデン・プレスのホーンビー氏からのものがあつた。「ホーンビー氏は親しげに迎えてくれて自ら刷った立派な書物とそしてその工場を見せて

<sup>51</sup> 前掲書、p. 95.

<sup>52</sup> 昭和 9 年に刊行した『書物の道』に再録された「近英の私版」に寿岳はこう附記している。「この稿で私が言及したエマリ・ウォーカーは、遂に昨年死去したことを、この春私は知った。恐らくこの稿が書かれた頃、彼は既に世になかつたかと思ふと感慨に堪えない。(昭和 9 年 7 月 29 日附記)」

<sup>53</sup> 寿岳文章「作家と装幀」『書物の道』再掲、pp. 79-80. (初出：1934 年)

<sup>54</sup> 寿岳文章「自装本回顧」『寿岳文章書物論集成』再掲、pp. 489-490. (初出：1935 年)

くれました。工場はチェルシーの自宅内にあり、用うるタイプは十五世紀の伊太利の古文字から写したもので、紙は手すきです。私はプライベートプレッスの如何なるものかの概念を得ました。それと同時にホーンビーさんから聞き得たことから英国のファインプリンティングの沿革を調べるいいヒントを得ました。<sup>55</sup> 寿岳は、英国私版家の歴訪から帰国し、いまだ感激冷めやらぬ伊藤に邂逅したわけである。

### 『キルヤム・ブレイク書誌』の意義

伊藤が新村出に命名を依頼した書物雑誌『書物の趣味』（書物の趣味社）の創刊号（1927年11月1日発行）には、新村出「書物藝術上のキリヅム・モーリスと本阿彌光悦」、伊藤長蔵「欧州最古の活字本」、寿岳文章「ブレイクの彩飾本由来」等が掲載され、伊藤が意図した「洋書の趣味」をとりいれた内容となっている。また本誌に掲載された洋書情報記事は、寿岳が編集した『キルヤム・ブレイク書誌』（ぐろりあ そさえて、1929年）との関わりを示しているのが注目したい。

「William Blake の百年祭について Harvard University から Portfolio の素晴らしいものが出る。Blake が水彩画で挿絵している“Young’s Night Thoughts”から三十枚ばかり翻刻される。その中五枚は原色である、原本は Harvard の Fogg Museum にある。Blake 通の Geoffrey Keynes が序文を書いている。Blake ものの最も美しいものであろうと米国では言っているが我国でも此の秋「ぐろりあ」から Bibliography of William Blake が出る。百枚ばかりもコロタイプが附いて純粋の日本紙鳥の子で三百頁。日本としても空前の出版であると同時に英米に出しても One of the most Striking であると思われる。<sup>56</sup>」

ここにおそらく伊藤が刊行を予告した *Bibliography of William Blake* とは、寿岳が編集した『キルヤム・ブレイク書誌』であるが、本書を確認すると、「276.ILLUSTRATIONS TO YOUNG’S NIGHT THOUGHTS. Harvard University Press. 1928」として、「故 W. A. White 氏所蔵の原水彩画より複製せる原色版5面、単色版25面を収む；各葉いづれも分離す。Geoffrey Keynes 博士の解題あり。大きさ、44×37cm. Harvard University Press より刊行せる限定版出版物。その他の出版事項は未だ審らかならず。」と附記されており（『キルヤム・ブレイク書誌』p.314.）、これは『書物の趣味』において「Harvard University から Portfolio の素晴らしいものが出る」と紹介された文献であることがわかる。つまり、「此の秋」すなわち『書物の趣味』創刊号の発行日である「1927年11月」に、伊藤が「ぐろりあ」から出ると予告した『キルヤム・ブレイク書誌』は、実際には遅れて1929年に刊行され、その間に刊行が予告されていた「Harvard University から出る Portfolio」を寿岳は『キルヤム・ブレイク書誌』に掲載したのである。「出版事項は未だ審らかならず」と附記しているとおり、寿岳は原本を未見であったためか、1928年としている刊行年は正しくは1927年であるが、最高水準の「書誌」として遺漏なく文献を網羅させようとした寿岳の熱意がここ

<sup>55</sup> 伊藤長蔵「ファインプリンティング」『古本屋』（荒木伊兵衛書店、1927年7月）、pp. 38-39.

<sup>56</sup> 「サチヤリナ漫語」『書物の趣味』第一冊（書物の趣味社、昭和2年11月）、p. 116.

からみてとれる。のちに寿岳は、本書 *Blake's Illustrations to Young's Night Thoughts* (Harvard University Press, 1927.) (以下『夜想詩』と略記) を、『キルヤム・ブレイク書誌』刊行後に思わぬかたちで入手することになる。この寿岳に贈り届けられた『夜想詩』をめぐる書簡をもとに、その経緯をみていこう。

『キルヤム・ブレイク書誌』の意匠を担った柳宗悦が、完成した本書を受け取ったのは1929年8月半ばのボストンでのことだった。柳はハーヴァード大学で仏教美術を講じるために渡米中であったが、そこで柳は、ボストンの実業家でドン・キホーテ文献を蒐集するカール・ケラーに出会う。同年9月、柳は寿岳に手紙を書き、ケラーの日本のドン・キホーテ文献蒐集について寿岳に協力を依頼した。この柳を介した寿岳とケラーとの出会いは、向日庵私版『絵本どんきほうて』（1936年）の刊行由来において重要であるが、ここでとりあげたいのは、同1929年12月に寿岳に届いたケラーからの書簡第一信である。

12月18日付の書簡においてケラーは、「察するに君も書物蒐集家らしいから、同類の病人が、とても手に入らぬとあきらめていた書物を手に入れた時の狂気を十分知ってくれるだろう。この国で僕が君のためにしてあげられることがあったら、遠慮無く知らせてくれ」といい、寿岳が送った本のお礼として、25ドルと「ヤングの『夜想詩編』複製」を贈ることを伝えている。おそらく柳は、ボストンに届いた『キルヤム・ブレイク書誌』をケラーに示しながら、寿岳のブレイク研究について語ったであろう。ケラーは自身と同じ「書物蒐集家」である寿岳にたいして、「同類の病人」「手に入れた時の狂気」という言葉を用いて友情を示した。ケラーは手紙をこう結ぶ。「愛書家というものは、ただかようにしてのみ幸福に有無相通ずることができるのだ。<sup>57</sup>」

ハーヴァード大学理事の職にあったケラーは、寿岳に手紙を書く6日前、版元であるHarvard University Pressから本書を一部用だてることが可能である旨を知らされた。限定500部のうち第194番の『夜想詩』は、こうして寿岳に贈り届けられたのであった<sup>58</sup>。なお本書『夜想詩』に序文を執筆したジェフリー・ケインズは、1927年に死去した米国のブレイク作品蒐集家、寿岳が記す「故W.A. White氏」ことウィリアム・オーガスタス・ホワイトの遺族から蒐集作品を託され、1928年にはこれらのブレイク作品について大英博物館への移管を果たしている<sup>59</sup>。

『キルヤム・ブレイク書誌』は柳宗悦の意匠により、黒田辰秋の木版、青田五良の袖手織など日本独自の工芸を装幀に用いたこの書物は、日本における書誌学の嚆矢とされたが、それだけではない。ウィリアム・ブレイクを学究対象とする寿岳と、欧米の出版者を歴訪して

---

<sup>57</sup> 寿岳文章「絵本どんきほうて由来」『柳宗悦と共に』（綜合社、1980年）、pp. 297-299.

<sup>58</sup> 'I have just been notified by the Harvard University Press that, on December 12, they forwarded to you one copy of Blake's illustrations of Young's "Night Thoughts." This is the limited edition. number 194.' 'Only thus can we bibliophiles negotiate happily amongst one another.' (向日庵資料「1929年12月18日付 カール・ケラーから寿岳文章宛て書簡」より抜粋。本書簡の所在については向日庵資料調査にあたった中島俊郎氏よりご教示をいただいた。)

<sup>59</sup> Geoffrey Keynes, *Blake Studies: Essay on his Life and Work* (Oxford University Press, 1971.) p. 57.

きた伊藤との邂逅が、ちょうど「ウィリアム・ブレイク百年忌」にあたる1927年において実現したことは、本書におけるもうひとつの大きな意義であったといえよう。さらに、ボストンにおける柳を介して寿岳とケラーに友情をもたらした『キルヤム・ブレイク書誌』は、書物をめぐるダイナミックな架け橋となったのである<sup>60</sup>。

## 書誌学

寿岳が「書誌学」から学びとったものとはなにか。寿岳は『キルヤム・ブレイク書誌』に続けて、『書誌学とはなにか』（ぐろりあ そさえて、1930年）、*A Bibliographical Study of Ralf Waldo Emerson in Japan from 1878 to 1935*『日本におけるエマソン書誌』（向日庵私版1947年）、京都大学に博士請求論文として提出した *A Bibliographical Study of William Blake's Note-Book*（『ウィリアム・ブレイク「ノート」の書誌学的研究』（北星堂、1953年）といった「書誌」や「書誌学」に関する書物を刊行している。

寿岳の日記によれば、1930年7月に読んだロナウド・マッケロウの『文学研究者のための書誌学入門』によって「書誌学」に開眼する<sup>61</sup>。本書によって書物に対する理解と愛情を深めた寿岳は、日本にもその学問を普及するべく、同年には『書誌学とは何か』を刊行した。寿岳のもとには1931年1月30日付で「The Biographical Society（英国書誌学会）」の入会許可書が届けられ、寿岳は学会の「スエズ以東、ただ一人の個人会員」となったのだった。1927年の秋、オックスフォード大学出版局からマッケロウの『文学研究者のための書誌学入門』が刊行されると、「タイムズ文芸付録」11月3日号が本書をとりあげ「批判的書誌学」の標題でくわしく紹介した。寿岳はこれが契機となって「タイムズ文芸付録」に毎号のように掲載されるサザビーズやクリスティーズの古書競売記事に目を通すようになったと回想し、こう語る。「私が批判的書誌学というまったく新しい学問に心ひかれ、マッケロウ博士の新著を購入し、熟読の結果、矢も楯もたまらず、マッケロウ博士に手紙を書き、博士と、もう一人の会員の推薦で、英国書誌学会の会員となる機縁を作ったのは、じつにこの無署名の冒頭論文にほかならぬ。（論文の筆者が、私を推薦してくれたもう一人の会員、グレッグ博士だと知るの博士とも文通するようになる数年後であった。）<sup>62</sup>」

寿岳が読んだマッケロウの書誌学が、過去のものではなく同時代における学究である点に着目したい。寿岳はマッケロウの書誌学を、自身が編纂した『キルヤム・ブレイク書誌』に照らして読み、読後一年をまたずに『書誌学とは何か』（1930年）を著わすが、これは1927年のマッケロウによる出版から3年後の発表ということの意味する。さらに翌年には「英国書誌学会」への入会許可が実現していることを鑑みれば、寿岳がマッケロウによる一

---

<sup>60</sup> ブレイク学者としての柳宗悦とジェフリー・ケインズの交流、寿岳文章『キルヤム・ブレイク書誌』に関する検証に、佐藤光『柳宗悦とウィリアム・ブレイク 環流する「肯定の思想」』（東京大学出版会、2015年、pp. 37-61.）がある。

<sup>61</sup> 中島俊郎「寿岳文章 人と仕事」『寿岳文章人と仕事展』（寿岳文章人と仕事展実行委員会、2021年）、p. 50.

<sup>62</sup> 寿岳文章「病める書物」『寿岳文章書物論集成』再掲、p. 822.（初出：1975年）

冊の書物を通して掴みとった国外の学問が、国際的かつ同時代の生きた学問であることを示しているといえよう。寿岳が、京都帝国大学英文学会の招きを受けて、学友会館の階上の一室で論じた「書誌学とはなにか」とは、いわばマッケロウと寿岳との「書誌学的対話」ではなかったか。寿岳はさらに書誌学について自己理解をすすめてゆくなかで、日本における書誌学の意義をつかもうとする。

### 日本書誌学会

寿岳は「書誌学」の定義を、多くの異本を対校照合して、紙質、筆蹟、綴じ方、奥書などの外在的要件を詳密に研究することによって本文の原形に近づくこと、その手段となる学問であるとした。寿岳は日本における書誌学会の実現を願ってこう空想する<sup>63</sup>。

第一に目的として、日本における典籍、とりわけ本文批評上最も解明を必要とする時代の文献について、物質的伝達の経路を調査研究すること。会員には物質的存在としての書物に重要性を認める国漢文学者、史家、文明批評家などがふさわしい。第二に会員の心構えとして、書物を偶像視し愛玩物視する「愛書家」気質から脱却し、科学的意識をもって私人的な書物愛を目的に向かわせること。緻密な観察と豊富な想像力を訓練を惜しまぬこと。第三に観察の手法として、英国書誌学会における16世紀典籍の研究方法にならい、日本の写本時代から活版印刷時代まで、すべての時代における文献伝達の手段について、あらゆる方面から調査研究すること、とした。

空想上の「日本書誌学会」の趣旨についてこう描いた寿岳の著述は、書物研究家の庄司浅水(1903-1991)が主宰する『書物展望』第2巻第3月号(1932年3月1日)に掲載され、庄司は本稿を、1931年12月に実体として発足した「日本書誌学会」へのはなむけの言葉と位置づけた。「日本書誌学会生誕記<sup>64</sup>」によると、「昭和六年十二月五日!記念すべき学会誕生の日!」として「屈指の蔵書家、書誌学者、書誌学に関する実際家」が麴町区平河町の安田善次郎本邸に参集し、徳富猪一郎(蘇峰)、和田萬吉、安田善次郎、長澤規矩也、川瀬一馬、新村出ほかが発起人として推挙されている。会は書誌学によって「国漢学(東洋学)検討の指標」とすることを表明し、事業として「コロタイプ刷十輯、限定三百部、定価一円、四六倍判」の『善本影譜』を年一回刊行することが計画された。発足後の初回となる会では、『善本影譜』に掲載する典籍として安田文庫<sup>65</sup>に所蔵される嵯峨本「三十六歌仙及誠齋集等数点」や「五山板閣本」を展示し、典籍の「実物批判討議」が行われた。英国書誌学会に所属する寿岳が誕生を願った、学問としての「日本書誌学会」はこうして実現した<sup>66</sup>。

<sup>63</sup> 寿岳文章「欧米の書誌学会」『書物の共和国 定版』(春秋社、1986年)、pp. 287-289.

<sup>64</sup> 樋口龍太郎「日本書誌学会生誕記」『書物展望』2巻12号(書物展望社、1932年12月)、pp. 64-65.

<sup>65</sup> 安田文庫は、実業家初代安田善次郎(1838-1921)の二代目、安田善次郎(1879-1936)が収集した蔵書。

<sup>66</sup> 寿岳文章による「書誌学」に関する一連の著述と「日本書誌学会」の設立を時系列に整理すると、『書誌学とは何か』1930年／「書誌学について」(『越後タイムス』1931年8月6日、7日)／「日本書誌学会」発足1931年12月5日／寿岳文章「欧米の書誌学会」1932年1月執筆、『書物展望』2巻3号1932年3月1日掲載／となる。なお、『書物の共和国』(定版)所収「書誌学とその職分」の文末に「昭和6年[1931年]1

## 用紙における手漉紙

寿岳が英国書誌学会から学んだ最大の収穫は、「紙」とりわけ「漉き入れ標」が、書物の科学的研究においていかに大切であるかを学んだことであった。恒久保存が必要な外交文書には日本の鳥の子紙が使用されているにもかかわらず、おしげもなく読み捨てられる『キング』や『主婦の友』が、大量の安物の洋紙を印刷用紙に使われる日本の現状に「一本の紙捻さえできぬほど、和紙は私達の周囲から遠ざけられた。<sup>67</sup>」と危機感をもった。寿岳はいう。「和紙への認識や理解はもっともっと深められねばならない。オックスフォード大学の出版部などで殊に優秀なのが用いられるあのインディア・ペーパーは前世紀の後半に名塩の泥入薄様が偶然英人の手に渡ったのが動機で作られるようになったらしい歴史を、どれだけの日本人が知っているだろうか。<sup>68</sup>」寿岳は英国書誌学会が示す方法に従い、西洋諸国の手漉紙をできるだけ多くとりよせて研究を始めていたが、1932年に日本ファシズム連盟が結成されて以降、英米両国との文化交流に支障が生じ始める。このときに新村出から「和紙の歴史地理的研究」に専念してはどうかと助言をうけたことが、のちに妻静子とともに始めた三年にわたる紙漉村調査の旅へとつながってゆくことになる。

旅は、日中戦争が始まる1937年、妻静子の郷里とも療養中の寿岳が滞在した寺とも縁深い紀州方面からはじまった。「あちらの村で応召の旗印を見、こちらの駅で遺骨を迎えるのに会うにつけても、時局の重大さを想い、いわば戦地に赴くつもりで、自分の研究に没頭して倦むところを知らなかった。<sup>69</sup>」寿岳がこう述懐するその旅の行程を追ってみると、紀伊半島をつなぐ鉄道敷設がまだ完了しない頃、深山幽谷の熊野の旅は川をくだるプロペラ船を頼る難渋の道程であったことがよくわかる。この地方には「花井紙衣(けいかみこ)」の産地として有名な九重村宮井や、白河法皇が熊野参詣前より「音無紙」を漉いていると伝わる敷屋村小津荷があった。記録によれば、寿岳が訪れた1938年において、製紙用木材パルプを製造する会社及び工場総数は7会社、29工場あり<sup>70</sup>、同年11月6日には「新宮木材パルプ株式会社」が資本金百万円で創立され、1940年の6月から創業を開始している<sup>71</sup>。熊野三山の神おわす紀州熊野路の紙漉村調査は、古式ゆかしい手漉和紙と、木材の町新宮のパルプ工場が同居するという点において示唆的であった。

旅から十年が経ち寿岳はいう。「[熊野川]河口新宮市の本州製紙熊野工場では、おそらくいま日本で得られる最も上質の書物用紙やノート用紙を漉いているが、(中略)舟行半日、同じ川の上流に望む敷屋村で行われている最も素朴な手漉和紙を結びつけるのに多くの困

---

月」と記されているが、『寿岳文章書物論集成』が本稿の初出と記す『書物展望』4巻1号の発行日は1934年1月1日であり、これが「日本書誌学会」設立後の執筆によるものかどうか判断できない。

<sup>67</sup> 寿岳文章「和紙復興」『書物の道』再掲、p. 111. (1933年3月13日記)

<sup>68</sup> 寿岳文章「和紙と装幀」『大阪朝日新聞』(1941年6月8日)

<sup>69</sup> 寿岳文章『和紙風土記』(河原書店、1941年)、pp. 223-224

<sup>70</sup> 農林省山林局編『山林彙報』33巻3号(大日本山林会、1938年11月)、p. 4.

<sup>71</sup> 新宮市史資料編さん委員会編『新宮市史年表』(新宮市、1986年)

難を感ずるかもしれない。」「スケールは違い、人の手と機械の手との相違はあっても、この二つの製紙場は、まったく同じ原理にもとづいて動き、たがいにそれぞれ特色のある紙を漉き出しているのである。同質の文化は、あくまでも公平に認識され、評価され、また尊敬されねばならぬ。<sup>72)</sup>つまり建築や服飾をみれば顕著なように、西洋風な生活を学んで以来の日本人は「異質の文化を平気で併存させる勇敢さ」が発達する一方「同質の文化を正しく把握し整理する感性」に欠けていると寿岳は突く。「機械製紙工場の最もよく発達した英国でも最良の書物用紙は依然として手漉きである事実」はすなわち、書物の用紙において和紙か洋紙かという区別や、手漉きか機械漉きかという区別は無意味であり、重要なことは、受け継がれた伝統の手法によるすぐれた紙を、正しく認識し評価できる感性であることを示す。ならば、たとえば寿岳が書物において認めた「同質の文化」としての「美」とはどのようなものだろうか。具体的に二つの例をみてみよう。

まず台北の愛書家、西川満が刊行したローゼンバッハ作『墳墓』(矢野峰人訳、媽祖書房、1936年)をみてみよう。純粹な和紙が用いられ、組方や刷りに注意が行き届いているだけでなく、表装に葬式用麻布を用いたことは、地方色ゆたかな装幀として「書物が工芸性を蹂躪することなく内容にじっくり呼吸を合わせている」と寿岳は評価する。加えて、文化の中心が東京に偏り、大阪や京都の出版物が顧みられない傾向があるなかで、このように「東京を遠く離れた辺土でみごとな書物が刊行されるのは歓快に堪えない」とした<sup>73)</sup>。また、本阿弥光悦による「嵯峨本」にも、書物道として学ぶべきことが多いと寿岳はいう。第一に活字について、英語における‘Ligature’のように、二つ以上の文字を一つの活字に組み合わせる「連字」や「くずし字」を活字として用いることにより、漢字とかなが入り交じる紙面全体を美しく調和させたこと、第二に用紙について、楮で漉いた紙と三桮で漉いた紙の、強さと美しさにおける弱点を克服するために、雁皮で漉いた唐紙に胡粉や雲母で美しい花鳥模様を刷りだして用いたこと、これは文字の読みやすさにおいては最善ではないにせよ、学ぶべきは用紙についても心を尽くした点であるとした<sup>74)</sup>。地方も時代も異なる、西川の『墳墓』と光悦の「嵯峨本」に共通する「同質の文化」としての「美」とは、いずれも書物の内容と個性にふさわしい姿を求めた出版人が生み出したものである。

### 用紙統制

寿岳による自作年譜には「1942年／用紙の統制きびしくなり、出版の困難甚し。<sup>75)</sup>と記される。「最近和紙の装幀が急に殖えてきた。表紙に和紙を用いないまでも、見返しに和紙をあしらうことは、寧ろ書物道の常識になったような気さえする。」「書物に、ことに日本の書物に格の正しい和紙を使うことは、断じて代用ではなく本用である。書物人はもっと早く

<sup>72)</sup> 寿岳文章「書物の歴史」『書物とともに』(富山房、1980年)、pp. 81-82。(初出：1950年)

<sup>73)</sup> 寿岳文章「辺土の美書」『大阪朝日新聞』(1936年11月10日)

<sup>74)</sup> 寿岳文章「光悦と書物道」『谷島屋タイムス』(1936年3月)

<sup>75)</sup> 「年譜」『寿岳文章・しづ著作集2』(春秋社、1970年)、pp. 371-390.

和紙の美と用途に目ざめるべきであった。<sup>76</sup>」これは1941年の寿岳の言葉であるが、和紙の用途としての言及は見返しや表紙にとどまっている。しかし行間を読むならば、日本の書物において用紙には和紙が本用とされてきたことを忘れてはならない、と述べたものでもある。このときすでに、1938年には新聞社に対する用紙供給の制限が始まっていた。「活字は痩せ細り、減頁は何とか文句をつけて行われ、紙幅は水から上った猫みたいに貧弱になった。」と寿岳は「朴念人」のペンネームで記し「他と不釣合に紙面を横領している囲碁将棋欄」に貴重な紙面を占領させるのは「新聞の罪」であるとまで非難する<sup>77</sup>。また、年に一度の大掃除の日に、畳の下に敷かれた一年前の古新聞をつい読み入りこう記す。「極限と思った去年の春あたりの印刷面の圧縮も、実は極限ではなかったのである。極限でなかったればこそ、去年の新聞は今日の眼から見るとまだゆとりが多いのである。」そして、「旧態依然たる大見出し」、毎日のように大きく載る「国内の誰もが知りつくしている同じ大臣の顔」を整理し、文章を簡易化すること、これらによって用紙は節約できると批判をこめた改善策をあげた<sup>78</sup>。

用紙不足をめぐって寿岳が問題視したのは、少ない紙をどう使うか、であった。「私は、我々の有する印刷文化が我々の生活から消失することは、決して人類のために幸福をもたらさずと断言し得る。」としてこう述べる。何故であるか、「今の印刷文化は、その輝かしい過去に比べて、幾多の工芸的な美しさを失っているとはいえ、尚その文化の本質は失うことなく、精神的に、感覚的に、我々の生活を甚だゆたかなものとしてくれる」、だからこそ「将来、もっともっと人間の生活が機械化されて、人間はコンヴァイヤアの側に一定の姿勢を要求される一木偶にすぎなくなり、今の印刷文化が過去の遺物とされるような時代が来るなら私は能楽や歌舞伎や文楽を守ると同じ意味で印刷文化を守ろう。われわれの日本的な印刷文化を守ろう。<sup>79</sup>」

同時代に、フランス文学者の河盛好蔵（1902-2000）がフランスの詩人ポール・ヴァレリー（1871-1945）の言葉を引用して『印刷雑誌』に寄せた一文は、寿岳の印刷文化への念と書物の存在意義を代弁しているので挙げておきたい。ヴァレリーはいう。「作家の精神は、印刷物が差し出す鏡のなかに己が姿を眺めるのである。もしも紙とインクとがしっくりして、活字の形も美しく、一頁一頁が立派に刷りあがっている場合には、著者たる者は自分の言葉と自分の文体とを事新しく感ずることになるのである。気づまりと誇らしさを覚える。恐らく自分が受ける筈もない名誉の衣を着せられているような気がする。」このように、愛しむように印刷物にむきあう、作家としてのヴァレリーの言葉に感じ入った河盛は現実をこう省みる。「世のなかには、書かれたものの内容と、それに与えられた印刷とを混同して考える人が決して少なくはない。上質の紙に美しく印刷されてあれば、それだけでもって、

---

<sup>76</sup> 寿岳文章「和紙と装幀」再掲

<sup>77</sup> 朴念人「遊んでゐる紙面」『書物新潮』（1940年6月15日）

<sup>78</sup> 寿岳文章「紙不足への対策」『東京新聞』（1943年7月29日、30日、31日）

<sup>79</sup> 前掲記事



内容までが、優秀であるように考える人々がある。このような読者に限って、所謂豪華本の愛好者であり、読む本よりも見る本の蒐集家であり、それでいて一冊の本のなかに、いかほど誤植があろうともあまり気にしない人々である。<sup>80)</sup>

### Ⅲ.文化はいかに略奪されたか

#### 『関西学院新聞』にみる大東亜戦争

1942年2月20日発行の『関西学院新聞』が組んだ特集記事「大東亜共栄圏と国語の地位」に、寿岳は「民族発展と国語の史観 必然的な将来の対策」と題する論説を発表した。この論説は1940年に第二次近衛文麿内閣が「大東亜新秩序」を建設した2年後のものである。寿岳は1919年に関西学院高等学部文科英文学科に入学、卒業した1923年の春から英語教師として教壇に立ち、1934年からは法文学部講師として英文学を講じていた。寿岳が本論説を発表した当時の『関西学院新聞』からは、「大東亜戦争」時局下における「挙国一致」の機運が学院にもあまねく浸透する状況がみてとれる。1941年9月20日の号には、「国土防衛の備今や成る 関西学院「報国隊」発足す」の見出しのもと、「文部省の訓令を接受した学院」は省の要請により「別面掲載の如く報国隊を急遽編成一既に活動を開始し始めている」とし、「関西学院報国隊幹部氏名表」には「第五大隊附職員」として寿岳文章の名が並ぶ。「全校編隊の組織を樹て隊の総力を結集して適時出動、要務に服してその実行を収むる」こと、「学校教練、食糧増産作業その他各種団体訓練」の実施に協力することを命じる文部省訓令により、「関西学院報国隊規定」が1943年12月より施行された。

1942年に寿岳が発表した論説は次のような内容である。「日本語の書きあらし方、すなわち文字や仮名遣の方面で未解決の問題はあるにしても、国語そのものすなわち生きた言葉・語言葉としての日本語[の]ゆたかさ・美しさを否定する人はあるまい。すなわち客観的に言語学的に見て、私は日本語がその簡易の姿においても十全の姿においても、十分に大東亜共栄圏交有母語としての資格を有するものと考え。」そして、民族の生きた歴史である固有の言語を、学術的・人文的な見地からその存続に配慮すると同時に、日本語と日本の文化を媒介として「東亜共栄」の本質に徹するようにしむけることが、事に当る人に求められた仕事である、とした。当面は日本語を補助する言語として、エスペラント語のような人為語を造ること、あるいは「基礎日本語、すなわち日本語を最も簡易化したもの——これは既に試験済みである——をまず大東亜の共通語とし、徐々に正常な日本語へと導く」のがよいのではないかと論じる<sup>81)</sup>。

この時期には、『国際語研究』(1933-1936)、『文字と言語』(1934-1938)等においてエス

<sup>80)</sup> 河盛好蔵「紙と印刷」『印刷雑誌』27巻3号(1944年)『「印刷雑誌」とその時代』(印刷学会出版部、2007年)、p. 438.

<sup>81)</sup> 寿岳文章「民族発展と国語の史観 必然的な将来の対策」『関西学院新聞』(1942年2月20日)、1面

ペラントに関する研究が充実しているが<sup>82</sup>、寿岳のエスペラントをめぐる言及については、かつて大阪法案寺南坊においてロシア詩人エロシェンコや岩橋武夫、盲学校教師や牧師たちと交わりエスペラントを学んだ青年期の体験や、柳と共同刊行した雑誌『ブレイクとホキットマン』にブレイクの詩をエスペラントに翻訳掲載した経験は、背景として無関係ではないと考えられる。寿岳は本論説の目的を、「国語協会」の一員として国語問題への関心を高めることであると記しているが、協会に所属した経緯については不明である。1930年に設立された「国語協会」は仮名遣い、字体整理、漢語整理など明治以来の国語国字問題の解決を目的とし、設立時の理事長には近衛文麿公爵が選ばれている。

『関西学院新聞』における「大東亜共栄圏と国語の地位」には、このとき寿岳と同様に「国語協会」に所属していた、社会運動家、小説家の高倉テルによる論説も掲載された。高倉テル（1891-1986、本名高倉輝）は京都帝国大学英文科を卒業したのち、長野県の農村に移り住んで農村運動に参加し、1933年に治安維持法によって検挙された。出所後、明治以後の統一性のない日本語の現状は国語としての本質にそむくものであるとして、国語国字合理化運動にとりくんだ高倉は、「ニッポン国家の正しい進歩」のためとして、「すべてのニッポン人よ！ニッポン語を守れ！すべてのニッポン人は、やさしい、清らかな、そしてあくまでも意味のはっきりしたニッポン語で、一人のこらず結びつかなければならない。<sup>83</sup>」と説いた。1935年以降の高倉は、執筆においてできるだけ完全な「発音式カナずかい」と「分け書き」により表記しながらも、やがて「一、できるだけ漢字を少なくする。二、分りにくい漢語を使わない。三、助詞の「ハ」「ヲ」「ヘ」のほかは、すべて「発音式カナずかい」による」という1924年の文部省「臨時国語調査会」の方針を受け入れた<sup>84</sup>。1942年の『関西学院新聞』に寿岳とならんで掲載された論説「表意文字と音標文字 国語の優秀性とセイリ」において高倉は、「日本語はこれから日本語を話す人ぜんたいのものであつて、何も日本人だけのものとは限らない」、「アジアをヨーロッパ人の侵略から開放し、日本の正しい指導の下におく」ためには、いまこそ大きな立場から日本語や文字の問題について思い切った整理をすべき時である<sup>85</sup>、と論じた。

## 文化の略奪

大東亜共栄圏構想下における「拳国一致」の機運は、言語においてもこのように顕著にあらわれた。戦争は人々から文化を略奪する。大東亜戦争の前半、大日本帝国が占領国においておし進めた「日本語教化政策」は、いわば戦勝国が占領国住民に対しておこなった文化の略奪であった。1942年10月20日、陸軍は日本の各新聞社に南方占領地域を割り当て、「ア

<sup>82</sup> 安田敏朗『国語の近代史』（中央公論社、2006年）、p. 297.

<sup>83</sup> 高倉テル「肅」『ミソクソその他』（恒文社、1996年）、pp. 199-200.（本書は高倉が1932年から1938年のあいだに書いた随筆のなかから十編を選んで、新たに書きかえて1948年に美知書林より刊行されたものを復刻したものである。）

<sup>84</sup> 高倉テル「まえがき」前掲書、pp. i - ii.

<sup>85</sup> 高倉テル「表意文字と音標文字 国語の優秀性とセイリ」『関西学院新聞』（1942年2月20日）、1面

ジアは一つ」の旗印のもと、現地日本人への報道と原住民に対する「ニッポン語」教化を担う新聞を発行させた。各新聞社による『ジャワ新聞』、『マニラ新聞』、『ビルマ新聞』等のほか、東日新聞社（大毎）は、原住民向けのカタカナ主体の新聞『週刊ニッポンゴ』を発行した<sup>86</sup>。第30号となる1943年9月6日の巻頭には、本号に「ゲキ」（劇）を掲載した目的をこう記す。「コレハ、ミナサン ニ クワイワ ノ シカタ ヲ、オボエテ モラフ タメデス。フダン ツカフ カンタンナ コトバ ガ デテ キマス カラ、ヨク オボエテ クダサイ。オボエタラ、ウチ ノ ヒトヤ、オトモダチト ニツポンゴ デ オハナシ ヲ シテ ゴランナサイ。<sup>87</sup>」占領地において新しい言葉と文字をより早く、より広く浸透させるために、児童を対象とした教化が重要視されたことが、この記事からもみてとれる。

児童を標的として行われてきた思想教化の実態は、国や時代を問わず、戦争と侵略の史実が繰り返し語るところである。晩年の寿岳は、1910年に読んだ雑誌『少年世界』についてこう回想する。「その雑誌が韓国併合記念号を組んだ。その表紙絵に、日本の少年が雄鶏をこう抱きかかえるようにして片方の手をあげて万歳をしている。誰が描いたのか忘れましたが、鶏で朝鮮、韓国を表しているんですね。私は子供心にもこれはえらいことになったなあ、とはらはらしました。<sup>88</sup>」同年には、寿岳のもうひとつの愛読雑誌『日本少年』においても、喜田貞吉（1871-1939）による「韓国併合の意義」と題する読みものを掲載している（第5巻12号、1910年12月発行）ことが示すように、日本においても、母国による戦争や侵略を正当化する思想強化が児童に対してなされたのであった。

## 書物の敵

寿岳が1940年に執筆した『新聞雑誌及び出版事業』は、英米における「書物の出版が肇ったそもそもの発端から、現代にいたるまでの出版事業と、新聞や雑誌の興亡」を書いたものであるが、なぜこのような時局下に敵国の文化を書くことが可能だったのだろうか。奥付によれば発行所「研究社」による予約出版である。寿岳は本書のむすびにいう。「目下の世界大戦は、英米の出版事情の上にも容易ならぬ重圧を加えるであろう。1940年の夏には、英国においてFaber and Faberを中心に、書物の戦時購読税反対の猛運動が作家側と出版者側の協力で行われ、遂に功を奏し、ミルトンの精神未だ亡びずの感を抱かせた。<sup>89</sup>」寿岳は

---

<sup>86</sup> 福山琢磨「占領地で原住民向けの新聞も発行」『「ニッポンゴ」戦勝国・大日本帝国が南方で発行した原住民への「日本語教化政策」新聞』（新風書房、2015年）、pp. 3-5.

<sup>87</sup> 『週刊ニッポンゴ』（1933年9月6日）前掲書、p. 21.

<sup>88</sup> 住井すゑ、寿岳文章『時に聴く一反骨対談』（人文書院、1989年）、p. 129.

<sup>89</sup> 寿岳はこの英国における「書物購読税」について、別の雑誌記事にも次のように書いている。「【主】…この戦争で、学界の紀要も一向届かなくなつた。唯近頃面白いと思つたのは、英国で書物の購読税を取り立てると言うので本屋や著者が夏前から騒いでいたのが、この間いよいよ取りやめになつたことだ。『敵国ドイツでさえ大いに出版を援助している』などと泣言を並べていた時には、英国の出版界も籬（たが）がゆるんだかと、そぞろに物の衰れを感じたが購読税絶対反対の単行本まで発行して堂々と政府に喰つてかかったところは、さすがに「アレオパガス訴訟」を書いたミルトンの後裔だけはあると見直したよ。」「【客】ひどく感心しているが、僕はあの購読税を利用して、国策に反する本には重税をかけ、国策に沿うたもの

「創刊の精神を失い、他紙と合併し、やがて力なく消えて行く」ような「良心的な雑誌の刊行が極めて困難な時代」にあって、英国の出版界はこの危機をどのようにして切り抜け、立ち直ってみせるのか、英国における「購読税」をめぐる闘いは英国そのものの試金石となる、として行く末を注視した<sup>90</sup>。

寿岳は続けていう。「昭和十五年の秋の一夜、筆者は大阪朝日会館の楼上で、久々に会うひとりの友と語り合っていた。」その人物は、かつて英国の著名な出版社を歴訪して大きな刺激をうけ、出版業を始めた人、というから伊藤長蔵であろうか。オックスフォード大学出版局が、出版後 200 年近く経過した新約聖書を出版当時のままの値で売った、という事実には堅実な英国気質をみた寿岳に対し、この友人は、だからドイツに負けるのだ、と言った。それでも寿岳は、書物美を生みだしてきた英国の出版史から学ぶべきことがあるという。「常時と非常時のわかちなく、すぐれたるものは常に摂取した捨てないところに、国家を偉大ならしめる契機が含まれ、戦いを超えて浸潤する文化の大いなる使命がある。」とし「声聞根性を解脱した大乘精神」に立脚せよと結ぶ。

ひるがえって、日本における「書物の危機」を寿岳は何によって克服することができるかと考えたのか。「声聞根性を解脱した大乘精神」にたって「文化の使命」をまっとうするとは、いいかえれば、国と時代の境をこえた「人類的幸福」の立場にたって「書物の使命」を守ることである。寿岳は書物の使命を、思想、言論、出版の自由の担い手として、自己を絶対視し他者の次元をいっさい認めない「頑迷」から人類を守ること、とした。「思想の自由とは、われわれの同意する思想の自由ではなく、われわれの憎悪する思想の自由を保障することだ。」というアメリカの裁判官ホームズの言葉を引用し、戦前の日本における最も憎むべき「書物の敵」は、治安維持法という稀代の悪法を最大限に拡張解釈する「頑迷な内務官僚」どもであった、と寿岳は振り返る<sup>91</sup>。

## 筆禍の記録

1959 年に寿岳は、明治期資料文献を扱った高尾書店の古書目録『書林』（4 月 10 日）に寄せて「発禁本図書館」の構想を示し、思想、言論、出版の自由が脅かす暗黒時代が存在したことを葬り去ってはならないと世に訴える。内務官僚によって強行された「愚かしい発禁処分」の全貌を、その書物のどのような箇所が、または全体が、どのような理由によって、誰の手で頒布禁止処分を受けたのか、これらを詳らかにすることが「発禁本図書館」の生命であるとした。「人類が書物を思想伝達の手段とするようになってから、たとえ一度でも、時の為政者や権力によって頒布を禁止された書物」を複製でも翻訳でも、それが不可能なら書名と解題だけでも残しておかなくてはならない、と論じた<sup>92</sup>。

---

は免税するという風にすれば、理想の統制と財源の附加と、一石二鳥の名案だとひそかに考えていたがね。」  
(朴念人「書物購読税」『書物新潮』1940 年 11 月 25 日)

<sup>90</sup> 寿岳文章『新聞雑誌及び出版事業』（研究社、1941 年）、pp. 66-67.

<sup>91</sup> 寿岳文章『書物への愛』再掲、pp. 55-56.

<sup>92</sup> 寿岳文章「発禁本図書館」『本の話』（白風社、1964 年）、pp. 197-199.

寿岳が描いた「発禁本図書館」の構想は、宮武外骨『筆禍史』（雅俗文庫、1911年）、斎藤昌三『近代文芸筆禍史』（崇文堂、1924年）、『現代筆禍文献大年表』（粹古堂書店、1932年）等がその使命をはたしている。斎藤昌三（1887-1961）は、明治初年の1868年から1921年までに筆禍を受けた160作以上を対象とした『近代文芸筆禍史』を刊行し、「序」にいう。「風致上、治安上より見て、当局から忌諱せられた作品を一括」し、史料として全国図書館に遺すことによって、読書家、著作家の指針と後世研究のために供したい、「かかる著にして、卿かなるなりとも当時の創作的態度を知り、時代思想の変化を類推し得られるれば、余が二十余年の労は酬いらるるものである。<sup>93</sup>」本書には、寿岳が「発禁本」をめぐる著述において触れた、宮嶋資夫『坑夫』（近代思想社、1916年）、中山昌樹訳『ダンテ地獄篇』（洛陽堂、1917年）、長与善郎『誰でも知っている』（『白樺』掲載、1917年）の書名が並ぶ。『誰でも知っている』については「日露戦役中の海戦、漂泊の一場面を題材にしたもので、戦場の非道な裏面と余りの惨状の描写に、当局の眼は光ったものであろう。」との解題が付され<sup>94</sup>、『ダンテ地獄篇』についての解題はないが、寿岳によると本書の発禁処分の原因は挿絵であった<sup>95</sup>。

英国の詩人ジョン・ミルトン（1608-1674）は、チャールズ一世が1643年に「許可なく書物を印刷・翻刻・輸入」することを禁じた印刷検閲令を覆し、出版と言論の自由を奪還するために『アレオパディティカ』(*Areopagitica A Speech of the Liberty of unlimited Printing*, 1644.)を執筆した。ミルトンはいう。「多くの人間は地上の厄介者として生きる」ものであり、概して「時代の変遷を重ねても一度棄却せられた真理の損失は償われぬ」からこそ「注意しないと、善良な書物を殺すことが殆ど人を殺すのと同然なことになる。<sup>96</sup>」このミルトンによる「許可なくして印刷する自由のためにイギリス国会に訴える演説」について寿岳は、「出版の歴史に輝く不滅の大文章」と誰もが認めるものでありながら「一部有力者の消極的な関心と、Stationers' Company<sup>97</sup> [書籍出版業組合]の怨みを買っただけで、反響は余にも少なかった」と述べ、ミルトンの憤懣が託された次のような十四行詩を示した。「古くより

---

<sup>93</sup> 斎藤昌三「序」（崇文堂、1924年）、pp. 1-4. 斎藤は「本書校を了るの日、偶々九月一日関東大震災に逢ひ、(中略)而してその史料は永久に亡び、愈々本書刊行の必要を来せるを思ふ。」と「序」のおわりに附記している。

<sup>94</sup> 斎藤昌三『近代文芸筆禍史』前掲書、p. 34, p. 81.

<sup>95</sup> 寿岳「発禁本図書館」再掲、p. 199. なお中山昌樹訳『ダンテ地獄篇』（洛陽堂、1917年）の挿絵目次には「ダンテ肖像／ジオット」「ダンテとヴェルギリオ／(1491年)」「パオロとフランチェスカ／ジェネリ」「地獄の河アケロンテ／ドラクロア」「地獄の園／(バ里)」「血河のチェンタウロ／ポッティチェルリ」「鬼とチャムボロ／グライナ」「盗賊と蛇／ブレエク」「鉄鎖の巨人／ポッティチェルリ」と記されているが、現在「国立国会図書館デジタルコレクション」に公開されている本書挿絵の一部は欠落している。

<sup>96</sup> ミルトン『言論の自由 アレオパディティカ』上野精一・石田憲次・吉田新吾訳（岩波書店、1953年）、pp. 10-11.

<sup>97</sup> 1403年に組織された英国の書籍出版業組合。1557年に勅許をうけて組合員以外の印刷業を認めず1709年まで公式に違法出版物の取締りにあたった。

知られたる自由の掟により、我は世の人をしてその障害よりのがれしめんとせしのみなれど、梟や郭公鳥や、驢馬、猿、及び犬どものいやしき物の音、たちまちわがまわりに起こる。

<sup>98</sup>」書物の生命である「出版の自由」が奪われようとするとき、いかに声をあげ不滅の自由として確立させるか。「検閲」の歴史が示す人間の法則は、現代においても生じうる危機としてわたしたちは見逃してはならない。

### 書物愛と読書

ながい戦争が終結して寿岳はいう。「何もかもみにくい戦後日本の姿であるがそれが文化の最も直接的な表象であるだけに、いっそう読書人の心をさむぎむとさせる。もともと著者がわにも出版者がわにも、一般に書物の姿かたちについて十分な自覚がなかったところへ、書物にとっての最大の敵の戦争が、永い間思う存分にあばれまわったのであるから、こうなったことに少しの不思議もない。しかし、これをこのまま捨てておいてよいものであろうか？

<sup>99</sup>」たとえ物資が貧窮する時代下であれ、「書物への徹底した理解と深い愛情」があれば、もっと書物らしい書物が出来るはずである、と寿岳は、1948年の2月から9月まで、朝日新聞社の大阪出版研究室の有志たちとともに書物に関する勉強会をおこなった。寿岳はこの内容をもとに著書『書物の世界』を刊行したが、表紙カバーのデザインは、Eric Gill, *An Essay on Typography* (Lund Humphries, 1931, 1936, 1941.<sup>100</sup>) の装幀と同じ、表を赤色地に白抜き文字、裏をモスグリーン色地に白抜き文字である。これは、ギルが考案した本文用書体によって一般的な商業出版書籍の質を高めたことに、寿岳が範を求めて日本の商業出版のゆくすえに期待をこめたものであろう。

1969年に寿岳と布川角左衛門、美作太郎たちが主導して日本出版学会を創立した。「出版学」の英語公称には、寿岳が「鑄造した新語」である‘editology’が採用され‘The Editiological Society of Japan’とした<sup>101</sup>。その創立記念会において寿岳は「人間形成に果たす書物の役割」として読書体験をこう語る。読書とは本質的には孤独なものであるが、本とむきあうときには、本と自分が一つに溶け合うというくらいの覚悟が必要である。この著者対自分という二人の対話こそが読書の根本原則であり、書物が存在する意味はそこにある。寿岳は書物の存在意義をこのように述べ、出版とは、著者と読者を書物によって結びつけるものであると位置づけた<sup>102</sup>。「本を愛しても、本を集めても、本を読まないのでは、玉のさかずきに底がな

---

<sup>98</sup> 寿岳文章「英国出版小史」『本と英文学』（研究社、1957年）、p. 102。寿岳が翻訳したミルトンによる原詩を記しておく。‘I did but prompt the age to quit their clogs / By the known rules of ancient liberty, / When straight a barbarous noise environs me / Of owls and cuckoos, asses, apes, and dogs.’

<sup>99</sup> 寿岳文章「初版まえがき」（1949年）『書物の世界』再掲

<sup>100</sup> 寿岳が『書物の世界』を刊行した1949年までにEric Gill, *An Essay on Typography* は、1931年（初版）、1936年（第2版）、1941年（第3版）が刊行されていた。1936年版は、エリック・ギルが1930年に設計した活字を使用した1931年版をフォトリトグラフにより複製し、改編刊行したものである

<sup>101</sup> 寿岳文章「あとがき」『書物の共和国 定版』再掲、p. 460。現在の英語名称は‘The Japan Society of Publishing Studies’である。

<sup>102</sup> 寿岳文章「読書体験を語る」『書物の共和国 定版』再掲、p. 442。

いどころか、舌にふくまずして酒を語るに等しい。<sup>103</sup>」「何千何万の書物を、むなしく死蔵するよりも、一冊の書物でも深く読み入って、生きることの知識を身につける人こそ、はるかに立派な愛書家なのです。<sup>104</sup>」スイスの哲学者アミエルが示唆する「書物へのまことの愛がもたらすもの」を寿岳はこのようにとらえた。

『フィロビブロン』（書物への愛）は、さまざまな稜角をもつ薄暮の中世の理解に、かくことのできない文献の一つであろう。どうかすると文化に縁のない暗黒の時代としてうけとられがちな中世に、書物のはたした役割を、これほどいきいきと、具象的に、聖職者の立場から書いた人が実在したのは、まことに大きな驚きであり、書物ずきの私は、わけてもこの本に特別の愛着をよせてきた。<sup>105</sup>」寿岳はリチャード・ド・ベリー（Richard Aungreville, 1281-1345）が著わした *Philobiblon* を完訳刊行した本書（『書物への愛』古田暁訳、北洋社、1978年）に寄せてこう記す。かつて寿岳は、リチャードによる本書を「愛書経」と題して『書物展望』に1934年7月から1935年9月まで翻訳連載していたが、時局の圧迫により中断したまま完訳しなかった。ベネディクト派の僧であったリチャードの著書を、経典になぞらえて「愛書経」と翻訳したところに、仏教者である寿岳らしさがみえる。寿岳の解説によると、リチャードは当時の英国の司教が有する書物をあわせたよりも多数の書物を持ち、時間の多くを書物のために費やした。食事中にも侍者に書物を読ませ、食事がすむと読んでもらった事柄について議論し、学匠たちにとりまかれて学芸百般の清談に時を過ごすことを最上の楽しみとした。寿岳はいう。「およそ物に執着することは出家の身として避けねばならぬ迷執であるが、愛書も彼ほどに徹底すれば寧ろそれによって悟りへ至る因縁となる。」「リチャードの蒐書愛書は、全く利他の大衆を果すためであって、（中略）彼は決して書物を死蔵しなかった。ただ読む者に、諄々として書物を愛すべきことわりをさとし教えたのである。<sup>106</sup>」書物を死蔵することなく読書をわかちあうリチャードの「書物への愛」は、アミエルにも寿岳にも共通する書物愛であり、時代と国の境を越える普遍的な書物の存在意義である。

### むすびに

ここまで、書物に関して寿岳が語った言葉を時代に沿って拾いあげ、それぞれの時代背景が出版文化にあたえた影響をみてきた。寿岳が生きた時代の出版文化の歴史からは何がみえるだろうか。寿岳がいう「同質の文化を把握する感性」によってそれを見ようとするならば、現代における出版文化にも同質の問題をとらえることができるはずである。

---

<sup>103</sup> 寿岳文章「咨書家」『出版ニュース』No.680（1966年1月上旬号）、p. 10.

<sup>104</sup> 寿岳文章「書物にとってのおそろしい敵」『出版ダイジェスト』（1969年9月21日）1面

<sup>105</sup> 寿岳文章「序文」、リチャード・ド・ベリー『書物への愛 フィロビブロン』古田暁訳（北洋社、1978年）、p. 2.

<sup>106</sup> 寿岳文章「愛書経」『書物展望』4巻7号（書物展望社、1934年7月）、p. 110.

少年雑誌に夢をふくらませる文章少年と、活版印刷所で働く少年印刷工、書物の「美」に近づこうとした愛書家たち、関東大震災前後の印刷工場における労働問題とプロレタリア作家、他国支配のもとでおこなわれた言葉と文化の略奪、筆禍の時代における出版者と読者、これらの姿から何をとらえるか。美しいものをつくりたい、学びたい、人間らしく生きたい、社会に自分の言葉で伝えたい、真実を知りたい、読みたい、こうした「渴望する力」は人を動かす大きな原動力となる。

たとえば、現代における読書を考えてみると、はたして書物は「渴望」されているだろうか。読むこと、自分の言葉で語ることへの執着がどれほどあるだろうか。寿岳は読書を「自己との対決」と表現し、「読んだ」ではなく「読んでいる」という状態が真の読書であるという、いわば「‘ing’の読書」を重要視した。いいかえれば、自分が推す本を魅力的に、効果的に伝えることを競う「ビブリオバトル」で多数の票を獲得することよりも、自分自身と本とを「バトル」させる黙考の時間を豊かにせよ、ということである。寿岳の著述には、「主」「客」の対話形式によるものがいくつかあるが、これも対象を「自己対決」させる寿岳の思考法を示すものといえるかもしれない。言葉についてはどうか。情報としてのテキストを検索することに馴れ、体験の貧困から生じる言葉の貧困は、言葉そのものがもつ力と重さを忘れさせてしまう。わたしたちは、数多くの本を読み急ぐことなく、言葉を思考すること、言葉に語らせることにもっと時間をかけるべきではないだろうか。わたしたちが一生を終えるとき、これが自分にとって生涯の最もよき理解者であった、といえる本を一冊でも思い浮かべることができれば素晴らしい。

近年、書物の略奪史や読書史をテーマとする書籍の刊行が目立つ<sup>107</sup>。焚書や戦下の略奪から書物を秘密裏に守ろうとする人々がどの時代にも存在したが、こうした人々を動かした原動力とはなにか。「書物が焼かれる場所では、いずれ人間も焼かれるだろう（ハインリヒ・ハイネ、1823年）」、「過去を記憶にとどめない者は、過去をくり返す（ジョージ・サンタヤーナ、1905年）」といった先人の言葉<sup>108</sup>のように、わたしたちが出版文化における過去の歴史から学び、未来の標とするべきことは多くあるはずである。

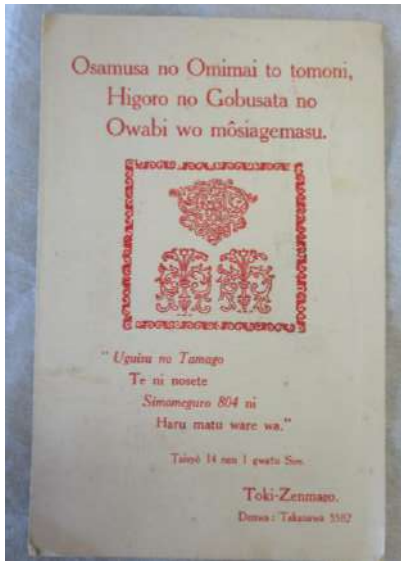
[付記：引用文における旧漢字、ひらがな表記、送りがなについて、適宜現代表記に改めた箇所がある。]

---

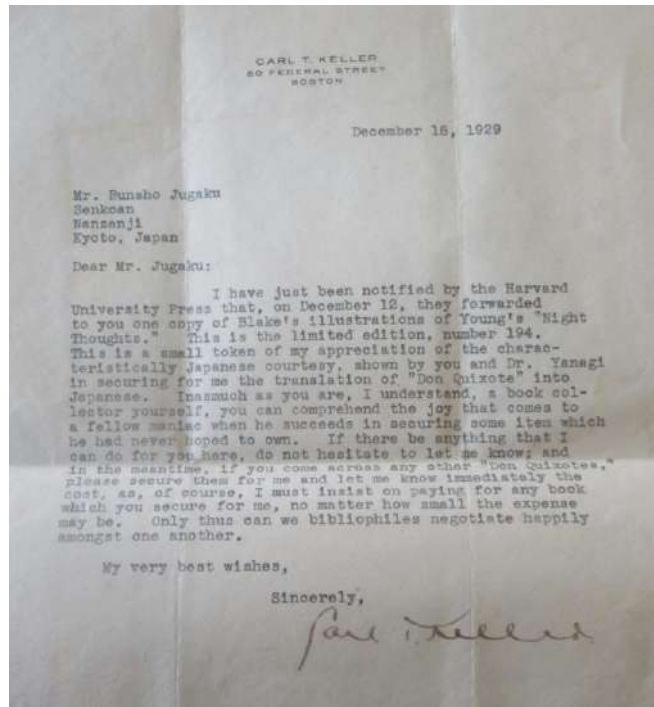
<sup>107</sup> 国内で刊行されたおもな書籍をあげておく。金高謙二『疎開した四〇万冊の図書』（幻戯書房、2013年）、松本剛『略奪した文化 戦争と図書』（岩波書店、2015年[初刊1993年]）、スーザン・オーリアン『炎の中の図書館—110万冊を焼いた大火』羽田詩津子訳（早川書房、2019年）、フェルナンド・バエス『書物の破壊の世界史』八重樫克彦・八重樫由貴子訳（紀伊國屋書店、2019年）、マシュー・バトルズ『図書館の興亡』白須英子訳（草思社文庫、2021年）、和田敦彦『「大東亜」の読書編成—思想戦と日本語書物の流通』（ひつじ書房、2022年）など。

<sup>108</sup> リチャード・オヴェンデン『攻撃される知識の歴史 なぜ図書館とアーカイブは破壊され続けるのか』五十嵐加奈子訳（柏書房、2022年）、エピグラフ。（原書：Richard Ovenden, *Burning the Books A History of Under Attack*, Felicity Bryan Associates, Oxford, 2020.）





「土岐善麿より寿岳文章あて年賀はがき」  
大正 14 年 1 月 26 日消印  
(向日庵資料)



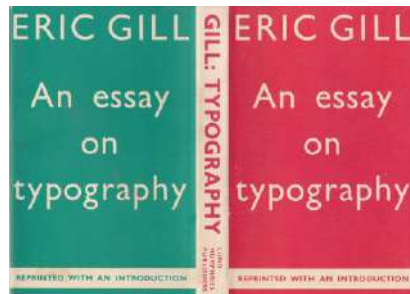
「カール・ケラーより寿岳文章あて書簡」1929 年 12 月 18 日  
(向日庵資料)



寿岳は、書物の科学的研究において「漉き入れ標」がいかに大切であるかを英国書誌学会から学んだ。写真は向日庵私版における漉き入れ標の例。左から『セルの書』(1933 年)、*Exoteric Writings of William Blake* (1933 年)、『テオ・ファン・ホッホの手紙』(1934 年)。  
蔵書提供：千歳則雄



写真は復刻版(出版ニュース社、1973 年)



写真は Lund Humphries, 1988 年版 提供：中島俊郎

寿岳の著書『書物の世界』(朝日新聞社、1949 年)の表紙カバーは Eric Gill, *An Essay on Typography* (Lund Humphries, 1931)の装幀と同じ、表：赤色地に白抜き文字、裏：モスグリーン色地に白抜き文字である。

## 『絵本どんきほうて』の形成—共作者の視座から—

中島 俊郎（甲南大学名誉教授）

### はじめに

神保町の有名な古書店の書棚に向日庵本がかなりそろって並んでいた。美本ばかりなので、「どのような方が所持していたのですか？」と問うてみると、「寿岳さんのファンの方でした。でも以前と比べてずいぶん古書価は下りました」と嘆かれるので、「それは向日庵本の評価が落ちたということでしょうか」と食い下がって訊くと、「そうではないのです、これまで一定数の向日庵本の愛好者が存在していました。ここにあるように、そうした方々が亡くなると受け皿がなくなり、価格が下ってしまうのです」と丁寧に説明してくれた。そして、次世代の愛好者が育つまで、古書価は下り続けます、と補足してくれた。「ただ、次の世代に向日庵本がどのように受容されるか、全くの未知数です」と語り、市場から消えていった限定本、私家版出版社の名前を具体的にあげた。古書がまとう栄枯盛衰に複雑な思いをいだきながら、「なるほど……」とうなずいていたら、「ただし、同じ向日庵本でも『絵本どんきほうて』だけは別格ですよ」と注釈が入ったので、「なぜ？」と問い返すと、「芹沢さんだからですよ。本ではなく美術品だからです」と事なげに応えた。



『工藝』記念号

これまで『絵本どんきほうて』の成立については、多くが語られてきた。寿岳文章自身も『工藝』の『絵本どんきほうて』記念号によせた『『絵本どんきほうて』由来<sup>1)</sup>』(昭和12年)と、『芹沢銈介全集』第一巻「物語絵I」の巻末に掲載された『『絵本どんきほうて』のころ—思い出すままに—<sup>2)</sup>』(昭和55年)という『絵本どんきほうて』の形成には無視できない重要な証言をのこしている。ふたつの証言の異なっている点に注意しなければならない。

前者「由来」は『絵本どんきほうて』特集した『工藝』第76号を送ったところ、自分が制作を依頼した『絵本どんきほうて』がどのように受容され批評されているか知りたいが、日本語が読めないため焦燥感にかられたケラーは、『『工藝』をお送りいただきましたが、これほど好奇心をかき立てるものはございません。誰かに5ドルほどで英訳してもらえないか頼んでくださいませんか。可能ならば仕事を始めて下さいませんか』(1937[昭和

<sup>1)</sup> 『『絵本どんきほうて』由来』『紙障子』(靖文社、昭和17年)、pp. 98-119.

<sup>2)</sup> 『『絵本どんきほうて』のころ—思い出すままに—』『芹沢銈介全集』第一巻「物語絵I」(中央公論社、昭和55年)、pp. 161-73.

12]年7月14日)と寿岳に問いかけてきた<sup>3</sup>。この願いを実現させた英語版「『絵本どんきほうて』由来」(“How Don Quixote à la Japonaise Came into Being”)は友情にあつい寿岳がケラーのために英語に翻訳し自らタイプしたものである(1937年4月執筆)。両者の共通の友である柳宗悦のことに紙幅が大きく割かれているのもそうした事情による。酒好きの住職である父を尊敬できなかつた寿岳はケラーのなかに父親像を認め息子になったような気持ちで接し、ケラーの方もそうした寿岳の立場をよく理解し応じた。ケラーは寿岳にとって、「不在の父」を埋める存在となったのである。『絵本どんきほうて』刊行後も二人の間には日米という敵、味方に対立する不幸な戦争が介在して書簡の交換が一時断たれたが、死が二人をわかつまで信頼あふれる不断なき交流は続いた。二人の友情を記念するため、寿岳は英語版「『絵本どんきほうて』由来」を向日庵本として出そうと計画していた。自らの『絵本どんきほうて』のタイトル頁には、本を読みすぎて冒険談を妄想するドン・キホーテの姿と膨大な書籍に囲まれた自己を重ねたケラーの蔵書票を貼付し顕彰した<sup>4</sup>。だが生涯にわたり二人はついで相見えることはなかつた。

『絵本どんきほうて』の成立を語った後者、「思いで」の一文は33年の歳月をへだてて書かれたものであるが、前者との内容に大きな差異はない。だが前者の「由来」では言及されていなかったひとつの事実が開示されている。『絵本どんきほうて』の作者が最初は芹沢ではなく、中里介山が新聞に掲載していた『大菩薩峠』に挿絵を描いていた彫刻家である石井鶴三をもっともふさわしい候補者と考えていた点である。「当時、毎日新聞の夕刊に中里介山の『大菩薩峠』の連載が新しく始まり、本来は彫刻家の石井鶴三が挿絵をうけもち、好評で、私もそれに深く魅せられていたので、ケラーの希望を石井鶴三によってみたそうか、と考えました」(「思いで」とあるが、寿岳は挿絵のどのようなところに「深く魅せられていた」のであろうか。『大菩薩峠』の挿絵は『絵本どんきほうて』の成立にどれくらい関与があったのであろうか。

『絵本どんきほうて』の成立については、寿岳自身の明快な証言がのこされている。「造本の過程について一言する。私も今までに自分で幾つかの本を造ったが、今度は、始から終まで、殆ど全部芹澤君に任せきりで、その点、たいへんに気が楽であった代りに、芹澤君の労苦は並ならぬものがあつたろうと思う。これは文字通り芹澤君の本であり、演戯者は同君であつて、私はただ演出家の役目を果たしたに過ぎない」(「由来」と寿岳が明記しているように、作者は芹沢銈介であり、寿岳は「演出家」であつたという。作者の芹沢自身も、「この労作(『絵本どんきほうて』)で絵作りやまた本造りに当たつての総合的な協力の真価を十分に経験しました<sup>5</sup>」と回想しているように、「総合的な協力」のもとに成立した作品であつた。では、寿岳のいう「演出家」は作品成立にどのような貢献をなし、作品の構成にどこまでの

<sup>3</sup> 本論で引用されている寿岳宛ケラー書簡は、すべて「向日庵資料」として向日市文化資料館に収蔵されている。なお原文は英語である。

<sup>4</sup> 図録『寿岳文章一人と仕事 展』(向日文化資料館、2021)、p. 25.

<sup>5</sup> 芹沢銈介「私の私家本」『朝日新聞』(1961年6月4日)

影響を及ぼしたのであろうか。だから『大菩薩峠』の挿絵は『絵本どんきほうて』への成立にどの程度まで影響を及ぼしたか、考えなくてはなるまい。

寿岳は「詩にもせよ散文にもせよ、広い意味での文学が、書物の形で公表させる場合、どの程度に版元の意志や趣向が寄与するか。これは洋の東西と時の古今を問わず、きわめて興味の多い問題だが、必ずしも出版史上行きとどいた考証の対象となっているとは言いがたい<sup>6</sup>」と、共作者と実作者の間で生じる問題がきわめて意味ある課題であると提議している。そこで本論では、寿岳が果たした「演出家」という補助線を引き、『絵本どんきほうて』の成立における過程を精査し、改めて『絵本どんきほうて』の真価を問い直してみたい。

## I 『ドン・キホーテ書誌』

柳宗悦から寿岳に宛てた 1929 (昭和 4) 年 9 月 9 日付の手紙は『ドン・キホーテ』の日本語訳文献を求めるケラーの依頼を伝えている。「米国人でケラーと言う人がドン・キホーテに関する本を蒐集しているのです。それで是非日本で出たものが欲しいと言うのです。スペインで出た「書誌」に封入のような二つの日本版が載っているそうです。捜してお求め下さいませんか。代金は兼子の方へ御請求下さる方が便利と思います。又その他、全訳でも抄訳でも (子供に読ませる抄訳が中々あると思います)。又その他諸雑誌に載った研究なり紹介なりがあったら、調べて頂けないでしょうか。別に急ぎませんが、見つかれば次第漸次に小包で小生宛に送って頂けたら幸いです。とんだことをお願いして恐縮です。どなたかお知り合いにも尋ねて見て下さいませんか。日本で出たものの書誌でも作って知らせたら、尚悦ぶと思います。君の仕事を邪魔しない範囲でご尽力願えたら幸甚です」(「由来」)。それからほぼ 5 年後、ケラーから文献収集に加えて、日本版による『ドン・キホーテ』制作の依頼があった。その間の約 5 年間、寿岳はケラーが作成をめざす『ドン・キホーテ書誌』の日本語文献の収集とその解説に貢献した。寿岳の書誌学への探究から和紙研究が生まれ『紙漉村旅日記』が誕生したように、『絵本どんきほうて』は『ドン・キホーテ書誌』の編纂から派生してきた副産物と言ってよい。

何ゆえにケラーはドン・キホーテ文献を蒐集していたのであろうか。そこには戦争を介在させた『ドン・キホーテ書誌』をめぐる物語があった<sup>7</sup>。スペインのフアン・スニエ・ベナジェス、フアン・スニエ・フォンブエナ親子は、すでに 1605 年から 1917 年まで印刷された『ドン・キホーテ』文献の批評的書誌を共同で編纂・解説していた。1917 年以降は父親だけの手に委ねられ 1937 年まで書誌制作は続いた。ところがスペイン市民戦争 (1936 年 7 月 17 日-1939 年 4 月 1 日) が勃発しバルセロナは混乱をきわめたため、フアン・スニエ・ベナジェスは経済的破綻に陥り、書誌作成の続行が不可能になった。こうした窮状を耳にしたマサチューセッツ州ボストンのカール・ティルデン・ケラーは黙っていることができな

<sup>6</sup> 寿岳文章「共作者としての版元」『壽岳文章書物論集成』(沖積舎、1989)、p. 542.

<sup>7</sup> J. D. M. Ford and C. T. Keller eds., *A Critical Bibliography of Editions of the Don Quixote Printed between 1605 and 1917* (Harvard University Press, 1939), pp. v-viii.



った。何よりもケラーはセルバンテスを愛し、『ドン・キホーテ』文献の熱烈な収集家であった。ケラーは、スニェが逝去する直前、書誌の補遺ために用意されていた原稿を譲り受けた。戦火のためスペインでは出版できないので、ハーヴァード大学出版局から発行する約束を取りつけたのである。さらにケラーは叔父の最期をやさしく看取った献身的な姪に葬儀の金銭的な援助を申し出て、威厳にみちた別れを演出したのであった。

フアン・スニェ・ベナジェスはセルバンテス関係の書誌作成を主眼にしていた。古典ゆえ世界中に国の数だけその版が存在した。だから当該の外国語を理解するだけでも骨が折れる仕事であった。未知の言語や理解しがたい言葉で書かれた関連文献を入手したとき、まず当該の言語と関連のある領事館、大使館まで訪ねていった。また町で出会う外国人に質問したりして、不明の言語を話す国籍の人々を求めて港へ労をいとわず出かけて行ったという。書誌学者としてスニェは並外れた記憶力の主で、それゆえ必要なテキストの引用、一節を瞬時に見つけることができた。いずれの『ドン・キホーテ』の版についても出版情報、表紙・背表紙、版型、頁数など熟知しており、研究者、教授、権威者、文学者などと情報交換をするため書簡をかわし、さらに興味深い未発表の作品、断片を何篇も所持していた。



### 『ドン・キホーテ書誌』

序文によれば、「親愛なる息子フアン・スニェ・フォンブエナと共編著で、1605年から1917年までに印刷された『ドン・キホーテ』諸版の批評書誌」を上梓してから、19年以上が経過した。現在までに印刷された『ドン・キホーテ』の原語版と他言語版を知りたい願う者は本書を参照すればよい。補遺を充実するために三人の書誌学者が協力してくれたが、ボストンのカール・ケラーの寄与もその一人である<sup>8</sup>。本書は1605年にフアン・デ・ラ・クエスタが印刷した初版以来、出版されたすべての版のタイトルページ、巻数、サイズ、頁数、テキストのモデル、多くの版に含まれる顕著な変種、図版、翻訳の文学的価値、いくつかの版の活版価値、希少性と価格、解説者、編集者、翻訳者および印刷者の名前を知ることができる。批評的書誌である本書は、「人類がセルバンテスの崇高な小説を数多く複製して建てた壮大な記念碑のもっとも貴重な花の一つ」である。「『ドン・キホーテ』の49言語で書かれた1369諸版が本書では紹介されている」と書かれている。最終的にJ. D. M. フォード、カール・ケラー共編著の『書誌』にはフランス語285点、英語241点、ドイツ語、117点、イタリア語66点、オランダ語30点そして日本語20点などを含めて全世界で1371点を数えた。なお、書誌情報が記載された本文はすべてスペイン語で記入されている。J. D. M. フォード(1873-1958)はハーヴァード大学名誉教授で、フランス・スペイン文学が専攻であり、主著には『スペイン文学の主潮』(1919)、『キューバ文学書誌』(1933)などがある。

<sup>8</sup> *Ibid.*, p. xii.

ケラーは送ってくれた書籍の礼状を寿岳へ出した。「『ドン・キホーテ』の関係書4冊を拝受していたのに確認するのが遅くなり申し訳ございませんでした。嬉しさとともに深く感謝しております。また各書籍の書誌情報を丁寧に書き出してくださったのは、うれしいお心遣いです。先に返事をしなかったのは、費用をご教示下さるお手紙をお待ちしていたからです。このままではあなたへの恩義が大きすぎます。また金銭的な負担をこれ以上かけるわけには参りません。できるだけ早くお知らせください」(1930 [昭和5]年4月3日) とあるように、寿岳は翻訳書とその書誌情報をケラーに伝えていた。

書誌提供の一例を示しておきたい。柳から依頼された寿岳は津田梅子が編集した『ドン・キホーテ物語』をケラーに送り、このような解説をつけた。「親愛なる父なる友よ 今日、『ドン・キホーテ物語』の日本語版を送ります。この本は、ウィルソンによって再話された物語を要約し、脚色したもので、日本語訳はなく、英文のみです。しかし、この本の面白さは、1902年という早い時期に出版されたこと、編集者が津田梅子という明治の初期にアメリカに渡り、アメリカ文明をこの国に紹介した勇敢な女性の一人であること、序文が畔柳都太郎という、わが国民に西欧文化を紹介するのに大いに貢献した人の筆によるところにあります。この本は非常に珍しいもので、私は偶然にもこの本を入手できました。あなたのコレクションを充実させることができたら、とてもうれしいです。・・・前回の手紙でお知らせしたブレイクの向日庵本『無染の歌』は数日中にお送りします。親愛をこめて 寿岳文章」(1933 [昭和8]年2月10日)。『ドン・キホーテ書誌』には寿岳の報告が文字通りに記述されている。

1323. 『ドン・キホーテの物語』。カルヴァン・ディル・ウィルソンによる再話。畔柳都太郎の序文を付して、『英学新報』(*The English Student*, 津田梅子編集)が日本の学生向けに編集したもの。東京：英学新報社、1902(明治35)年。ボストンのカール・T・ケラー氏の豊富なセルバンティス・コレクションの中にこの日本版は含まれている<sup>9</sup>。



本文 80 ページの小冊子であるが、東京大学の井手三郎文庫に本書の重版(1911年に出版された第7版)が収蔵されている。原本は『子供のためのドン・キホーテ』(*The Child's Don Quixote: Being the Adventures of Don Quixote retold for Young People*, 1901)であり、アメリカで出版され多くの読者を得た。(左の図版を参照)

『書誌』には日本で初めて完訳された島村抱月・片山伸訳『ドン・キホーテ』が記載されている。書誌番号1324がそれである。『絵本どんきほうて』の底本という重要性があるため、書誌情報を転記しておきたい。

<sup>9</sup> Ibid., p. 61.

1324. 島村抱月・片山伸訳『ドン・キホーテ』（東京：植竹書院刊, 1915）. 全2巻、フォート版。

第1巻: 1605年にマドリッドで印刷された初版のタイトルページの複製（フロンティスピース）。ドン・キホーテとサンチョがモンティエル草原を馬で駆け抜けていく様子を描いた色彩図版。次に訳者の言葉が書かれた「序」、13ページからなるセルバンテスの生涯と肖像が掲載された「小伝」、さらに第1部の「目次」、「序」が含まれる。これら前段階に続いて、第1部の52章の本文が933ページ、奥付として頁数のないページがさらについている。第2巻: 初版タイトルページを同じく複製したフロンティスピース、日本語の活字で印刷されたタイトルページ、色彩図版。その後に、セルバンテスの序文を含むローマ数字で番号付けされた11ページ、第2部のタイトルページが続き、1ページから始まり1029ページの74章まで、奥付として数字記入のない頁がさらに1ページ続く。

『ドン・キホーテ』の日本語による全訳で、日本国で使用されている活字でもって日本語で印刷され、ギュスターヴ・ドレの版とトニー・ヨハノの版から引用した多くの図版が挿入されている。本書は1915年11月10日に出版された、二人の翻訳者による初版である<sup>10</sup>。

島村抱月・片山伸訳『ドン・キホーテ』には多くの挿絵がつけられていた。とくにフランス人の挿絵画家、ギュスターヴ・ドレの挿絵はもっとも多く採用されている。劇的な効果が著しいからである。挿絵画家としてドレは国際的な名声を保持していた。クリミア戦争（1854-5年）の間、ドレは戦場の絵を描き、パリとロンドンで同時に発行された月刊誌に掲載した。戦争画家は戦場に赴き、戦況を直接記録していたが、ドレは自宅でスケッチ、写真などの通信手段を使って制作した。だが戦闘を見たことがないドレの描く兵士に大衆は満足し、ドレの名声はイギリスにも定着した。写実よりも誇張するロマン派的なドレの技法に人々は魅せられたのである。1866年、彼はフランス、ドイツ、ベルギー、イギリスで『聖書』を発表したが、新しい写真製法で複製され、同時に出版するために各国で版が準備された。ドレ聖書は豪華な装飾と印刷、2巻本で228点の挿絵が挿入され、高価であった。ドレ聖書は大成功を収め、すぐにヨーロッパの半数の言語で翻訳された。イギリスの出版社でドレ聖書を出版したのはカッ

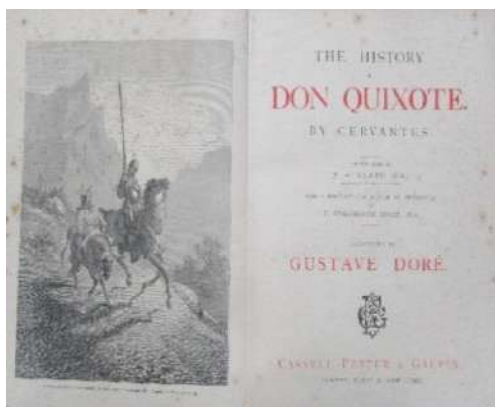


<sup>10</sup> Ibid.

セル社であった。だから英訳版『ドン・キホーテ』も同社から出された。1860年代半ばには、ドレはサンクトペテルブルクからニューヨークまで、文明国で有名人になっていた。ドレは挿絵画家の第一人者であったのである。

述べたように島村抱月・片山伸訳『ドン・キホーテ』にはこのギュスターヴ・ドレの挿絵が横溢しており顕著であった。ドレは『聖書』をはじめ、ミルトン『失樂園』、ダンテ『神曲』、ベロー『お伽話』など世界の名作に挿画をつけ、とくにヴィクトリア朝英国にはフランス人画家でありながら大喝采を浴びて受け容れられた。モクソン版『テニソン「国王牧歌」』、コールリッジ『老水夫の唄』などに挿絵を提供し、荘厳さを喜ぶイギリス人の国民性と合致して人気を博し、ロンドンの中心街であるボンド・ストリートには「ドレ・ギャラリー」が常設され、代表作品を網羅した『ドレ・ギャラリー』も出版されて、英国での名声は頂点に達した。今日でもドレの最高の傑作とうたわれる『ロンドン巡礼』は都市ロンドンの悲惨と栄光を投影した写実の極みを見せつけ、画家ヴァン・ゴッホは本書の「ニューゲイト監獄」における幽閉された囚人の姿に感動した。1863年、『ドン・キホーテ』の挿絵が現れ、明暗の対照法を特徴とする技法がみごとに結実させた。そもそもドン・キホーテはヨーロッパを横断したロマン派の文学運動の中心的な始祖としてみなされていたが、ドレの挿絵はまさに核心をとらえたものであった。日本初の完訳版はドレの挿画に引きずられた訳文も散見できるように、ドレの色調に支配されていた。それはスペイン語ではなく英訳版に大幅に依拠して翻訳されたものであったからである。

たしかにドレの『ドン・キホーテ』挿絵は時代を画し、ウィリアム・ホガース以来の伝統につらなる名作であるかもしれないが、あくまでも西欧の伝統絵画に組されるものであった。それをそのまま転写しただけの日本語版に、失意のケラーの表情は曇った。日本語の翻訳と並行する挿絵なのかと訝ったはずである。当然、寿岳からケラーに送られた日本初の完訳本は、新たな問題を誘起してきた。「日本訳ドン・キホーテのわるい唯一の点は、日本の書家が、日本の手法を用いて挿絵すべきなのにそれを一向やっていないことである。それがあるかと私はまづ第一に眼を光らせたのだが・・・」（「由来」）とケラーが問題視したのは無理がなかった。反動として寿岳に対して、日本独自の挿絵を見たいと願っても不思議ではない。「セル



ドレ挿絵『ドン・キホーテ』

バンテスの心持を、日本人こそ真に同情して、興味深く新鮮に解釈するだろうと思ったからだ。思うに、あらゆるアジア民族中、日本人こそその立派な伝統により、かの哀れな老「ドン」の心を動かした騎士道の世界—それは屢、誇張されているが—を了解し感得する最善の国民であろう」（「由来」）と、ケラーはドレとヨハノを複写するだけの日本語版に否をつきつけ、新しいドン・キホーテ像の誕生を願ったのである。

寿岳は島村抱月・片山伸訳『ドン・キホーテ』



について、「あの大部の『ドン・キホーテ』を読むことからして芹沢君には負担である。生れてからまだあんなに長い物語を続けて読んだためしはなく、少し読むと前の箇所を忘れてしまうので、これには何より閉口した、と芹沢君は後で私に述懐した」（「由来」と、生硬な訳文をかみくだいて読んでいくしかない苦行を伝えている。たしかに理解しやすい翻訳ではなかった。でも、島村抱月・片山伸訳『ドン・キホーテ』には各章の内容、概略を理解させる要約が「目次」のなかで明示されていた。たとえば、「第一章には名高い紳士ラ・マンチャのドン・キホーテの人となりと平生とを述べる」とあり、また、「第八章 恐ろしい夢想せられたこともない風車の冒険に際して、勇敢なるドン・キホーテの得たる吉き幸運のこと、附けたり、当に記録するに足るその他の出来事ども」とか、「第十七章の中には剛勇なるドン・キホーテと順良なる家来サンチョーとが宿屋で様々な難儀に会うことが収めてある。その宿屋をドン・キホーテは気の毒にもお城と思い込んでいたのである」とあり、「第二十章



豪勇なるラ・マンチャのドン・キホーテが世界の如何なる高名の騎士に依って遂げられたる如何なる冒険よりも危険を冒して成し遂げたる前例なき前代未聞の冒険のこと」などときわめて暗示にとんだ解題のような表示がなされている。芹沢の「絵本どんきほうて次第」という目次と比較対照してみれば、この訳本から得たものはけっして少なくない<sup>11</sup>。試みに「次第」を列挙してみよう。(1) 西国らまんちゃの里のどんきほうて、(2) 作男さんちよ従へ廻国の門出、(3) 世に名も高き初の手合わせ、(4) 拐し者推参と籠脇へ斬付ける、(5) 馬の悪戯で一期の不覚・・・(31) 功名手柄の夢さめて静かに眠るどんきほうて、と続く「次第」と島村抱月・片山伸訳『ドン・キホーテ』

共訳『ドン・キホーテ』扉頁の「目次」を並置してすれば、一目瞭然であろう。

ドン・キホーテが体現したのは、喜劇の本質である「アンバランス」であった。『ドン・キホーテ』の文学世界は不釣り合いという不一致の上に構築されている。まず挙げなくてはならないのは、ドン・キホーテの願望や幻想と、彼の周囲の現実との間の不調和である。英雄的な馬に乗った騎士のイメージと、キホーテとロシナンテの長身で骨ばった老いた姿の落差、そして小柄な姿と、宿屋や羊の群や風車の中で土臭くて肥満漢サンチョの短い身体との間にただよう不調和がある。島村抱月・片山伸訳『ドン・キホーテ』は悪訳であったかもしれないが、物語の基本構造は確実に捉えていた。

## II 石井鶴三の挿絵

芹沢は『絵本どんきほうて』は「わそめゑかたり」と同[昭和11]年の刊行になっていますが、実はそのずっと前から苦吟を続けていたもので、これは寿岳文章さんが米国ボス

<sup>11</sup> 島村抱月・片山伸訳『ドン・キホーテ』上巻（植竹書院、大正4年）、pp. I-VIII.

トンのケラーというドン・キホーテに関する本の収集家から、日本のものを、とたのまれて、ついに私におはちが回ってきたのですが、かつて拙作『伊曾保物語絵巻』や『古事記屏風』などの染絵を見られたことがあったにしても、寿岳さんの厚意のこもったこの『勇断』には身にしみるものがあります」（「私の私家本」）と誕生までを回想している。たしかに寿岳の「勇断」であったが、すでに言及したように、その前段階に『大菩薩峠』の挿絵が検討されていたことを忘れてはなるまい。『絵本どんきほうて』の成立に『大菩薩峠』の挿絵が果たした関与はどのようなものであったのだろうか。この件について、「当時、毎日新聞の夕刊に中里介山の『大菩薩峠』の連載が新しく始まり、本来は彫刻家の石井鶴三が挿絵をうけもち、好評で、私もそれに深く魅せられていたので、ケラーの希望を石井鶴三によってみたそうか、と考えました」（「思いで」下線部は筆者）という、寿岳の重要な証言がある。

確認すれば、ケラーの希望をかなえるため、寿岳はまず石井鶴三の挿絵を候補に考えていた。それは中里介山の『大菩薩峠』に付けられた挿絵であった。まず寿岳のなかでは、小説『大菩薩峠』が念頭にあったと推察される。騎士が主人公である『ドン・キホーテ』と、侍が主人公である『大菩薩峠』が並行化され、騎士を侍におく翻案（侍ドン・キホーテ）が出来上がっていたはずである。『大菩薩峠』と『ドン・キホーテ』はともに長編の小説であった。『ドン・キホーテ』は中世騎士の武者修行談と考えられており、『大菩薩峠』と一脈通じるところがある。



『大菩薩峠』挿絵

石井鶴三が中里介山の長篇「大菩薩峠」の挿絵を担当したのは、『大阪毎日新聞』紙上においてであり、期間は大正14年1月から昭和3年8月までのほぼ3年8ヶ月間であった。寿岳が京都大学時代に毎日新聞に連載されていた『大菩薩峠』を読んでいたかは推測の域を出ないが、少なくとも題名は知っていたと思われる。著名な作家たちが『大菩薩峠』を称揚していたからである。谷崎潤一郎は芥川龍之介との文学論争で有名になった評論のなかで中山介山氏の「大菩薩峠」を激賞した。「介山氏の「大菩薩峠」一と度び出づるや、此れを真似した澤正式剣戟趣味の作品が続々現れ、此の頃はまた大衆文芸と云うような物が流行り出したが、此れだけの気品のある文章はその後一つとして見当たらない。思うに「大菩薩峠」がただの通俗小説ではない所以は、実に此の気品にあるのである<sup>12)</sup>とまず文体の気韻に注目し、次ぎに主人公の特質として、「底を流れているものは机龍之助を中心とする氷のような冷やかさ、骨に沁むような寒さである<sup>13)</sup>」をあげている。そして、「龍之助が独り山道を歩きながら、路

<sup>12)</sup> 谷崎潤一郎「饒舌録」『谷崎潤一郎全集』第20巻（中央公論社、昭和43年）、p. 74.

<sup>13)</sup> Ibid., p. 74.

端に湧き出る清水で眼を拭う一節、あすこは圧巻であると思った。私も読んでいて眼に清水の沁むのを覚えた<sup>14</sup>と清新な読後感をつづった。

仏教徒の寿岳は『大菩薩峠』のなかになじみでている仏教的な雰囲気を一早く察知したはずである。介山は「大菩薩峠」を大衆小説とみなされるのを嫌い、「大乘小説」と称した。つまり作者の真意は人間世界の宿業を曼荼羅絵図に描きあげるところにあった。こうした仏教的な要素は寿岳をひきつけるのに充分であった。早くはブレイク詩の大乗性に注目し、ダンテ『神曲』の翻訳をしているときもたえず脳裏にあったのは曼荼羅であったからである<sup>15</sup>。

ただ、寿岳の先述した証言は矛盾に満ちている。まず、「当時、毎日新聞の夕刊に中里介山の『大菩薩峠』の連載が新しく始まり」とあるが、この「当時」を新しい日本語版を構想し始めた時期と考えるならば、『大菩薩峠』の連載が新しく始まったのは、毎日新聞ではなく読売新聞である。読売新聞に掲載されたのは「昭和9年から10年」であった。この一文が書かれたのは寿岳が80歳のときであったことを考えれば記憶ちがいで済まされよう。だが私は寿岳の記憶ちがいは考えられない他の要素を指摘しておきたい。日本語版を構想



『石井鶴三挿絵集』

していた、まさにこの時期に10年前に毎日新聞夕刊に連載されていた『大菩薩峠』の挿絵を集成した『石井鶴三挿絵集』が刊行されていたのである。連載から10年近い歳月を経た刊行は複雑な事情がからんでいたのである。作者である介山は、つねに挿絵は小説本文に従属するものであると考えていた。昭和9年11月に光大社から『石井鶴三挿絵集（『大菩薩峠』挿絵集）』が刊行されて、挿絵問題をめぐって紛争が表面化し裁判で争われるまでになった。この挿絵

集には毎日新聞紙上に掲載された442図の挿絵がすべて収録されていた。石井鶴三は挿絵について「紙面の美的効果をたすけ、進んでは画によって本文の及ばざるところを補い、以

---

<sup>14</sup> Ibid., p. 79. また主人公について、「机龍之助と言うような性格の創造、これは単なる思いつきや根のない空想では作れない。あの残酷で陰鬱な人柄に妙に実感がにじみ出ているのは、何かあれば、作者その人の性格と一脈通ずるところがあるからではないか。介山氏に人を殺したり盲目になったりした経験はないであろうが、恐らく作者は空想の中で幾度か龍之助の如き境地を夢み、あのような生涯を生きたのであろう。そうしてああ云う人物を作り出したのは、そうしなければならぬ必至なものが作者を導いたのであろう」（谷崎潤一郎「直木君の歴史小説について」Ibid., p. 502.）と作者の人間性との類縁を説いている。

<sup>15</sup> 「キリスト教文学史上、最も美しい終末観が展開される天国篇至高天薔薇の座のくだりを訳するとき、私の脳裡には、密教で秘奥とされる曼荼羅のイメージがつねにあった。私の訳した神曲の日本語に、今までのとはどこか違うかおりがたきこめられているとすれば、その秘密の一つは、こうした点に求められるかもしれない」寿岳文章「神曲を訳し終わって」『わが日わが歩み—文学を中軸として』（荒竹出版、1977年）、p. 52.

て本文の引き立て役となることであり、本文の読者をしては一層の興趣あらしめること」だとしていた。こうした挿絵に対する考え方は寿岳の構想している挿絵と一致するものであった。石井は新聞小説の挿絵に関しては「毎日の紙上を舞台として文と画と両者の協力によって一つの作物をなして行くところに其の特色がある」とも指摘している。挿絵はテキスト（本文）があってはじめて成り立つが、同時にそれを具象化して明示する役割を果たすものであり、両者は協力関係にある。よって挿絵の独立性を尊び、挿絵は本文に従属するものではなく、あくまでも画家に帰属するという考えであった。ただ小杉放庵の指摘によれば、挿絵は本文に隷属するどころか、創作をうながす要因ともなりえたのである——「絵かきは画中の人物の顔を、頭の中でかいて見られる。読者はおぼろげに其風采を想像するだろうが、もちろんはっきりと目に見ゆる如くには行かん。そこへ絵かきが絵にして見せる。ひいきの人物、憎らしい人物、あわれな女性。すっかり形体を具足して現れる。音なしに構えた竜之介、まりの如くにはずむ米友、青年武蔵、前髪立ちの岸柳、悲恋のお通、実在の形をとって、石井さんの筆の下に誕生したわけだ。新聞の日日のよみ物の場合には、恐らくは作者もこの与えられた形態によって、作中の人物の活動進展に調子づけられる点があるだろう<sup>16</sup>」、と。

石井鶴三はじっさいに小説舞台を訪れ、小説の想像世界と結びつけようとした。「山の頂に着いて、忽然として限界が開けるその快さは何ともいえぬ。白峰赤石の連嶺の一眸の中に入り来る。いずれも雪を戴いて遥かに高く雲の上に浮べる姿は実に壯観である。峠の西側はひろびろとした笹原で、その間に縦の木がぼつりぼつりよい形に立っている。まことに優美にして而も壮大な景色である<sup>17</sup>」と実体験を記録している。でも、その挿絵は写実に妙があったのではない。『大菩薩峠』の挿絵は、彫刻家である石井鶴三が新機軸を打ち出した分野であった。寿岳は「本来は彫刻家の石井鶴三が挿絵をうけもち、好評で、私もそれに深く魅せられていた」と証言しているが、彫刻家、石井のもつ造形性を高く評価していたのである。日本語版ドン・キホーテに石井の起用を考えていた一因である。

石井鶴三には彫刻家ならではの発想があった。精神の「立体性」という見解をいいていた。「科学は日進月歩の勢いにて、吾人の日常生活を立体に立体にと導かんとする傾きあるかに見えます。例えば、高層建築の出現の如き、或は航空機の発達の如き、かくの如く物質文化は次第に立体的に進まんとするに反し、思想芸術といった方面の精神文化は、著しくこれに伴わぬきらいありと思えます。近来、世相漸く陰悪となり、何となく行き詰まりの感ある、その原因多々あるべしと雖も、その一として、この機械文化の立体的発展に対し、精神

---

<sup>16</sup> 小杉放庵「石井さんの挿絵」『石井鶴三全集』第5巻(形象社、昭和62年)、p. 245.

<sup>17</sup> (『大菩薩峠行』『石井鶴三全集』第5巻(形象社、昭和62年)、p. 109. その追想記によれば、石井鶴三は「時代物挿絵」を描いたことがなく、大菩薩峠挿絵が最初の作品であったという。「新しい勉強をするつもりで…幕末時代に就いて全く泥縄的の勉強で毎日挿絵を描いて行」き、素描も洋画風をさけて和紙に毛筆で描いていった」と初心を述べている。(『大菩薩峠』挿絵を描いた頃)、『文藝』増刊号「美術読本」[河出書房、昭和30年11月5日号]『石井鶴三全集』第10巻(形象社、昭和62年)、p. 451.

生活のこれに遅れたるを挙げるも、差支あるまいかと考えてます<sup>18</sup>」と物質的発達と精神が少なくとも雁行していかなくてはならないと石井は考えていたのであった。そして彫塑が立体感覚に作動する過程を、「彫塑は自然描写を伴う造形美術として、絵画とは姉妹関係にあります。絵画が色彩感覚に生きるに対して彫塑は立体感覚に生きます。色彩感覚は視覚に頼り、立体感覚は視覚と触覚に頼ります<sup>19</sup>」と説くのである。

さらに『石井鶴三挿絵集』に寄せた自序は寿岳の耳目を惹くのに十分な意味があふれていた。「新聞の挿絵は一種の版画であると小生は心得ております。複製的の版式ながら、その製版印刷の過程を経て、紙上に現れるところの版画効果を、考慮して筆を執っております。故に、小生の挿絵を肉筆画の複製とのみ見ることは正しくありません<sup>20</sup>」と独立した作品であることを強調している。そして挿絵の「使命」について、「文中にこれあるによって先ず紙面の美的効果を助け、進んでは画によって本文の及ばざるところを補い、以て本文の引き立て役となることであり、本分の読者をしては一層の興趣あらしめること」を目的とし、「本分の読者をしては一層の興趣あらしめる」結果を生じるとした。そして、「よき画が必ずしもよき挿絵とならざる場合あれど、よき挿絵は、必ずよき画出なければなりません。故に、挿絵として作れるものも、本文よりひき離して、単独に画としてこれを見ることが出来るのであります。もし小生の画が、挿絵として見るに足るものであるならば、またこれを単独に画として見る価値があるというわけで<sup>21</sup>」あるとした。

もう一人の作家が石井鶴三の挿絵を批評した見解をここにおけば、寿岳が高く評価した理由が明らかになってくる。自らの小説『宮本武蔵』（昭和13-14年）に挿絵をつけてもらった作家、吉川英治（1892-1962）は鶴三の挿絵について、「個々觀賞にのぼせても立派に独立しての画格と創意とをそなえてい」て、「小説からきりはなしても、画の生命を見失うような怖れはない」と賞讃し、挿絵以上に独立した画境を描いた画家に関して、「骨胎はもとより原作者の与えたものに違いないが、鶴三氏は、それを更にもういちど自分のものとして理想化することを忘れない」として、作品と挿絵の関係を母と子供のそれにみたてて、「鶴三氏の挿絵には母心がある。哺育の愛がある。作品から受胎して彼は生み、乳をあたえ、脈々と自己の血をそれに搏たうとするのである<sup>22</sup>」と巧みな比喩で表現した。

寿岳の証言をもう一度確認しておこう。「当時、毎日新聞の夕刊に中里介石の『大菩薩峠』の連載が新しく始まり、本来は彫刻家の石井鶴三が挿絵をうけもち、好評で、私もそれに深く魅せられていたので、ケラーの希望を石井鶴三によってみたそうか、と考えもした」とあったが、なぜか石井の起用は見送られた。「しかし速断は禁物である。三人寄れば文殊の智慧、とも言う。私は、そもそもケラーを私に結びつけた柳宗悦、同じ京都に住んで事あるご

---

<sup>18</sup> 「立体に生きる」『石井鶴三全集』第5巻(形象社、昭和62年)、p. 46.

<sup>19</sup> 「塑像に就いて」『石井鶴三全集』第5巻(形象社、昭和62年)、p. 327.

<sup>20</sup> 「自序」『石井鶴三挿絵集』（光大社、昭和9年）、p. 22.

<sup>21</sup> Ibid., pp. 24-25.

<sup>22</sup> 吉川英治「鶴三氏の挿絵」『宮本武蔵挿絵集』（朝日新聞社、昭和18年）、pp. 1-2.



とに相談しやすい河井寛次郎とトリオを組み、何回か討議の末、その独特な表現力に三人とも深く信頼している芹沢銈介君に白羽の矢を立てた。合羽版という、西洋ではあまり発達を見なかった技術の、高度の駆使が芹沢には可能であり、これは西洋文化への日本文化の大きな寄与でもあろう、というのが、芹沢起用の大きなポイントとなった(「思いで」と今日、私たちが共通に理解しているような流れとなった。身内だけの親しさから芹沢の起用となったわけではない。別の証言をも考慮しておこう。「そこで私[寿岳]は、幾度か河井さんを訪ね、画家に絵をかかせて送るよりは、いっそ丹緑本風の絵本を作った方がよくはないか、それならば小部数に限られるとしても、書物としての客観性も持ち得るし、セルバンテスの作品を媒介として美の一つの姿が出現することにもなるし、と相談したところ、河井さんもそれに大賛成で、丹緑本によい理解があり、遠慮なくものの言える間柄の芹沢君にたのむのが結局一番よかろうと言うことに話が落ちついた」(「由来」)とより絵本に近いかたちへと傾斜していった。当然、絵画としての可否が問われたわけであるが、議論のここにいるまでの『大菩薩峠』挿絵の存在意義を忘れてはならない。それは、「作るとすれば、あくまでも古典『ドン・キホーテ』の挿絵としての意味を失わず、絵本性を主とするなら、短い説明文をそえた『ドン・キホーテ行状記』とすべきであろう。私のこの信念は動揺しなかった」(「思いで」下線部は筆者)という寿岳の信念を生み出した契機となったのはまぎれもない『大菩薩峠』挿絵に萌芽があったわけであるのだから。「絵本性を主と」した『絵本どんきほうて』が選択されたことにより、『大菩薩峠』挿絵を描いた石井鶴三の起用は見送られた。だが、以上のように、『大菩薩峠』の挿絵は『絵本どんきほうて』の原型を構築し、構成を示唆するのに多大な作用を果たしたといえよう。

### III 『絵本どんきほうて』

テキストに対する挿絵の意味について、寿岳は早くから考察をめぐらしてきた。と言うのも、研究対象である詩人であり、画家であるウィリアム・ブレイクの作品はブレイク自身が彩色した図版をともなっていたゆえ、詩画が響鳴して意味を生み出していくテキストを研究しなければならなかったからである。二年間にわたり月刊で発行された研究誌『ブレイクとホキットマン』(1931-32)には毎号のように、「挿絵小解」が連載され、ブレイクの肖像画、スケッチ、挿絵などが解説されている。ブレイクが彫版した「アルビヤンの巖間に佇むアリマタヤのヨセフ」について、寿岳は

『ブレイク初期の散文』脚注で述べた通り 1773 年 16 歳の作。大きいブレイク『ヨセフ』 縦 23 センチ、横 12 センチ。彼の粉本となった『伊太利古書』と言うは、Vatican にある聖ペテロの磔刑を示した壁画の右端のミケランジェロ筆一人物を写した複製であろうと想像されている」と、まずブレイクが典拠とした原画の説明をした上で、「しかしブレイクはその人物に配するに巖と海と太陽とを以ってし、既に凡庸ならざる雄大な構図を作った。かかる構図は後年ダンテ神曲煉獄篇挿絵に於いても用いた。首なきが如



くに見ゆる程遅しい肩、拱ねられた太き腕、巖を踏む強き足は、その彫法に幾分軟弱な師伝の跡があるとは言え、もはやまぎれもなくブレイク自身のものである<sup>23</sup>」とミケランジェロの模倣から超越した身体を描いたブレイクの独自性を寿岳は指摘している。

1935(昭和10)年の春から夏にかけて、ケラーから制作依頼があった旨を寿岳は証言しているが、ケラーからの来信を検討すればより厳密にその内実を確定できよう。「親愛なる進取の気性にとむ若き友人よ」と書きはじめられた1935(昭和10)年10月22日付の寿岳宛ケラー書簡は、制作の着手を告げている。「ささやかな暗示の小石を思索の湖に投げ入れたとき、行動の波紋がこれほど早く達成の岸辺に押し寄せるとは夢思いませんでした」と述べられているが、「ささやかな暗示の小石」とは「ドン・キホーテの日本版」計画のことで、また「思索の湖」とは寿岳が中心となって討議を重ねたことを意味し、待ちに待った制作が完成に向けてついに始まったと喜びをつつみかくさずにもらしている。「言うまでもなく、私はこの提案を喜んでおり」、まず300ドルを送金する用意があると具体的な案を提示している。

そしてケラー書簡は寿岳・ケラーのあいだで計画がかなり進んでいることを示唆する。寿岳夫妻、柳宗悦、河井寛次郎の指導のもと、必ずや私の友人たちが羨望の念をもらすような作品の完成を信じていると述べ、「原画をもてるのはうれしいが、それ以上に共感してくれた熟練の画家たちが、『ドン』の素晴らしいエピソードを自分なりの表現で描いてくれるのは喜び以外の何ものでもない」と語っているのだが、『『ドン』の素晴らしいエピソード』という言葉にみられるように、早くも物語の展開を示す場面ごとに挿画を描く計画が示されている。「スペインで使われていた風車が、日本で使われているとは思えない」ので再現は難しいと想像するが、「自分なりの表現で描いてくれ」れば、何ら異存はない、とケラーは具体的な内容に踏み込んでいる。

またこの同じ文面で、西欧の動乱に危惧を覚えると訴えている。「ヨーロッパの現況を、限りない驚きと不信でもってみている」として、打開策として、「私は世界再生のためにまず必要なことのひとつは、道徳的あるいは精神的な価値観の回復であると確信している」と提言する。ケラーにとって、芸術は平和にあった初めて存在するものであった。こうした平和への希求がなければ、「ドン・キホーテの日本版」計画は途中で頓挫していたであろう。「モラルが崩壊していく今、世界がもっとも必要とするのは、真理を人々に伝え、それに従うよう説得できる指揮官的な人物である」というケラーの言葉には寿岳はおそらく全面的に賛同しないものの、「ムッソリーニとヒトラーは、古い言葉で言えば、正真正銘の反キリスト」教徒であり、他方、「アメリカの指導者である大統領ルーズベルトは愚か者でしか

---

<sup>23</sup> ブレイク彫版「アルピヤンの巖間に佇むアリマタヤのヨセフ」柳宗悦・寿岳文章共編『ブレイクとホキットマン』第1巻第8号、(昭和6年8月)、p. 357. Robert N. Essick, *The Separate Plates of William Blake* (Princeton University Press, 1983), pp. 3-9, pp. 44-46.

い<sup>24</sup>」という言葉に、戦争は絶対に回避すべきであるとする寿岳は意を強くしたはずである。両者が戦争を嫌悪し、どこまでも忌避すべきであるとする共通の理念を抱いたことは明記しておいてよいことである。ケラーが文明のため戦争はやむなしと考えるような人物であるならば即座に『絵本どんきほうて』の計画は頓挫していたであろう。寿岳は民芸運動を論じた一文のなかで、民芸の美を理解できずとも戦争を忌避する人の方を尊重するとして、美の美を第一義にする人をしりぞけている<sup>25</sup>。

またケラーは西欧文明を権威視するような帝国主義的な考えは一切なく、東洋文明に対しても深い理解を示し、東洋美術に対しても一家言があった。探検家スタインの中央アジア探検に対する多大なる援助をみても、文明という大局に立ち判断をくだせる人間であった。最近、「近代の最初の小説」(『ドン・キホーテ』)を「もっとも古い言語」(サンスクリット語)で翻訳を企てたケラーの記事がイギリスの新聞『ガーディアン』紙(2022年7月6日)に掲載された<sup>26</sup>。

記事によると、1935年、アメリカの裕福な実業家で書籍収集家のカール・ティルデン・ケラーはセルバンテスの傑作の日本語、モンゴル語、アイスランド語などの翻訳をすでに書棚に並べていたが、『ドン・キホーテ』を初めてサンスクリット語に翻訳する企画をたてた。そして東洋学者、考古学者、探検家として知られ、友人でもあったイギリスのマーク・オーレル・スタインに助力を願った。同年11月、ケラーはスタインに、「私の望みが幼稚であると承知していますが、何とか実現したいと考えています」と訴えた。二年後、ケラーのもとに『ドン・キホーテ』の最初の8章分の翻訳が「甘美で非常に正確なサンスクリット語」でなされて届いた。1955年にケラーが亡くなったとき、サンスクリット語版『ドン・キホーテ』はケラーの多くの宝物とともにハーヴァード大学に遺贈されたが、長い年月の間、陽の目をみずに放置されたままであった。ところが最近、この翻訳原稿が発見されて出版にこぎつけたのであった。ヨーロッパの代表的な学者スタインと、カシミール地方のサンスクリット学者との、きわめて親密で、生涯続いた献身的な友情によってなされた翻訳は、「インド・スペインの文化的な絆への大きな讃美であり、同時に、人類の遺産である古典小説『ドン・キホーテ』というものを引き出したヨーロッパとアジアの学者への賛辞となったのである」と『ガーディアン』紙は報道している。『絵本どんきほうて』の制作とサンスクリット語版『ドン・キホーテ』の翻訳は同時進行していたことになる。これはケラーの包容力あふれる人間性を語るにじつに興味深い逸話である。

---

<sup>24</sup> 「ルーズベルト大統領攻撃や、最近ではシンプソン夫人こき下ろしなど、読む私がひやひやする程である」(「由来」)。

<sup>25</sup> 「民芸品の美しさはわからなくても、全身全霊を平和の確立にささげている人があれば、私はその人を、民芸品の美しさはわかっても、平和の確立に無関心な人よりも、はるかに高く評価し、はるかに深く尊敬する。」「私の民芸教室」『わが日わが歩み—文学を中軸として』(荒竹出版、昭和52年)、p. 295。

<sup>26</sup> 'First Modern Novel—Oldest Language': Sanskrit Translation of *Don Quixote* Rescued from Oblivion' *The Guardian* (6<sup>th</sup> July, 2022).



ケラーはボストンでも有数の資産家であったが、豊かな出自ではなかった。早い時期から寿岳には家族と歩んできた半生を語っている。「私はネブラスカの乾燥した大平原の砦で生まれ、人生の最初の 12 年間に西部、南西部で過ごしました。祖父は約 90 年前に東部のペンシルベニア州を離れ、妻と 7、8 人の子供を連れて、ミシシッピ州西にあるアイオワ州へゆっくりと辛い道のを歩んできました。そこで私の父は 84 年前に生まれたのです。父の青春時代は大陸横断鉄道が建設される前で西の果てで過ごしました。その経験談は生き生きとして興味深く、愉快なものです。父は電話会社の設立当初から事業に携わり、生涯を終えました。世界を震撼させた大恐慌が起きた 1893 年、私はハーヴァード大学を卒業し、その後 17 年間電話事業に携わり、アメリカ全土を巡回しました」(1930 [昭和 5] 年 4 月 30 日) と、ケラーは父の代から始めた電話事業で財をなしたのであった。

『絵本どんきほうて』が完成するまでの経緯は依頼者と共作者とのあいだに交わされた書簡によってたどることができる。「あの『ドン・キホーテ』の絵がいつ手に入るのか、あなたからの連絡を心待ちにしています。私の焦りと熱望は作品に寄せる興味から生じるものとお許し下さい。私は傑出した芸術的で優れたものを見ることを願って已みません。老衰で亡くなる前にどうか実現して欲しいのです」(1936 [昭和 11] 年 7 月 10 日) と日本版『ドン・キホーテ』の完成を祈念してやまなかった。

3 ヶ月後、待ち焦がれていた見本刷りがケラーのもとに届いたとき、ケラーは感激で胸をつまらせた。「芹沢氏の「ドン」見本刷りをお送りいただき、興味と興奮そして誇りをもって接しました。「ドン」の魅力に迅速かつ的確に反応された芹沢氏はやはり本物の芸術家だと思います。着<sup>ちやくさい</sup>彩見本をお送りくださったので、私の焦りは一時、鎮まりました。感謝にたえません」と喜びを伝え、芹沢の労を多とした。「芹沢氏には、15 葉や 20 葉ではなく、40 葉もの挿絵を描いてくれた仕事と犠牲に対して、大きな感謝の気持ちをお伝えくださいますでしょうか。また、あなたやご友人がこの件に大きな関心を寄せてくださり、私はいささか悔恨と感謝の気持ち満ちあふれています」(1936 [昭和 11] 年 10 月 13 日) と限りない感謝の念を表明した。

以後、毎週のように完成を心待ちにする手紙がボストンから太平洋を越えて京都へ届いた。「『ドン』日本版はまだ届きません。これさえ入手できれば、芹沢氏の素晴らしい挿絵とともに、私のコレクションの中でも日本版『ドン』はもっとも際立った存在になるでしょう。私はそのみごとな挿絵の到着を、全身鳥肌を立てながらお待ち申し上げます。妻と私はあなた様のご使用されている紙の質感にいつも感心しています。こうした上質の手漉き紙(できれば白色)を入手できる場所をご教示下さいませんか」(1936 [昭和 11] 年 10 月 26 日) と手漉き紙の話題を交えながらも日本版『ドン・キホーテ』が話題の中心であった。ついに、この二ヵ月後のケラーの手紙には焦燥のあまりいささか脅迫まがいの文言が踊るようになり、微苦笑を禁じえない。「私の親愛なる若き友よ。わが寿命を縮めようとしているのですか。郵便物が到着するたびに、日本版『ドン・キホーテ』を心待ちにしているのです。でも配達ごとに失望を味わっています。あなたの画家は芸術家らしい無頓着さでもって安

閑とされているのでしょうか、もし私を愛しているなら、彼に針を刺して、どうか急がせてください」(1936 [昭和 11]年 12 月 4 日) と、我慢の限界を示す手紙が届いた。それは、「とにかく『さんちょ従へきほうての門出』の試作がこの仕事への門出になったのですが、それきりで、なかなかあとが続かず、出しまぎれに諸所へ逃げ出たことでした。甲子温泉で群鳥の鳴き声を聞いたり、本郷の宿から夕暮れの市街をながめたり」(「私の私家本」) した、と芹沢自身が述懐していた時期と重なる。

1937(昭和 12)年 3 月 28 日、ついに完成した『絵本どんきほうて』15 冊がアメリカへ発送された。日本版『ドン・キホーテ』はボストンに到着したが、出張で不在のケラーに代わり秘書ジョンソンから先ず礼状が寿岳のもとへ届いた。「拝啓 ケラー氏が数日間不在のため、『ドン・キホーテ』15 冊を受領したことをお知らせします。ケラー氏は私が梱包をほどくと、すぐにそれを見て、喜びと感嘆と誇りに満ちた声をあげました。彼はこの本をとて気に入り、帰国後すぐに、お約束の『長い散文の抒情詩』あふれるお手紙をあなたに認めるでしょう。敬具」(1937 [昭和 12]年 4 月 17 日)。



「さんちょ」を従えて

そして 3 日後、歓喜に満ちあふれた礼状が書かれた。「わが親愛なる若者よ。私のオフィスに美しく梱包された本が運ばれてきたとき、私がどれほど喜びと期待に胸をふくらませたか、想像もつかないでしょう。もちろん、何か胸おどるものを期待していたのですが、絵の美しさ、本と外箱の見事さには言葉を失いました。そして、奥付で私を親友の地位に引き上げてくれたと認めたとき、私の胸は感激でこれ以上なく大きく膨らんだのをお分かりでしょう。これ以上うれしい言葉を知りません」と手放しの喜びを寿岳にぶつけた。この歓喜を分かつかのよう

に、すぐに友人にも贈呈された。「かつてブレイクの「校正刷り」を寄贈してくれた好意に対して、あなたと私からの謝意として、すぐにフィリップ・ホーファーに一冊を贈りました。明晩、彼はボストンの愛書クラブで講演をする予定なので、言葉を交わす機会があるでしょう。また同時に、もう一冊をラングドン・ウォーナーへ贈呈しました。ウォーナーは柳博士と昵懇ですからあなたに一報が届くでしょう。でも、まだ 13 冊も残っているというのに、これ以上は 1 冊も手放したくありません。これは許しがたい自己愛でしょうか」と、『絵本どんきほうて』を独り占めしたいという稚氣さをうれしさ余り伝ようとしている。

ケラーはまた芹沢に対する恩義も忘れてはいなかった。「この感謝の気持ちを有意義な形で表したいので、150 円の手形を同封します。どうか芹沢氏と貴殿の間で分配してください。そして、私のいささか奇妙な考えに知的で芸術的な意向をはらい実行されたことに対して、私の命ある限り深い感謝は続くでしょう、と芹沢氏にはお伝えてください。そして、もし彼が署名を別の紙に書いて送ってくださるなら、いずれハーヴァード大学図書館の棚を飾る

ことになる限定第 1 番本に添えたいと考えています。また単刀直入にいいますが、ハーヴァード大学図書館、もしくは日本美術のみごとなコレクションがあるボストン美術館へ原画を寄贈したい気持ちが私にはあることもどうか忘れないで下さい。わが家の安らぎと平穩の導き手となり、あのみごとな『ドン』に対する私たちの誇らしい喜びと感謝の念を改めて表明させていただきたく存じます。また私はあなたの奥様に慶賀の念を表わしたく存じます、機微に反応できるご主人をお持ちになったことに対して。愛情をこめて。カール・ケラー」(1937 [昭和 12]年 4 月 20 日) という文面から推察できるように、第 1 番本は当然、ケラーに贈られた。ケラーには 1 番本以下、15 冊(1-4、6-18 番本)が贈呈された。そして同時に柳宗悦(19 番)、河井寛次郎(20 番)、新村出(21 番)、濱田庄司(22 番)、日本民藝館(23 番)、水谷良一(24 番)など民芸の仲間たちへ献呈された。芹沢には第 5 番本が贈られたのである<sup>27</sup>。

ただ驚くことに、ケラーは独り占めしたいと言いながら、アメリカでの販売を目論んでいたようである。「追伸 注文書を急いでください。アメリカで販売する予定です。私の持ち分を配布した後は補充してもらうかもしれませんよ」とあるように、その後の手紙によれば、何冊か追加注文されアメリカでもじっさいに販売されたのである。

『絵本どんきほうて』の完成をよろこぶ間もなく、ケラーは日本を取り巻く国際情勢を危惧していた。1937 (昭和 12) 年 7 月 7 日、北京郊外の盧溝橋で日中両軍が衝突し、7 月末には日本軍が北京・天津地方を制圧していく。やがて 8 月、上海で日本軍将校が射殺された事件を契機に、日本は上海地方への出兵を決定した。戦争に傾斜していく日本国に対してケラーは間髪いれずに反応している。「私は日本と中国の戦争についてひどく心配しています。そこから当然生じてくる苦悶、死そして不正な行為だけでなく、米国が日本に対して徐々に敵意を抱くようになるからです。日米間の戦争が明らかに不可避である兆候が増大しつつあります。狂気の沙汰としか思えません。戦争が起こるとしたら私の死後まで延期してほしいものです。論理的に考えると、アメリカ、ロシア、イギリス、フランス、オランダの連合軍は日本と必ず対抗してくるでしょう。戦争が勃発すると、日本から私は圧力を受けます。私がある人と貴国民である日本人に抱いている愛情や、貴国に対する賛美を考えると、こうした結論が私にはどれほど苦痛であるか、ご想像できるはずです」(1937 [昭和 12]年 8 月 27 日) とケラーの心痛は極限に達していた。

やがてケラーは日米の戦争が不可避であることを考えざるを得なかった。社会が直面している状況は絶望しかなかった。「2 月 5 日付のお手紙を拝受しました。あなたの親切で愛情深い言葉に、私の心は大きく膨らみました。世の愚かさは、愛情をそそいできた人々を引き離すことはできません。現在の悲しく恐ろしい状況は、私の理解を完全に超えています。悲しいことに事態は順調に進みません。「事態」は経済的だけではなく、精神的なものも意味します。世界の経済状況を再調整するか、または何らかの方法で生活様式を人間の本性、

---

<sup>27</sup> 『絵本どんきほうて』寄贈、販売名簿 (向日庵資料)

能力と調和させなくてはなりません。私はすっかり老いました。だが、かつてはなかった冷静沈着さで物事を観察できるようになりました。銃火と暴力はことごとく先の大戦で使い果たしたと思込んでいましたが、そうではなかったようです。そして今、私の最たる興味は、現今のありえない不適応が何に起因しているのかを知りたいのです。人間はその環境にごく短時間では適合できません。乖離が大きくなり、乖離による苦痛に耐えられなくなると、人間は他人への思いやり、配慮を喪失してしまい、盲目的になり自分自身をより悪化させてしまうのです。しかし、説教はもう十分でしょう。説教したところで今起きていることを解決できません。世界は、突入するしかない崖っぷちに立たされています」と、戦争が勃発し寿岳とも交わることができなく日が近いことを予感していた。最後の愛情をそそぐかのように、文末に「あなたの奥さまとお子様たちにささやかな贈物を買っていただくため10ドルの手形を同封します。日本を訪問することが私たちの希望であり期待でしたが、それはとても遠い星にいる、わが来世に延期しなくてはならないでしょう」（1941[昭和16]年3月7日）と、ケラーは生きているうちに寿岳に会えることはないと覚悟したようである。確実に戦雲は黒々とたれこめていた。同年3月3日、国家総動員法改正法が公布され、政府権限の大幅な拡張がはかられた。全国の映画館では国策のニュース映画が強制され、東条陸相は戦陣訓を示達した。3月7日、国防保安法が公布され、3月5日、ヒトラーは対日協力の指令を出していた。国内では防空頭巾、ゲートルといった非常時服が急増していった。

### 結びにかえて

完成した『絵本どんきほうて』について、芹沢自身は、「この本にはいろいろ試みたいものを盛り込んでしまい、今にして思えば、少々過剰な感あるのが不満で、また、絵にあった詞を入れた方が、絵本としても、より完全と思われるのにそれが出来なかったことも返す返す心残りです。不日これを軽いものにあらためて親めるものにしたいと思っています」（「私の私家本」）と自らに反省と課題をかしている。「少々過剰な感あるのが不満」という自己批判はスペインの傑作に引きずられてしまった部分があり、自己の芸術に厳しい作者の想いを余すところなく伝えている。

逝去するほぼ一年前、寿岳はケラーとの交友をしるした一文を発表した。『絵本どんきほうて』が単なる作品依頼から成立したのではなく、個と個の濃密な信頼関係があればこそ初めて完成できたことを再認識させてくれる。よって共作者としての証言は傾聴に値する。

ケラーからの制作依頼について、「貴国人は古来絵画芸術にすぐれているのに、現行の貴国絵入り本に見るべきものが一つもないのは残念だ、こうなれば万事君にまかすから、君が適当と思う現代の日本画家の、一枚でもよいから、われらの親愛なる騎士の名をはずかしめない作画がよろしい」と述べ、『絵本どんきほうて』の萌芽を伝えている。ケラーからの来信を、「私の手もとにある百通ははるかに超すケラーからの手紙は、風雪ただならぬ当時の世相を告げる証人であろう」と考え、両者が交わした手紙の歴史的意義をも暗示している。

『絵本どんきほうて』が完成してからも両者の友情はいささかも揺るがなかった。戦後の

窮乏時、ケラーから、「なくて困っている物資があれば遠慮なく言ってよこせと次信にあったので、私の靴型を紙に取って送ったら、ボストンのチャイナ・タウンでやっと見つけたのがこれだ、と何足か送ってくれた親切も忘れない。京都大学で天文学を専攻した息子が戦後最初のフルブライト留学生としてミシガン大学に入ったと知るなり、所定の学費だけでは不自由だろうと月々若干の金員を送金してくれた<sup>28</sup>」という。息子、寿岳潤の妻である和子の証言によれば、夫が愛蔵品をしまっていたキャビネットには、ボストンのケラーから送られた十二通の手紙（1953年11月30日付～1955年2月9日付）が大切に保管されていたという。

戦後も両者の友情は断絶することはなかった。「妻と私は、12月25日付のクリスマスカードを受け取り感激しています。ここに届くまでに長い時間がかかりましたが、私たちにその興味と価値が減るわけではありません。私は今、優良な食料品店に行き、その店に発注しあなたに「ギフト」と書かれた小包を送ったところです。その中には粉末卵、米、乾燥全乳、チョコレート、中国茶、ドライブルーなどが入っています。あなたがタバコを吸うかどうか存じませんが、タバコも入れておきました。お子様が吸うかもしれませんからね」（1948[昭和23]年2月3日）と、物心両面で寿岳家を支えようとした。この信頼深い両者の関係があつてこそ、『絵本どんきほうて』は完成したのである。

『絵本どんきほうて』の刊行後、40年がたち新版・型染『絵本どんきほうて』の発刊がなされ、作家と共作者の言葉が寄せられた。芹沢は共作者、寿岳が愛情をもって見守ってくれたことを感謝しつつ、「種を蒔き、成熟をまつ間の慈愛に満ちた寿岳文章さんの心遣いには、いまさらに感謝を新たにするものです。この時期の我々仕事する者は、一人一人ながらすべてが、理屈なしに貧しいながら恵まれた仕事の世界につつまれて働いていたと思います」と作者は『絵本どんきほうて』が出版された往時を回顧している。一方、「種を蒔き、成熟をまつ」共作者、寿岳は病床で『神曲』翻訳に訳筆を走らせていた。そして『絵本どんきほうて』の本質に想いをめぐらせた。「『神曲』と『ドン・キホーテ』は、私の最も好きな古典であるが、それはこの二つの作品とも、古代を照らし、近世へ架橋する中世を母胎としているからである。ところで、日本には、その質において西洋のそれに優るとも劣らぬ中世があり、それを母胎とする多彩な芸術活動があった。本の方でいうと、奈良絵本や丹緑本もその系譜の上に立つ。芹沢君は、『ドン・キホーテ』の絵解きを行なうに際し、この方面の勉強に心をひそめた。芹沢絵本どんきほうての、あの尽きぬ魅力の秘密を解く鍵の一つはここにある<sup>29</sup>」と基底としての中世という時代の重要性を説いた。

晩年をむかえていたケラーは、ハーヴァード大学で開催されたセルバンテス生誕400年祭の様態を寿岳に伝えてきた。「セルバンテス生誕400年祭が盛大に祝われ、ハーヴァード大学ロマンス語学科長、ウィリアム・ベリアン教授が企画した講演は、10月23日から12

<sup>28</sup> 寿岳文章「洋の東西を問わぬ人の縁」『朝日新聞』（1990年3月12日）

<sup>29</sup> 寿岳文章「古典と挿絵—芹沢絵本どんきほうての意義—」『これくしょん』第61号（ギャラリー吾八、昭和50年）

月 4 日まで、アメリカでもっとも著名なスペイン語学者たちによって行われました。スペイン語でなされた講演に数百人の聴衆が集まったことに、私たちは大いに驚き、また大きな喜びを感じました」(1948 [昭和 23]年 2 月 3 日) と、セルバンテス生誕 400 年祭を記念する展示をも寿岳に伝えている。「ホートン図書館の美しい展示室は、ことごとくドン・キホーテで埋めつくされました。展示された本は古書収集家、ローゼンバッハのみごとなスペイン語初版本を除き、全点が私のコレクションから出品されたものです」と、長年の夢がかなった喜びをあらわにした。加えて「私の日本語コレクションの最高位」をしめる『絵本どんきほうて』はこうした逸品のなかでも異彩を放っていて誇らしい、と語った。そして展示された『絵本どんきほうて』の説明書きにふれて、「ただ残念なことに、そして不公平なことに、芹沢に型紙を切らせ、あのすばらしい本を印刷したあなたのことを言及していないのです」(下線部は筆者) と書き加え、共作者である寿岳をおもんばかった。寿岳はこのケラーの言葉に共作者としての矜持を覚えたはずである。



『絵本どんきほうて』とその帙(右)



## 寿岳文章の読書記録『獺祭記』

寿岳文章は広範囲におよぶ読書の記録として『獺祭記』と名付けた2冊のノートをのこしています。この読書ノートは、戦中の昭和18年から昭和43年にかけて、401冊の書籍を対象に書かれたものです。寿岳は読書記録の意義について以下のように記しています。

戦前から私は自由日記を利用して『獺祭記』と題する読書記録帳をつくり完読した書物に対する批評や感想を書き綴ってきたが、年をとるにつれて完読書の数の減少を見るのは淋しい。気力はあっても、体力が壮年時代ほどたくましくないのである。ただ、それらの読書感のなかには、同じ書物を、何年か、または十何年か隔てて、再び三たび読んだ場合のもまじっている。それらの感想を読みくらべてみると、自分の読書歴の年輪がまざまざとわかるようで、真に興味が深い。前にはつまらなく思えたものが、実はそうでなかったという発見があったり、逆に、若いころ感激した箇所が案外に空疎な内容だとうけとられたりする。読書記録は、言わば私の人生の里程標でもあるわけだから、続けられるかぎり続けたいと今も私は思う。（『読書雑記』『学鏡』昭和44年11月号）

寿岳にとって「読書日記」とは読書を通じて生きてきた里程標にほかならず、同時に人生の「索引」でもありました。つまり「人生経験の追跡のための索引」であったのです。「私の『獺祭記』が、一般に読書についての何かの参考ともなれば幸いである」と後世に自らの読書体験をゆだねました。

以下に、「向日庵資料」として残る『獺祭記』の調査研究を行った経過報告としてとりあげ、寿岳自身が記述した年月日、選択した書籍の書誌情報、読後感を原文のまま翻刻し、あわせて解説者による解題を付します。（日付に続く[ ]内の数字は寿岳が付した番号です。）



獺祭（だっさい）：捕獲した多くの魚を食べる前に並べておく獺（かわうそ）の習性になぞらえ、転じて、詩文をつくるときに多くの書物を周囲に拡げちらかすさまをいう。

(14) Zen in English Literature & Oriental Classics. By R.H. Blyden. 北尾久.  
1927-194. 186. Pp. 446.

(14) An Anthology of World Literature  
 characterizes in the light of Zen 禅の光  
 名をかりておもしろい。三つに分けて、  
 一、外向的、格調、白の苦行ありし。  
 二、内向的、立止し。二つに分けて、  
 三、和らぎ、虚心、苦行を思なくも  
 あり。一、ルニカアストン、次、大徳  
 をも随分なり、あり。二、エフリースト  
 三、人の徳なしと云ふ。文その中心  
 2. 三つ、三つ、三つ、三つ、三つ、三つ、  
 のうち、今、今、今、今、今、今、

寿岳文章直筆『懶祭記』より 昭和18年6月26日 (向日庵資料)



1943 (昭和 18) 年 6 月 26 日

[14] *Zen in English Literature and Oriental Classics* by R. H. Blyth、北星堂、昭和 17 年、B6、pp. 446 <sup>(1)</sup>

[14] An Anthology of World Literature elucidated in the light of Zen とでも名をかへる方よからむ。引用が三分の二、従って外向的。松浦一氏の著者の如し <sup>(2)</sup>。しかし面白い点も多し。これだけ禅を求めてみるのに感心 <sup>(3)</sup>。著者に妙なくせがあって、ヘルンやアストン、鈴木大拙氏を随分けなしてゐる <sup>(4)</sup>。ジェフリーズも三文の価値なしと言ふ <sup>(5)</sup>。文学のセンスに乏し <sup>(6)</sup>。この書評、「英文学研究」にたのまれて、今月中に起稿の筈。

### 【註釈】

(1) イギリスの日本文化研究者レジナルド・ホーラス・ブライス (1898-1964) と本書『禅と英文学』の紹介は、すでに平川祐弘『平和の海と戦いの海—二・二六事件から「人間宣言」まで』 (新潮社、1983) に詳述されている (pp. 139-85.)。

(2) この部分は書評では「ブライス教授は洋の東西を問わず、文学作品の根底には禅の精神が流れていると考えて研究を重ねた。本書はその集大成で、膨大な量の中国・日本の古典、仏教書をひも解きながら、それに呼応するドイツ、フランス、イタリア、スペイン、イギリス文学のさまざまな作品と比較検討を加える」と叙述され、奥付では『禅と英文学』となっているが禅研究の対象としてしているのは世界文学である。そして書評は続いて、「松浦一氏は文学論にもそうした傾向を見るが、本書にはいろいろな作品からの引用が恐ろしく多い。ざっと計算して全体の三分の二は引用であろう。著者はそれらの引用を中心に、或いは解説しつつ、或いは批判しつつ、その中から禅的なものを取りだして筆を進めてゆく。As *Anthology of World Literature Elucidated in the Light of Zen* とでも名づけられる方が適当なような気もする」と癩祭記の本記述と著しく一致する。

松浦一 (1881-1966) は英文学者で、講師として東大文学部で行った講義は、仏教信仰を基礎とした文学論で知られる。「怠惰なる聴講生」であった芥川龍之介は『文学の本質』(1915)を書評して、「旧日本に対する思慕」のなかに「未来、希望、歓喜」などを見出そうとしていた (「松浦一氏の『文学の本質』について」)。『生命の文学』(1918)、『文学の絶対境』(1923)、『文学の白光』(1924)などを寿岳は「文学入門書」として推奨している (『読書の伴侶』)。だが、癩祭記[204]には松浦の『トルストイの芸術論』(1912)の論評があるが、「読むのにすこぶる骨が折れる未熟な文章」で書かかれていて、『文学の本質』以後につらなる著者の、深みを見せぬ文学論の突端がここにある」とあり、余り評価していない。

ブライスは厳密に禅と文学を峻別していない。というよりも、両者が自由に融合しているところにこそ真理を見出せると



ブライス

説く。「文学、とりわけ詩歌は、このように宗教と同じ二重の逆説的な性質があり、宗教があるところ詩があり、詩があるところ宗教がある、つまり、宗教と詩が密接に関連しているのではなく、ひとつのことが宗教と詩という異名であらわされていることこそが、本書の主要テーマにほかならない。つまり「イギリス文学の禅」とはイギリス詩歌の禅であり、英国の禅は詩歌である、ということである」、と。(Literature, especially poetry, has this same double, paradoxical nature as religion, and it is the main theme of *Zen in English Literature*, that where there is religion there is poetry, where there is poetry there is religion; not two things in close association, but one thing with two names. "Zen in English Literature" means Zen in English Poetry, that is, Poetry as English Zen. [p. ix])

(3) 該当部分は書評では、「引用が多ければ多いほど、自己は放散し、稀薄となる道理に由るか。また、物を直下に受けとるのが禅の真諦であり、そのための paradox[逆説]や figures of speech[比喩]であり、趙州の狗子も百丈の野狐も、要するにその工夫に他ならぬのだが、それを謂わば日々の生活に取り入れている我々の眼から見ると、かくもひたすら禅に傾倒している Blyth 氏にして、なお論理の追求に出頭没頭、つい庭前柏樹子のそよぎを聞きのがしてしまう憾み無しとしない」と禅の要諦を示唆し、本書の著者が到達していない次元を明らかにしている。ここで言及されている「趙州の狗子も百丈の野狐」という言葉の意味であるが、前者は禅の公案「狗子仏性(くしぶっしょう)」を指し、あるとき弟子の僧が趙州に「犬にも仏性があるか、それともないか」と尋ねたところ、趙州は「無」と答えたというが、これを巡る公案である。また「百丈の野狐」は、百丈和尚が説法していると一人の老人が修行僧に混じって話を聞いた。その老人に正体を問ひ質すと、「人間ではなく、太古からこの山に生息している」と応えたところ、「修行が完成した人間でも因果の法則に落ちるのか」との問いがあり、「因果には落ちない」との返答があった。つまり禅の比喩表現を指す。「庭前柏樹子(ていぜんのはくじゅし)のそよぎ」も同様で、「唐の禅僧、趙州從諗(じょうしゅうじゅうしん 778-897)の住む観音院の庭には柏楨の老樹が茂っていた。庭の柏樹には意識はない。成長、開花、結実はおろか涼しい緑蔭で人々を休ませてやろうという意志など全くない。無心に花咲き、無心に実を結び、無心に涼しい木蔭を作って人々を憩わせているにすぎない。庭先の柏の老木は意志があるようでない、ないようで大いにある」という。

(4) この部分は書評でいう以下の部分と連動している。「Hearn に対する酷評(p. 288)や、鈴木大拙居士に対する若干の批難には、聴くべきふしもありはするが、それは Coleridge や Santayana への批難と同様、convincing[説得力あふれるわけ]ではなく、Blyth 氏には Hearn の持つ文学の sense も、大拙居士に見る禅者の風格も欠けていると言うのが、本書を読んで私の受けた偽らぬ感じである」と禅を論じるブライスを批判しているが、大拙に対してブライスはそれほど非難していない。それどころか大拙から受けた学恩に深く感謝し礼節をわきまえている。「私が鈴木大拙の禅研究に恩恵を蒙っているのは、誰にも明らかであろう。だから大拙を批判したら、それは恩を仇でかえすようなものだ」(・・・ my indebtedness to Daisetz Suzuki's books on Zen will be apparent to all; if I venture to criticize him, it is only biting the

hand that fed me. [p. xi]) と毅然と明言しているくらいだ。また、大拙はブライスの遺著『無門関』(*Mumonkan—Zen Masterpiece*, 北星堂, 1966, 2002)に英語の序文を寄せている。大拙とブライスは互いに尊敬していた。

(5) 寿岳のいう「ジェフリーズも三文の価値なし」という評価はどこからでくるのであろうか。たとえば「汎神論、神秘主義、禅」という章で言及されているジェフリーズを検討しても、はたしてここまで否定的な評価を下せるのか、はなはだ疑問である。ブライスを引用してみよう。

さらにリチャード・ジェフリーズも[詩人アレグザンダー・ポープ]同様に、「美」と「醜」、「魅惑」と「嫌悪」のいずれかを根底から選択しようとしている。禅では、こうした態度は考えられず、それはまた汎神論をも否定するものである。『わが心の記』の中で、ジェフリーズは「空という到達できない花の豊潤な紺碧さが、私の魂を引き寄せ、そこに安らぎが生じる、純粋な色彩は心の安らぎとなるのだから」と書いてる。この言葉は申し分ない、何ら問題ないのだが、だが続けてこういうのである。「祈っていると私はとてつもなく魂をゆすぶられ、さらに祈ると、まるで楽器の、オルガンの鍵盤のようにわが魂の音を膨らませ、その力で私の声を倍加させていった」とジェフリーズは述べているのだが、これはよくない、ぜったいによくない。無限の眺望が開けるといふのに、自我、魂、精神に集中することで閉鎖してしまうからだ。

(Again in Richard Jefferies we find the same underlying choice between the beautiful and the ugly, the charming and the disgusting. To Zen such an attitude is inconceivable but it is the negation of pantheism also. In *The Story of My Heart*, he writes; The rich blue of the unattainable flower of the sky drew my soul towards it, and there it rested, for pure colour is rest of heart. / This is good, and very good, but he proceeds; By all these I prayed; I felt an emotion of the soul beyond all definition; with these I prayed, as if they were the keys of an instrument, of an organ, with which I swelled forth the notes of my soul, redoubling my own voice by their power. And this is bad, very bad. This concentration on self, on the soul, the psyche, limits it seems to open and infinite vista. [p. 226])

以上のように、ブライスは自己陶醉から、つまり精神的な自慰から人間不信をよびおこし、官能におぼれるといった悪弊が生じると主張しているだけで、これをもって「三文の価値なし」とまで酷評することはない。

(6) 確かにブライスは日本文学の素養に欠けるところもあるが、逆に日本人が欧米文学の観賞、理解を余すところなくできるわけではない。著者であるブライス自身は文化の深層を理解する困難を知悉していた。「本書は二兎(以上を)追って一兎もえずといった結果に終るかもしれない。と言うのも、イギリス文学を熟知し禅に無知な英国の読者を対象にする一方、本書はイギリス文学、禅をわずかしか知らない日本の読者を対象にしているからである

(It is to be feared that this book may fall between two (or more) stools, since it is addressed, on the one hand, to English readers who know much of English Literature and nothing of Zen,

and on the other, to Japanese readers who know a little of both. [p. x]). 寿岳はブライスの禅研究に対して囑望を述べて書評を閉じる。「言葉についてこれだけ深い関心を持たれる Blyth 氏が、発句の孤立的な世界から俳諧の饗宴に進み、『冬の日』や『猿蓑』に更に驚くべき禅意を見出される日が期待される」、と。

### 【解題】

多作な寿岳がわずか3篇しか発表せず断筆していた昭和19(1944)年に公表された1篇が、本書の書評(『英文学研究』第23巻4号、日本英文学会)である。『瀨祭記』の記述と書評の内容には重なるところが多く、寿岳の思考展開と叙述の過程を知るうえで参考となる点が多々ある。残る2篇は、石田憲次『近代英国の諸断面』の書評と『関西学院新聞』(9月21日)に掲載された記事「出陣出勤の学徒に薦む」である。これらをもってしても戦禍の影響が明らかであるが、ブライスの本書は収容所で監禁中に執筆された。ブライスは敵性外国人として神戸で強制収容され終戦まで収監の身であった。本書のような英文書籍が昭和17年という時代に帝国日本下で北星堂から出版されたことは、じつに奇異と言わざるをえない(平川『平和の海と戦いの海』)。戦後、ブライスは平和への移行を円滑にするため日米両当局に対して精力的に活動した。1946年4月より皇太子の英語教師として雇用され、皇室との交流は1964年5月まで続き、皇室との連絡調整役を務め、またブライスの親友で連合軍司令部民間情報教育局の陸軍中佐ハロルド・ヘンダーソンとともに昭和天皇の人間宣言起草に加わった。1946年、学習院大学英文科教授となり、皇太子に英語を教えている。禅思想と日本詩歌、とりわけ俳句が欧米に流布したのはブライスの大著『ハイク』全4巻に負うところが大きい。1954年、俳句研究により東京大学より文学博士号を受ける。

ブライスによれば、禅は定義できないという。それは禅が実人生を稼働させる因子そのものだからである。そして禅の捉えがたい例として次のような言葉をあげる。(pp. 1-2)

「魚鳥の有様を見よ。魚は水にあかず。魚にあらざれば、その心を知らず。鳥は林を顧ふ。鳥にあらざれば、その心を知らず。閑居の気味も亦かくの如し。住まずして誰か悟らむ」(鴨長明『方丈記』)

「白鳥の雛は水を見つけるが、人間は自分の本領を知らぬままに生れる」(エリザベス・バレット・ブラウニング『オーロラ・リー』)

「水鳥の往くも還るも跡たえて されども道は忘れざりけり」(道元『正法眼蔵』)

こうした禅の捉えどころの無さは禅の実践者にも見られるところであった。西田幾多郎は鈴木大拙を、「どこか淡々としていつも行雲流水の趣を存している」「序文『禅と日本文化』(昭和15年)と評したが、まさに大拙もこうした禅の境地を体現した存在であった。

大拙と交流があった寿岳にとって禅は重要な思考媒体であった。陶工、河井寛次郎との対話はいつも禅問答であった。そして寿岳はこの書評以後もブライスの禅論に幾度も立ち返

ることになった。昭和 36 年 1 月に開催された第 23 回「読売宗教講座」において講演した寿岳はブライスの説く禅思想に再度注目することになる。「禅の研究をしているブライスという英国人は、シェークスピアにおける禅ということを書いています。それによるとシェークスピアがあれだけ広大な心構えをもつことができたのは、禅的な考え方が自分自身のものになっていたからだといっています。私たちもそういうふうにもものを見ていきたい」とブライスを援用して論を進めていく。シェークスピアの作品が世界中で受け容れられ浸透しているのは、作者が「非常に広大な心をもっていて、どのような境涯にも自分の心移して、そのものになりきってものがいえたからです」と指摘する。そうしたシェークスピアの精神の在り方は、まさに禅と通じるどころがあり、「人間は、自分の心をいつでも自由にもっていくことができる。禅でいう一つのいきついた境地も、念仏行者が一切をまかせきって自分をありのままに自由自在、無碍自在に生きていくということも、みんなそれです」と、想像力の発動においてシェークスピアの作品と禅は通底しているというのである。では、「どうしたら私たちは、十善式で説くようなものを見方ができるようになるか、それは外国の言葉でいうとイマジネーション、つまり自分を八聖道の宇宙のなかにそのまま移し植えて、そのものの立場に立って物を見るしかありません」と結論づけるのである。（「心と平和」『読売新聞』昭和 38 年 1 月 27 日）

寿岳には禅に関する論考として、「禅と紙」（『禅文化』第 65 号、禅文化研究所、1972 年）、「禅と本」『和紙落葉抄』（湯川書房、昭和 51、pp. 171-82）、「禅の回路」『朝日新聞』（1975 年 11 月 17 日）などがあるが、「東西文化の接点、禅」（『文化時報』全 8 回連載、昭和 39 年 8 月 30 日-10 月 1 日）がもっとも重要である。

ただ本記述、書評には実に不思議な点がある。ブライスはブレイクの詩を何度も引用し禅との文脈において論じているというのに、ブレイク学者である寿岳は一切言及しようとしなない。なぜか。それはブライスが世界の文学と比較対照して禅との接点を求めようとした研究方法と、寿岳が自らの初期のブレイク研究にとった、ブレイクの詩と仏典の類似点を見出す方法と酷似していたためであろう。仏典から「長劫<sup>ちやうごう</sup>を以て短劫に入れ、短劫を長劫に入れ、或は百千の大劫<sup>だいごう</sup>を一念となし。或は一念をば百千の大劫となす」（不思議法品）と「三世を以て一念となし、一念を以て三世となす」（入法界品<sup>にゅうほっかいぼん</sup>）などといった「瞬時のなかに永遠を視る」表現を探り、ブレイクの類似の詩行を求めていく。

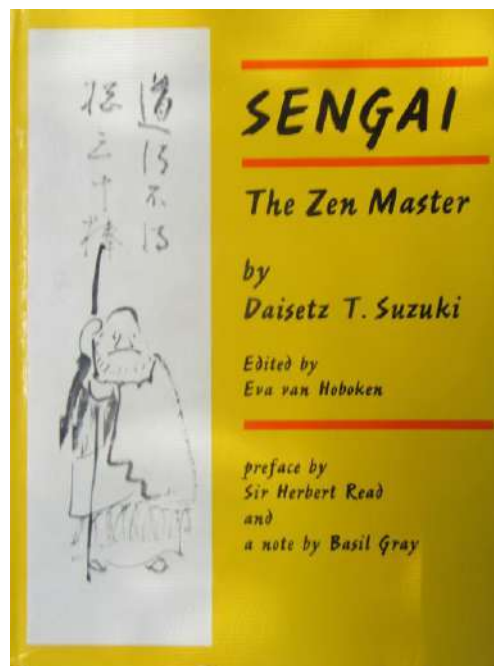
To see a World in a grain of sand,	一粒の砂に世界を見、
And a Heaven in the wild flower,	一茎の華に天国を観る。
Hold Infinity in the palm of your hand,	汝がたなごころに無限を握り
And Eternity in an hour,	一念のうちに永劫を知れ。

(‘Auguries of Innocence,’ ll. 1-4.)

「この蓮華藏、世界海の内に於て、一々の微塵の中に、一切の法界を見る」

(廬舎那佛品)、「無量の佛刹の思議し難きを、皆悉く能く一掌の中に置く」(菩薩十佳品)、  
「一念をして不可説劫に入らしむ」(普賢菩薩行品)、「一念を以て三世となす者、一念の中  
に於て一切の刹に諧る者」(入法界品)」といった類例がちどころに列挙される(「ブレイクと華嚴」『英語青年』第54巻9号、大正15年2月1日)。じつにブライスの方法と似ている。寿岳がブレイクの引用に一切言及しなかったのは近親憎悪であったか。

寿岳はブライスと「会ったことはなかった」が、戦後、天皇の人間宣言にブライスが深くかかわっていたことを『回想のブライス』(1984)によって知り、感銘を受けた。戦後、寿岳は真言宗高野山から真言宗の經典『十巻章』の英訳を依頼されたが、忙しくできないのでヴァイニング夫人と相談した結果、ブライスを適任者として推薦した。ブライスは寿岳にとって、「非常におもしろい人で、直接話し合う機会はなかったけれど、心の中に座を留めている一人」(『父と娘の歳月』、pp. 150-52)であり、まさに著述を通して心を通わせた「知己」でもあった。



鈴木大拙『仙厓』(イギリス版)

1943 (昭和 18) 年 7 月 15 日

[18] 高木貞治『数学小景』 岩波書店 昭和 18 年 B6 232 頁

きのふからよみかけて、電車の中で一気に読了。数学のきらひな自分<sup>1</sup>にも、数学的な考へ方はびしびしと了解される。次に一つ二つ言葉を抜く。

「不幸にして不可能と確定しても、問題は解決されたのである。」(P.9)

「無理な注文はてぎつこない、といふのも解決である。」(P.10)

「なくてはならない」から「である」までの途は遠い。「勝たねばならない」から、「勝つた」まで、相当、長期戦を覚悟せねばならない。又しても、「ねばならない」である！(P.93)  
「差別の中に平等を見出すのが、科学の重要な一つの任務である。」(P.129)

### 【解題】

『数学小景』は、1933 年の『近世数学史談』刊行後の 1943 年岩波書店から出版され(1944 年、再版、「その後も何回か版を重ね」、1981 年に出版された改訂版を底本に、2002 年に岩波現代文庫として刊行された。本書は、世界の数学界で高く評価された「類体論や解析概論のような“大きな問題”」についての業績を発表したが、「一般に“数学遊戯”と呼ばれるいわば“小さな問題”」に興味をもち、それを扱っている。例えば、「ケーニヒスベルグの橋渡」は「一筆書き」の問題であり、またアメリカ人に 1878 年に考えだされた「十五の駒遊び」すなわち「四角な小箱に、1 から 16 までの番号が付いた駒が並べて…16 番の駒を箱から出して」生じた空所を利用して、駒を上下・左右に動かして正しい順序にならべるゲームである(現在では「スライドパズル(15 パズル等)」として数学の教材として販売されている。

この初版を読んだ寿岳は、高木が初版「序」で書いた「式も、記号も、はた熟語も、陳述の便宜のために約束された合い言葉にすぎなくて…数学においては本質的なものではなく」「本質的なものものは、数学的な物の見よう、考え方である」との言葉に呼応するかのよう、「数学のきらひな自分」寿岳にも、「数学的な考へ方はびしびしと了解される」と書いた。

寿岳は「きのふからよみかけて、電車の中で一気に読了」し、「数学的な考へ方はびしびしと了解される」と書いているが、その言葉通り高木の論の進め方(その中には数式はほとんど現れないが、ユークリッド幾何学原本や W. R. ハミルトンなどの名前と内容が、さらにはオイラーの公式の説明などが書かれているが)がほんとうに「了解」されたのであれば、数学嫌いとしつこく書く寿岳はほんとうは「数学的な考え方」を習得でていたことになる。

---

<sup>1</sup> 寿岳の兄鈴木敏一は東北帝大理学部数学科 1 回生で、『保険数学』(岩波書店、1934)の筆者である。兄敏一については「亡兄のこと」(『月刊 保険評論』1959 年 7 月、vol. 11, no. 8)に書かれており、同時に寿岳の「数学ざらい」に言及されている。

ただ、高木の教えを受け、数学者となった岩波現代文庫版の解説者彌永昌吉<sup>2</sup>は「数学的な物の見よう」を超えて「数学の美しさ」を経験したが、寿岳もまた、「数学の世界を最も純粹で美しいと思う一念は今も消えず、好んで数学史を読み、書架には何冊かの数学書さえ持っている私である」と書いている<sup>3</sup>。

なお、寿岳が引用した語句については、抽出のために前後関係を以下に補足する。

(1)「不幸にして不可能と確定しても、問題は解決されたのである。」(P.9) …「無理な注文はできつこない、といふのも解決である。」(P.10)「そんな注文には、以降取り合わないですむからである」(岩波現代文庫版、7-8頁)。

(2)「なくてはならない」から「である」までの途は遠い。(P.93)「勝たねばならない」から、「勝つた」まで、相当、長期戦を覚悟せねばならない。又しても、「ねばならない」である！(P.93、岩波現代文庫版、72頁)。この問題は、“what ought to be”(「当為」)と“What to be”(「存在」)との乖離の問題である。

(3)「差別の中に平等を見出すのが、科学の重要な一つの任務である。」<sup>4</sup>(P.129、岩波現代文庫版、102頁)。ただ、注目すべきは、「隣組、地図の塗り分けで」で用いられる「差別」とは、「内と外との差別」(岩波現代文庫版、99頁)と用いられてるように「境界」「境界線」を「区別」することであり、「平等」とは「共通点」の存在を示すものであって、社会問題で用いられる「差別と平等」という意味ではないであろう。しかし、この誤読ともいえる寿岳の読み込みは彼の社会問題への強い意識の反映であるといえる。

しかし、寿岳は引用や言及をしてはいないが、例えば、「一筆書き」で、それが可能な「条件」や二筆書きなど多筆書きが必要な「条件」を求めようとしているが、それは「ある命題が成立するためには、どのような条件が必要であるか」、さらには「必要十分条件」を問い続け、考察しようとする「数学の考え方」を学ぶ好例を高木は提供したことになる。

岩波現代文庫版は、「なお、読みやすさを考慮」されているため、文言は初版と異なることがある。(井上琢智)

---

<sup>1</sup> いやなが

<sup>2</sup> 彌永昌吉(1906-2006)は東京大学理学部教授(1942-67)、1970年フィールズ賞選考委員。専門は整数論。教え子には義弟でもあるフィールズ賞受賞者の小平邦彦、第一回ガウス賞受賞者の伊藤清がいる(佐武一郎<カリフォルニア大学・東北大学名誉教授>「彌永昌吉先生を悼む」日本数学会)。

<sup>3</sup> 寿岳文章「私の英語開眼—数学教師への反抗から—」(筆名にわざわざ「英文学者」と記している)、『高校英語教育』1972年2月1日号、32-33頁。ただし、この「美」について、数学者彌永昌吉と英文学者寿岳の見解(同一性と差異性)については、今後の検討課題である。

<sup>4</sup> この点について、高木は「幸運なる公理、天祐的公理の威力は差別を平等化する。差別の平等化、それは即ち科学であろうが、平等化は絶対に客観的なことを要する。盲目の立場に於てはすべての差別が平等の暗闇になるおいったような涅槃とは違う」としている(『数学の自由性』、1949、255頁)。



1968 (昭和 43) 年 9 月 7 日

[398] 小堀憲『大数学者』 新潮選書 昭和 43 年

<sup>〔おり〕</sup>時 に出てくる数式の内容はわからないが、近代数学を展開させた人たちの行歩と、それを取りまく世相には興味の多いものがある。著者はずいぶん綿密に史実をしらべ、旧著『大数学者』に思いきつた補訂を加へた。ただし、文学者的な感覚から言ふと、biographer としての著者の力量的限界があるやに思ふ。

### 【解題】

筆者小堀憲<sup>あきら</sup> (1904-1992) は第三高等学校と京都帝国大学で湯川秀樹と朝永振一郎と同級であり、京都帝国大学卒業後は、新潟高等学校、第三高等学校をへて京都大学教員となった。専攻は関数論であるが、同時に数学史<sup>1</sup>の著書として本書『大数学者』初版出版後、「1 万人読者を得た」『数学史鈔』(秋田屋、1946)<sup>2</sup>、『物語 数学史』(筑摩書房、1984)らを出版している。

本書は、最初、2 巻本 (1939、1940) として弘文堂教養文庫として、1949 年には弘文堂から合本出版され、さらに 1968 年に新潮選書として出版された。その後この新潮選書はちくま学芸文庫として復刊された (2010)。寿岳が読んだのはこの新潮選書版である。扱われた内容は、2 巻本・合本は、アーベル、ガロア、ヴァイエルシュトラス、リーマンのみであったが、この新潮版では、ガウス、コーシーが加えられ「6 人完全版」となった。

「数学史上に名を輝かすような仕事をしたのは、殆ど例外なしに、20 歳から 30 歳まで」(「はしがき」1 頁) の数学者のうち、1 巻目にはまず「殆ど同じ目的に向つてみたが、互いに交渉がなかつた」が「20 数歳という若さで死んだ」アーベル (解析学) とガロア (代数

---

<sup>1</sup> 「数学科専門科目として、…『数学史』を設置している大学は日本ではほとんどない」「調査した限りでは、2006 年度に数学科で数学史を設置しているのは、東海大学理学部・早稲田大学理工学部・立教大学理学部だけである」としている(中根美知代「欧米の数学事情」平成 16 年度科学研究費(奨励研究)(16913003) 報告書、196 頁)。

<sup>2</sup> 『数学史鈔』は、新潟高等学校や第三高等学校の講義の間に書いたメモをもとにしているが、すでにこの段階から「数学の発達をを紹介する『物語』と称し、ギリシア、インド(「ゼロ」の発見)、アラビア、イタリア、フランス、近世の数学の濫觴として天文学、幾何学)、近世の数学として微積分、日本の数学、微積分の影響と語り、やっとガウスが登場する。ギリシア数学は幾何学的色彩が強く、技術・知識に過ぎなかったものを、「共通の観念である定義・公準を基礎にして基本定理を設け、証明を手段として、論理的に体系づけられた」(5-6 頁)『学』にまで引き上げ(10 頁、ちくま学芸文庫『物語 数学史』では「エウクレイデスのまとめ」と指摘している。56 頁)た。そこでは二次方程式の解法に際して「負の根も無理数の根も認めなかった」(21 頁)。このような数学は応用を目指して発生するものではなく、純粋な理論には、応用が付随することを示した(15 頁)。このように各国の数学特徴を明らかにしている。その点で、『物語 数学史』の前身である。

ヴァイエルシュトラス  
(1815-97)



出典：  
小堀憲『大数学者』新潮選書、145頁

っている。ただ、これら本書で語られなかった大数学者は、小堀の本書の新潮選書版や『物語 数学者』(1984)で語られている。なお、関西学院大学図書館には、下村寅太郎の蔵書が所蔵されており、その目録『下村寅太郎蔵書目録』(2002、「あいさつ」井上琢智)が刊行されている。

小堀は、2巻本出版以降「集めた資料によってすっかり書きかえることができた」のが、新潮選書版である。しかし、この執筆との間に「戦後20年というのに、まだ『敗戦』の傷あと

コーシー (1789-1857)



出典：小堀憲『大数学者』、37頁

学)が扱われ(「はしがき」1頁)、2巻目には「函数論」を発展させたヴァイエルシュトラスとリーマンが扱われた。ただ、この1巻では数学上の「業績について云々するのではなく」、「優れた才能を抱きながらも、世に認められないで、悶々のうちに此の世を去つた・・・短い・・・波乱の多い・・・生涯を詳しく紹介し」(2頁)た。その姿勢は2巻でも踏襲されている。なお、1・2巻では恩師松本敏三に、この著書のタイトル「大数学者」の命名は、先輩の下村寅太郎に負うとしながらも「ガウスやニュートン」に言及しなかったのは、本書はあくまでも「19世紀に生れ19世紀に死んだ『大数学者』に限定した」と断

リーマン (1826-66)



出典：小堀憲『大数学者』、203頁

は、痛々しく残っていて、学生は、苦しい生活と戦いながら、学問をしなければならない。そのうえに『夢』を持つことできない生活を、おしつけられている」。そのうえ「世界の文明国」は「とぼしい財力ではあるが、おしげもなく投じて」「巨歩」の一步を踏み出しているのに「わが国も、消極的な態度をとってはいは・・・取り残されてしまう」と学問への政府の支援の貧弱さを批判する。まさに今なお日本ではこの事実はかわらず、むしろさらに悪化すらしている。ただ、このような問題について寿岳が指摘をしないのはなぜなのであろうか<sup>3</sup>。しかし、この批判は、もはや16年後に出版され

<sup>3</sup> 社会問題へ高い意識をもつ寿岳ではあるが、本書を読んだ1968年段階での社会問題への関心の希薄さの例は、小堀も指摘する多くの数学者を育てたフランスのポリ・テクニク(例えば、高木の『近世数学史談』<「10 パリ工芸学校」、「12 工芸学校の数学者」>を参照)の以下の小堀の記述へも何ら注目していないことにも見られる。「卒業生を『ポリテクニシアン』・・・といて、たがいに団結している。うらやましいことである。わが国の戦前の『防衛大学校』も、こんなふうになってほしい、と念願しているのは、私だけの感傷だろうか・・・」(新潮選書版、42頁、ちくま学芸文庫、43頁)。防衛大学校は1952年に創立され(保安庁附属機関として保安大学校)、1954年に現校名になった。教育課程としては、学校教育法の大学

た『物語 数学史』には、見当たらない。改善されたと小堀は考えたのであろうか。

小堀によれば「デカルトによって口火を切られた 17 世紀の新体制は、ニュートンによって、最高峰にまで、高められ … 18 世紀にあたためられた … が、飛躍的な発展は見られなかった。そして 19 世紀になるととたんに『すべてのものを、根底にまで掘りさげて検討する』という精神が生まれた。… [それは]『不安定な概念』から出発することを、避け〔るために〕<sup>4</sup>… いままでの、直感に依存していた概念を徹底的に分析し … 『直感』や『経験』から独立した数学が樹立された … これによって、数学は飛躍し、20 世紀への大きな遺産となつた (新潮選書版「あとがき」)。

この数学の歴史観は、『物語 数学史』でも適用されている。その「まえがき」で数学史を二つに分ける、「どのような『数学』が創りさされたかを、細大漏らさず、余すところなく記述したもの」と「数学を飛躍させた思想を取り上げたもの」であるが、「現実に現代の数学を発展させるために活躍している人たちは、見向きもしないのが事情である」と数学者がその歴史つまり数学史を無視していることに懸念を表明している<sup>5</sup>。ただ、その記

デカルト (1596-1650)



出典：中村幸四郎『近世数学の歴史—微積分の形成をめぐる—』日本評論社、43 頁

の学部に対応する課程 (修業年限 4 年の「本科」) と、大学院相当の「理工学研究科」「総合安全保障研究科」の 3 科が設置。令和 5 年度入校の募集人員人文・社会科学専攻 90 名、理工学専攻 340 名、専攻区別のない 50 名の合計 480 名と、ポリ・テクニクと同様、理系大学の要素が強い。戦前の陸・海と個別に設置されていた士官学校の反省から、陸海空の幹部自衛官養成機関である。本校は、本来では学位が授与されない「大学校」であるが、1991 年から学位授与機構 (現・大学改革支援・学位授与機構) から学位が授与されるようになった。この 1991 年に「大学 (短期大学を除く) 以外で学位を授与する国内唯一の機関として「学位授与機構」が設置されたが、偶然の一致であろうか。

<sup>4</sup> その流れにあつて K. ゲーデルはその著「不完全定理」(1931) 年によって「概念実在論的で同時に構成主義的な数学的世界像に裏打ちされており、今世紀初頭のナイーブな論理実在論 (論理主義)、概念論 (直感主義)、唯名論 (形式主義) の対立を超えた新しい数学認識の視野を目指す」すものを提示した (『岩波哲学・思想事典』1998、437 頁)。ただし、小堀はこれについて言及していない。

<sup>5</sup> 微積分学の priority (優先権) についてニュートンと争ったライプニッツは以下のように書き、数学史の研究上の重要性を指摘している。「新しい諸発見、特にそれが偶然の結果ではなくて、深い考察の力によって得られたものである場合、これら諸発見の真の起源を知ることは、もってとも有益なことである。それは歴史の研究がある人にはそれは自分の分け前を与え、それは他の人をこれに類する収穫に導くということだけに止まらず、範例によってその研究方法に精通することによって、発見の技法を豊にすることに係わっている」(ライプニッツ「微分算の歴史と起源」<中村幸四郎『近世数学の歴史—微積分学の形成を巡って—』日本評論社、1980、iii 頁>)。この中村は関西学院大学理学部に在籍 (1961-70<『関西学院大学理学部—50 年のあゆみ…』2012、104 頁>) していた。上記「筆者紹介」で「1926 年 東京大学理学部数学科卒業」、専攻を「数学基礎論、数学史」で「位相幾何学」の専門書を出版し、『ユークリッド原論—縮刷版—』(1996) を共訳し、『数学史』(小学校・中学校 算数科教材研究叢書、1962) を出版している。

なお、中村は下村の『科学史の哲学』(1941)での「科学の歴史を出来上がった科学を前提にしてはな

述は「できるだけたくさんの人・・・に読んでもらいたいと念じて」「物語」と題したという。

その構成は、『大数学者』で扱った数学者以前の「数学の夜明け」（ピュタゴラスなど）に始まり、「ギリシアの数学—アテナイ時代」（アリストテレスなど）・「ギリシアの数学—アレクサンドレイア時代」（アルキメデス、フェルマなど）、「新しい数学への道すがら」（零の誕生、二次方程式の解法など）、「デカルトとその時代」、「ニュートンからオイラーまで」、「ナポレオンをめぐる数学者たち」（ラプラスとラグランジュなど）を扱い、「現代の数学の黎明」で、ガウス、コーシー、アーベル、リーマンが扱われ、「現代の数学」でヴァイエルシュトラス、リーマンなどが扱われ、最後に「日本の数学」<sup>6</sup>が中国からの数学の伝来から関孝和、そして最後に高木貞治扱っている。このように「直感」や「経験」から次第にそれらから独立した数学の発展を明らかにした。

このように2著を見てくると、執筆・出版は『大数学者』『物語 数学史』の順であるが、読者は『物語 数学史』を最初に読み、次に『大数学者』を読むことによって小堀数学史観をよりよく理解できるであろう。

寿岳は本書『大数学者』新潮版の読後感として「文学者の感覚から言ふと、biographerとしての著者の力量的限界があるやに思ふ」と批判している。ただ、本書の成り立ちが『月刊 数学』という「数学の知識を期待出来ない」「数学者でない青年」を読者に対象にしていることを考えると「著者の力量的限界」をこの本だけ読んで指摘するのは、専門家の素人に対する無い物ねだりであろう。というのは、文学者の伝記研究は長い研究蓄積があるものの、本書で扱っている著名な数学者ですら、その伝記研究の蓄積はこの時代にあっては少ないのが現状であったといえる。それを示すがその「文献」

#### 関孝和(?-1708)

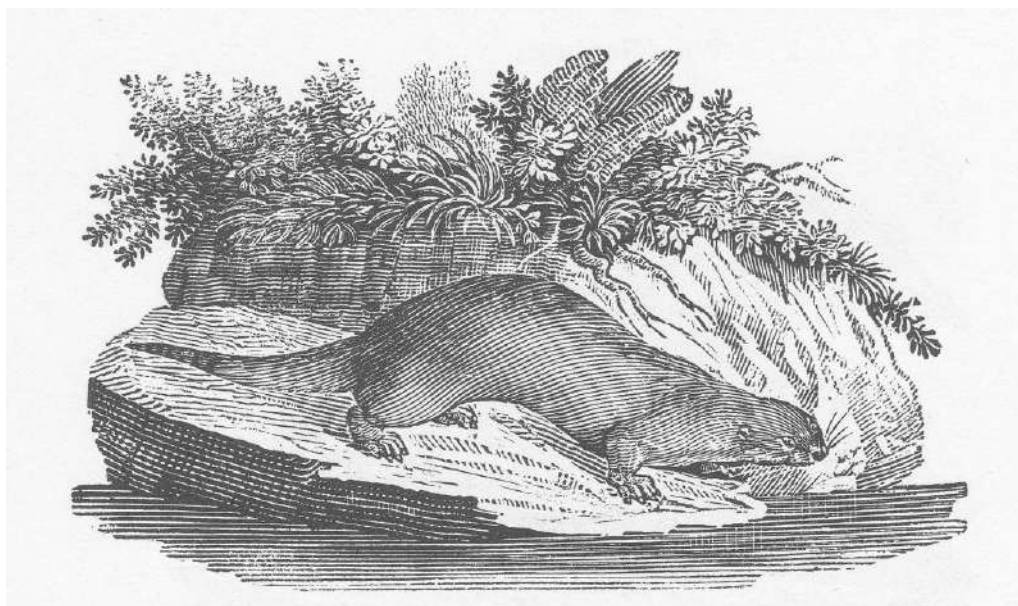


出典：「江戸の数学 第1部 和算の歴史、第2章 関孝和」国立国会図書館、関孝和財団法人高樹会所蔵・射水市新湊博物館保管

く、それが作られていく過程、すなわち『科学への歴史』とする」立場からおおきく影響を受けている（中根美知代「戦後の日本における数学史の形成と数学者たち」科学研究費助成事業基礎研究（C）（課題番号24501251）成果報告書）。このように考えると戦前の小堀の仕事と戦後の中村の仕事に影響を与えた人物の一人が下村寅太郎である。なお、中根は「小堀は意欲的に数学史にかかわった数学者の一人ではあるし、原典も読んではいるが、彼の著作は『数学史の研究スタイルをとっているとは言い難い』」が、中村はあくまでも「原典主義」を貫いているという（9、11頁）。なお、英語の science には数学を含まないが、フランス語の science、ドイツ語の Naturwissenschaft には数学が含まれている（中根前掲論文「欧米の数学事情」198頁）。

<sup>6</sup> この「日本の数学」の最後で高木貞治が師事した「ドイツのヒルベルトは、1900年にパリで開かれた国際数学会議において23の問題・・・を数学界へ提示した。高木貞治は1920年に、これの第9問題を（「類体論」を用いて）解決した。『山猿』ぐらいにしか考えられていなかった『日本人』がやったので・・・いっそうに驚嘆した・・・ヨーロッパ数学を学んでから半世紀もたたないうちに、日本は世界最高の数学者をもち、数学界における日本地位は最高のものとなった」（320頁）。

紹介で、2巻本では6名合わせても12点が紹介されているにすぎず、「その後に集めた資料」によって「すっかり書きかえること」が出来たこの新潮選書版でも、23点しか挙げられていないからである。もっとも、例えば、アーベルについて、2巻本では、本人の *Mémorial* (1902)が参照されているが、新潮選書版では、加えて *Œuvres complètes* (1902)が挙げられているなど、点数だけでなくより詳細な文献が参照されている。 (井上琢智)



'The Otter' かわうそ

Thomas Bewick, *The Figures of Bewick's Quadrupeds*.

(Second edition. Newcastle: Edward Walker, 1824)

1948（昭和23）年4月9日

[208] William Blades, *The Enemies of Books*, London: E. Stock, 1896. pp. 151. <sup>1</sup>

四月十日、朝日出版局で「書物の敵」の訳をするので通読。前に庄司浅水の同題の書物をよんだがそれは全く杜撰な翻訳にすぎぬ。本書中至言を左に。

The surest way to preserve your books in health is to treat them as you would your children, who are sure to sicken if confined in an atmosphere which is impure, too hot, too cold, too damp, or too dry. It is just the same with the progeny of literature.

### 【解題】

寿岳にとって本書『書物の敵』は、書誌学と書物を語るうえで欠かすことのできない一冊である。本書の著者ウィリアム・ブレイズ（1824-90）は、父が経営する印刷会社の徒弟となり、のちにその共同経営者となった。産業革命を背景として、印刷工場においても手押し印刷機から蒸気機関へと機械化が進むなかで、ブレイズは印刷の歴史に関心を深めるようになる。英国初の活版印刷業者ウィリアム・キャクストン（1415/1422-92）による500あまりの刊本と活字を、ブレイズは印刷工としての経験によって徹底的に観察し、印刷本を科学的な方法により分析する「書誌学」の確立に貢献した<sup>2</sup>。寿岳は1931年1月30日に「The Bibliographical Society（英国書誌学会）」から「スエズ以東、ただ一人の個人正会員」として入会許可書を得るが、この「英国書誌学会」こそ、ブレイズが設立に携わった「世界最初の書誌学会」であった。ブレイズは1892年に「英国書誌学会」がロンドンに設立される直前の1890年にこの世を去った<sup>3</sup>。

「朝日出版局で『書物の敵』の訳をするので通読」とは、1948年の2月から9月まで朝日新聞社の大阪出版研究室において毎月一回おこなわれた勉強会のことである。戦後もない当時、「いま、日本の出版関係者が手に入れることのできる貧弱な材料でも、書物への徹底した理解と深い愛情があれば、もっと書物らしい書物を造り出せるのではあるまいか？」と、かねがね出版事業に並々ならぬ関心を寄せてきた有志が集い、会に招かれた寿岳

---

<sup>1</sup> 初版は William Blades, *The Enemies of Books* (London: Trübner, 1880).xiii, 110 p., [8] p. of plates (some fold.): ill. ; 21 cm である。異版として 1881 (Trübner), 1896 (E. Stock), 1902 (E. Stock)がある。なお寿岳が用いた 1896 年版は前書 8 頁、巻頭図版 1、図版 8 を含む。1998 年にヴァージニア大学出版局からデータ化され、2015 年にケンブリッジ出版局から復刊されている。日本語訳に、高橋勇訳『書物の敵』（八坂書房、2004 年）がある。

<sup>2</sup> ブレイズによる主要な刊行本として、William Blades, *The Biography and Typography of William Caxton, England's First Printer: With Evidence of his Typographical Connection with Colard Mansion, the Printer at Bruges* (London: J. Lilly), 2 vols. (『ウィリアム・カクストンの生涯と字体』)、William Blades, *Shakspeare and Typography; Being an Attempt to Show Shakspeare's Personal Connection with, and Technical Knowledge of, the Art of Printing. Also, Remarks upon Some Common Typographical Errors, with Especial Reference to the Text of Shakspeare* (London: Trübner, 1872 (『シェイクスピアと印刷字体』)) がある。

<sup>3</sup> 高宮利行「書誌学者ウィリアムブレイズと『書物の敵』」『書物の敵』（タングラム、1989 年）、p. 191.



が講じた内容はのちに『書物の世界』(朝日新聞社、1949年)として刊行された。そこで「朝日出版局での勉強会」における寿岳の講義を聴講するつもりで「書物の敵」の一章を具体的にみてみよう。

寿岳は、書物のことを書いたかすかすの西洋の文献のなかでも、古典とされる二つが『フィロビロン(愛書経)』(Richard de Bury, *The Philobiblon*, 1345.) と『書物の敵』であるとした。イギリスの高僧リチャード・ド・ベリーが著わした『フィロビロン』について寿岳は、「この本を読むと、貴重な文献を蒐集しまた保存するために、心ある人々がどれほど苦心したか、また書物に冷淡な人々の蒙をひらくためには、どんな処置を講じねばならなかったか、がよくわかる。」という。著者のリチャードが書物への烈しい情熱と深い愛情を寄せた『フィロビロン』に描いた「書物の敵」を、寿岳はブレイズの『書物の敵』と並置してこう紹介する。

その「敵」とは「僧院の中に入りこみ、書物を目のかたきにする女性」である。寿岳は「あえて僧侶の妻でなくとも、この箇所に抗議を申しこむ女性が多かったら、幸いなるかなである。」と前置きをしたうえで、リチャードの言葉を引用する。「とある片隅に、死んだ蜘蛛の巣に私たちが守られているところを見つけ、柳眉をさか立て、毒舌をほしいままにして私たちがをのしり、家具調度のうちで無くてよいものは、ただこれだけだといいつのり、こんな無用の長物を家に置こうより、かえられるものならいっそいまずぐ金にかえて、あでやかな帽子や、紗や絹や濃染〔コゾメ〕の紫の衣や、また、あなたによくあう法服や毛皮や、羊毛や亜麻を買いましょうよ、と僧の心をそそのかす。<sup>4</sup>」このような「僧侶の妻」を「書物の敵」とするリチャードの言葉に抗議を申しこむ女性が多ければ幸い、という寿岳自身の妻静子が読書家であり、ともに読み語らうことができことは寿岳の読書生活にとって幸せであった。

続けて寿岳は、ブレイズの本書『書物の敵』をとりあげた。内容をみてみよう。ブレイズが挙げる「書物の敵」(①Fire. 火、②Water. 水、③Gas and Heat. ガスと熱、④Dust and Neglect. 塵となおざり、⑤Ignorance and Bigotry. 無知と頑冥、⑥The Bookworm. 紙魚、⑦Other Vermin. その他の害虫、⑧Bookbinders. 製本師、⑨Collectors. 蒐集家、⑩Servants and Children. 召使いと子供たち)を寿岳は自身の体験と読書から得た知見をもとに巧みに紹介する。「火」においては、『筆椀(ふでのすさび)』に記された、応仁の乱の戦火により灰と化した一条兼良の桃華坊文庫について、紛失した書物の数を本居宣長が著わした『玉勝間』の記述から三万五千冊と割り出し、戦火を被った書物の歴史が日本にも存在する事実を示した<sup>5</sup>。「埃」については、岩波文庫の「天小口」が用紙が切りそろえられず耳付きであるために、埃の侵入に困らされている日常の例をあげ、愛書家のあいだで耳付きの書物がもて

---

<sup>4</sup> 寿岳文章『書物の世界 定版』(出版ニュース社、1973年)、p 86.

<sup>5</sup> 前掲書、pp. 101-102.

はやされることに疑問を呈した<sup>6</sup>。「紙魚」については、『源氏物語』に「しみという蟲のすみかになりて」という記述がすでにあることに触れ、「しみ」の正体とされる「シンバムシ」という名称については、「死の時計」とすべきところを「死の番」とした「英語の death-watch の誤訳」であると指摘する<sup>7</sup>。

寿岳の書物に対する科学的姿勢は、「誤訳」を指摘する当日記からもみてとれる。寿岳が指摘する、本書と同題の『書物の敵』を著わした書誌学研究家の庄司浅水（しょうじ せんすい 1903-1991）は、『書物と装釘』（1930年）、『書物展望』（1931年）、『書物趣味』（1932年）など書物雑誌の創刊にも携わった人物であるが、1929年には寿岳の『ヰルヤム・ブレイク書誌』と同様に伊藤長蔵が設立した出版社「ぐろりあ そさえて」から『書籍装釘の歴史と実際』を刊行し、それまで日本ではほとんど紹介されなかった洋書の造本技術を伝えた。寿岳と庄司の両者は、当時、英国私版家の歴訪から帰国したばかりの伊藤長蔵との交流によって「書誌学」に開眼した。庄司は自著『書物の敵』において、庄司が所有するブレイズ『書物の敵』初版本（William Blades, *The Enemies of Books*, London: Trübner, 1880.）は「伊藤長蔵から署名入りで贈られたもの」であること<sup>8</sup>、庄司の『書物の敵』は、「[伊藤から贈られたブレイズの]同書を基礎とし、これに少しく私見を加え、適宜加除した」ものであることを明記しているとおり<sup>9</sup>、原文に忠実な翻訳書ではなかった。庄司の回想によると、当時神戸に「ぐろりあ そさえて」の事務所をおいていた伊藤を訪ねた庄司は、神戸御影にある伊藤氏宅から二人で京都の新村出博士を訪ねたのち、新村と伊藤と連れ立って南禅寺僊壺庵の寿岳を訪ねた。当時寿岳は、京都帝国大学の図書館長をつとめていた新村の紹介によって「ぐろりあ そさえて」から『ヰルヤム・ブレイク書誌』を刊行する、その印刷進行中のことだった。「寿岳氏も乳呑児の章子さんをあやしておられたしづ夫人も若々しかった。」と庄司は回想する<sup>10</sup>。庄司はこの「関西訪書旅行」の記念として、ブレイズの『書物の敵』初版本を伊藤の署名入りで贈られたのだった<sup>11</sup>。伊藤が庄司に贈った同書は、庄司が『書籍装釘の歴史と実際』の巻末に掲載した 270 点あまりの外国文献のなかにもみられるが、寿岳は本書についても誤訳を指摘しており<sup>12</sup>、書物における鉄則である内容の正確性に対して妥協を許さなかった。

また、「挿絵」においても寿岳は科学的姿勢を重要視した。William Blades, *The Enemies*

---

<sup>6</sup> 前掲書、pp. 112-113.

<sup>7</sup> 前掲書、pp. 116-117.

<sup>8</sup> 庄司浅水「学術文庫版あとがき」『書物の敵』（講談社学術文庫 1990年）、p. 196-198.

<sup>9</sup> 庄司浅水「はしがき」『書物の敵』前掲書、p. 15.

<sup>10</sup> 庄司浅水「あのころの事—四十五年前の関西訪書の旅—」『美しい本の話』（南柯書局、1983年）pp. 137-140. 初出は『大阪古書月報』1973年1月号。

<sup>11</sup> 前掲書において庄司は、伊藤から贈られた「初版本」の刊行年を 1881年としており、脚注 7「あとがき」においては 1880年としているが、これらが異版本であるかどうかについては不明である。

<sup>12</sup> 寿岳文章「明日の書物 庄司浅水氏の近業『書物装釘の歴史と実際』を読む」『東京日日新聞』1972号（1929年9月23日）、第4面



of Book は、1880年に初版(Trübner & Co.)が出版されたのち、1887年、1888年に改訂増補版(Elliot Stock)が、1896年に新装版が刊行された。寿岳が通読して『瀨祭記』に記した本書は、ブレイズの没後6年経って刊行された1896年版であるが、寿岳は本書についてこう述べる。「ブレイズ自身に責任はないが、必要以上に多い小口の余白、だらしのない行間、挿絵の拙劣、ひどい綴じなど、十九世紀末の造書工芸の低下を遺憾なく示し、どうひいきめに見ても、美しい書物としての及第点はつけられない。<sup>13</sup>」このように寿岳が指摘する『書物の敵』の「挿絵」は、版によって特徴が変遷するので具体的にみてみよう<sup>14</sup>。

1880年の初版ではわずか7枚の図版ながら、一枚一枚にブレイズ自身による技法の解説がつけられた厳選されたもので、1888年版では、木版画全盛時代であったヴィクトリア朝の挿絵として典型的なものである<sup>15</sup>。一方、寿岳がとりあげた1896年版の本書では、写真製版による多くの図版が挿入されているが、そのほとんどは、アマチュア画家によって本文の一場面が描かれたものである。例えば初版にみられる挿図《紙魚に喰われた“キャクストン版”の2葉》は、ウッドバリー写真製版会社の制作による写真であるが<sup>16</sup>、このような初版にみられる書誌学者ブレイズ自身の科学的姿勢は、1896年版には生かされていない。

寿岳が「口絵」の役割について、「題扉の内容と最も緊密なつながりをもつ肖像なり事物なりが、ここに選ばれ、読者は本文を読まぬさきから、早くも口絵の絵画と題扉の文字をあわせ見ることにより、本文に親しみと興味とを感じとるのである。<sup>17</sup>」と述べているように、「口絵」や「挿図」が書物を構成する要素としての役割を充分にはたすためには、雰囲気や飾りとしてではなく、本文との緊密なつながりにおいて厳選されたものでなくてはならない。寿岳がとりあげた1896年版『書物の敵』における「挿絵」に対する不満はこの点にあった。

さいごに「本書中至言」として原文から引いたブレイズの一文について、寿岳は『書物の世界』において次のように翻訳して示した。「諸君の書物を健康状態に保つ最も確実な方法は、諸君の大切なまな児を扱うのと同じ呼吸で書物をあつかうことである。よごれていたり、あまり暑すぎたり、寒すぎたり、しめりすぎたり、かわきすぎたりしている空気の中へ、愛児を閉じこめておけば、きっと病気になるだろう。文学のまな児の書物の場合も、全くこれに同じ。<sup>18</sup>」書物にはわが子をおもう愛情を持って接するべし。寿岳は「書物に対する礼儀」として、私蔵の書物にでさえ書き込むようなことは好まなかった。(長野裕子)

---

<sup>13</sup> 『書物の世界 定版』再掲、p. 97.

<sup>14</sup> 岡部昌幸「描かれた「書物の敵」－挿絵をめぐる－」『書物の敵』(タングラム、1989年)を参照した。

<sup>15</sup> 前掲書、pp. 201-202.

<sup>16</sup> 前掲書、p. 199.

<sup>17</sup> 『書物の世界 定版』再掲、p. 147.

<sup>18</sup> 前掲書、p. 112.



寿岳は、ウィリアム・ブレイズ『書物の敵』を紹介した自著『書物の世界』（朝日出版社、1949年、p.138.）において左の図版を挿図「書物の敵 ブレイズの著書に拠る」として使用している。これは寿岳が本日記に記した本書 E. Stock 刊 1896 年版の挿図である。

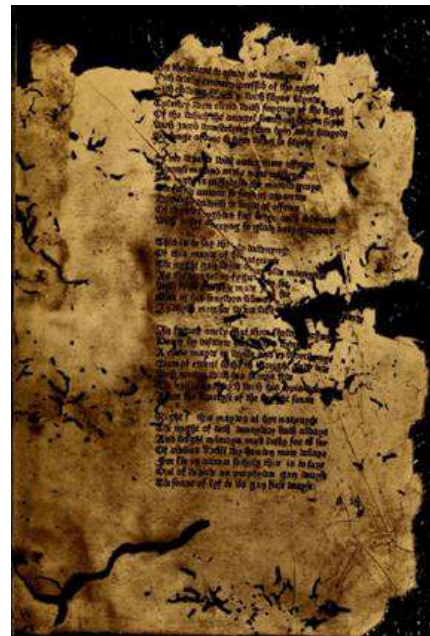
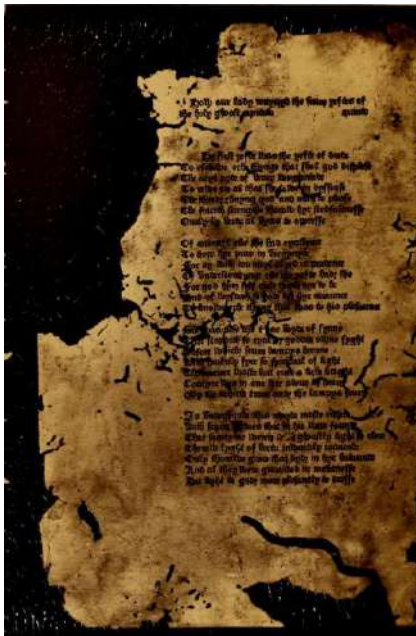


ウィリアム・ブレイズ『書物の敵』1896年版 p.43. 挿図  
「書物の余白ページを切り取り・・・メモ用紙にする」

William Blades 1824-90  
(出典：ウィキペディア)

William Blades, *The Enemies of Books* (London: E. Stock, 1896), p. 43.

“WE CUT AWAY THE BLANK MARGINS...FOR WRITING UPON” (出典：Internet Archive)



ウィリアム・ブレイズ『書物の敵』1880年版挿図「紙魚に喰われた『キャクストン版』の2葉」

William Blades, *The Enemies of Books* (London: Trübner, 1880), p. 57. pl. v.

Two leaves of a “Caxtoin” destroyed by bookworms. (出典：Internet Archive)

1952 (昭和 37) 年 11 月 25 日

[293] W.S.モーム著 西川正身訳『読書案内』岩波新書 昭和 27 年 172 頁

“Books & You”の翻訳。もとサタデー・イヴニング・ポストに連載されしものを云ふ。実に面白し。譯文も甚だ明快である。「ヨーロッパ文学」の概況としては最も優秀なものか。大体十八世紀以后に限つたのも賢明。それに文学史家の見方に同調せず、あくまでも作家の眼で見てみて、爽快である。

アメリカ文学はヨーロッパ文学と同等に取り扱ふわけにはゆかぬとの修行において、言はゞ座を何段か下り、さてそれから甚だ痛快な論評を加えてみる。ことにエマスンと青い目の金持の女との結びつきは面白い。エマスンの愛読者に多い一つのタイプを痛快にえぐつてみる。ジゴロまで出すのは少々薬が効きすぎてみようが。

### 【解題】

寿岳が『癩祭記』(昭和 25 年 7 月 29 日 [260]) に記した田中菊雄『現代読書法』(柘谷書院、1942 年)をはじめ、教養としての読書入門書がさまざま刊行されたなかで、「楽しみとしての読書」をすすめるモームの本書は当時としては画期的な読書論であった。

本書は、小説『月と六ペンス』で知られるイギリスの作家、サマセット・モーム (1874-1965) が、アメリカの中間層の間で最も広く流通した週刊誌「サタデー・イヴニング・ポスト」に連載した読書案内を、単行本として刊行した *Book and You* (1940 年)の翻訳書である。イギリス文学、ヨーロッパ文学、アメリカ文学から 40 名あまりの作家と作品を、モーム自身の読書法、読書体験から語った一般読者向けの世界文学入門書となっている。

「わたくしがこの文章を書いたのは、批評家としてでもなければ、また職業作家としてでさえない。そうではなくて、人間というものにある程度の関心をもつ、平凡な世間人のひとりとして、わたくしは書いたのである。」「ある書物が楽しく読める条件として、その書物はあなたにたいして、なんらかの直接的な意味をもっておかねばならない。」「わたくしのすいせんする書物は、概していって、普通の興味をもつ者であれば、かならずやその人の心に訴えるところがあるであろうと、わたくしは固く信ずる。どの書物もわたくしたちに共通な人間性をもっているからである。」とモームはいう<sup>1</sup>。

寿岳はモームの読書案内について、「毒にも薬にもならぬ読書案内などを読むより、一くせも二くせもある作家や思想家から自身の読書の体験を聞くほうが、はるかにためになる。題は同じ読書案内でも、モームのそれが非常におもしろいのは、そこにこの作家の冷徹な目がひらめき、体臭が感じられ、いかにもモームらしい偏見があるからだ。<sup>2</sup>」といい、作家の視点で語られる「爽快な」モームの読書案内を楽しんだ。寿岳が「甚だ痛快」と記した、

<sup>1</sup> W.S.モーム『読書案内』西川正身訳 (岩波書店、1952 年)、pp. 3-5.

<sup>2</sup> 寿岳文章「読書週間の課題」『本の話』(白風社、1964 年)、p. 219.

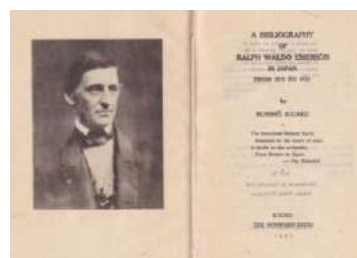
本書のエマソンのくだりをみてみよう。

「わたくしがはじめてエマソンをよむようになったのは、大分昔のこと、コモ湖のかたわられ知りあいになったある金髪の婦人にすすめられてであった。わたくしたちがいっしょに遊山に出かけるときには、彼女はいつも忘れずにエマソンのエッセイ集を持って行くのだったが、それにはとくにつよく彼女の心をひいた箇所に青鉛筆で（というのは、おそらく彼女の青い目の色をひきたたせるためだろうが）アンダーラインがぐいぐいひっばってあった。彼女は、自分にとってエマソンは大きな慰めで、苦しいことや困ったことがあると、いつもエッセイ集を読むことにしているが、そのたびに何かした自分の役に立つものが見つかるといっていた。それから数年たち、今度はハワイでふたたび出会ったところ、…その主人というのが貴族に列せられ、いまや彼女はれっきとした貴婦人であった。…二十五万ドルは出したにちがいない高価な真珠の首飾りをつけていたが、足には靴も靴下もはいていなかった。「ごらんの通り、ここでは簡易生活をやっておりますの」と、彼女は自分の素足を指さしていった。…わたくしは彼女に、相変わらずエマソンをおよみですか、とたずねた。すると彼女はテーブルの上から、一冊の書物をひつつかむようにとりあげ、…開け放った窓の向うに見える青々とした海のほうに向かって、宝石で飾った一方の手をふってみせ、もしもエマソンをよまなかったならば、太平洋の持つ精神的な意味をほんとうに理解することは、とうていできなかつたでしょうといった。」

寿岳いわく「エマソンの愛読者に多い一つのタイプ」であるこの「金持の彼女」は、世を去るまでエマソンの弟子でありつづけた。「ジゴロまで出すのは少々薬が効きすぎて」いるくだりとはこうである。

「その遺産のうち、ヨットと蔵書とは、遺言によって、晩年の彼女にとっていまひとつの慰めであったジゴロ（男妾のこと）のものとなった。だが、その男は、ヨットを乗りまわすだけの金をのこしてもらえなかったもので、それを売りとばしてしまった。蔵書のほうは、古本屋に売ってみたところで大して金にはならないのだから、おそらく売らなかったことと思う。もしそうだったら、あのエマソンのエッセイ集が、女をなくした彼にとって、ひとつの慰めとなったことを、わたくしとしては祈るばかりである。だが、わたくし自身は、率直に言って、エマソンが慰めとなったことは一度としてない。」

十代の頃からエマソンの詩句に親しみ、向日庵本『エマソン書誌』を刊行した寿岳にとって、モームのエマソン案内は「毒にも薬にもならぬ読書案内」を読むよりも面白く「痛快」であった。「わが国の同種の本がつまらないのは、読みもしないで、ましてや著者や訳者に十分な検討を加えもしないで、著者がただ機械的に書物の名をならべているにすぎないからだ。たまたまその読書案内を出版した本屋に、外国文学の廉価版でもあると、名代の悪訳や誤訳にもかかわらず、ただ出版社へのおもねりから、その版をあげているような場合をよく見かける。こんな不見識な



『日本におけるエマソン書誌』  
(向日庵 1947年) より

著者には、読書案内などを書く資格は全くない。」と寿岳はいう。読書による自己形成の大きな出発点は、あたらずさわらずのことを言う「良識」の壁をうち破り、「思い切って独断や偏見をうち出してみることにある、と読書体験の意義を語る<sup>3</sup>。

本書に記されたモームの「読書法」をみると、まず「朝、仕事をはじめる前」には「科学書なり哲学書なり、新鮮で注意深い頭脳を必要とする書物をしばらくよむ」。その後昼下がりでだろうか、「仕事がおわり気持はくつろぐがはげしい努力を必要とする精神活動はやりたくない気分になっているとき」には「歴史、随筆、批評ないしは伝記をよむ」。夕方になると小説をよみ、気が向けばいつでも読めるように詩集を一冊手近なところに置いておく。そして夜、枕元に用意しておくのは「どこから読みはじめどの一節のおわりでやめようとも少しも心をかき乱されることのない書物」である<sup>4</sup>。このような一日の読書からは「よみ出してみたところおもしろくないようなら途中でやめでもよい」、「必ずしも一冊ずつ片づけて行かねばならぬということもない」というモームの軽快な読書習慣がみてとれる。読書は自分が楽しむためにある、その本に価値があるかどうかを決めるのは他者ではなく自分自身である、というモームの読書哲学は、読書の意味を考えるうえで重要であろう。

寿岳はほかに「ケーベル博士の随想集に収められた読書論」を愛読した。「博士の暖かい人間味と、一徹さと、哲学者としての立場が、まことに正直に語られていて、おそらくは最上の読書案内の一つであろう。<sup>5</sup>」と寿岳はいう。1893年から1914年まで東京帝国大学に在職してドイツ哲学を講じた「ケーベル博士」は、学生たちから敬慕をあつめた名教師であった。読書についてケーベルは、エッケルマンが著わした『ゲーテとの対話』をひいて「されば我らはただ、われらの驚嘆するもののみを読むべきはずなのである！」「ゲーテは、ひとり真実の驚嘆に値するもののみ、即ち真に価値多きもの、美しきものおよび偉大なるものの驚嘆されんことを要求している<sup>6</sup>」と述べ、日本の学生が単に試験を目的として「あちこち拾い読みする者」にならぬよう、教師は読書のよき忠言者となるべきであると説いた<sup>7</sup>。

寿岳は「読書日記」について「それは書物を読む場合に、著者と読者とを対決させてくれます。私が『読書日記』を始めた動機は、人から本を貰って感想を書きおくる時、著者にはそうきつい言葉で言えない場合があるので、あからさまな感想を非公開にのこしておきたかったからです。」と語る<sup>8</sup>。こうした寿岳の「自己本位の読書」は、「読書の習慣を身につけることは、人生のほとんどすべての不幸からあなたを守る避難所ができることである。」というモームの読書哲学や、「我らはただ、われらの驚嘆するもののみを読むべきである」と説いたケーベル博士の読書論にもつながるものである。 (長野裕子)

<sup>3</sup> 寿岳「読書週間の課題」前掲書、p. 219.

<sup>4</sup> W.S.モーム『読書案内』再掲、pp. 31-32.

<sup>5</sup> 寿岳「読書週間の課題」再掲、p. 219.

<sup>6</sup> 『ケーベル博士随想集』久保勉訳、安倍能成編（岩波書店、1957年改版）、pp. 142-143.

<sup>7</sup> 前掲書、p. 90.

<sup>8</sup> 寿岳文章[ほか対談]『読書の伴侶』新版（国際日本研究所、1963年）、pp. 58-59.



1963 (昭和 38) 年 7 月 31 日

[366] *Father and Son*. By Edmund Gosse (Penguin Books, 700)<sup>(1)</sup>

Gosse の著作のうちいつまでも読まれるものは恐らくこれだけかも知れない<sup>(2)</sup>。自伝はすべて興味の多いものだが<sup>(3)</sup>、この作品のように、極めて特異な環境に育ち、単調な (外面的には) 生活記録でしかないのに、最後まで読み了らせるのは問題の深刻性によるのであらう<sup>(4)</sup>。

それにしても十九世紀のイギリスの一部にこのような観念を持つ父と母が厳存したのは驚くに足る。しかも父は科学者である<sup>(5)</sup>。想像力や神秘を解する情念の欠如がこの欠点がこの悲劇を生んだ<sup>(6)</sup>。Shakespeare を一行も読まないのを誇りとする人物が Gosse の父親であったとは!<sup>(7)</sup>

現代の狂信的な新興宗教にしても、この書物の教訓は適用する<sup>(8)</sup>。p. 246 から p. 247 にわたる paragraph は動かぬところ<sup>(9)</sup>。

#### 【註釈】



父と子の肖像写真

(1) 書誌情報を正確に書けば、Edmund Gosse, *Father and Son: A Study of Two Temperaments* (London: Penguin Books, 1949), 249 pp. となる。本書は甲南女子大学図書館、寿岳文章文庫に収蔵されている。初版はウィリアム・ハイネマン社から 1907 年に匿名で出版され、以後、版が絶えることはなく、現在でも様々な版で刊行されている古典である。ペンギン・ブックスには 1949 年に入れられ、以後 1970 年、1972 年、1976 年、1979 年 (2 回)、1986 年と毎年のように版を重ねる。オックスフォード・ワールド・クラシックスはミカエル・ニュートン編により 2004 年から出ている。寿岳が読んだ版はピーター・アブスが編纂したペンギン版 (1949 年) である。翻訳は川西進『父と子』(ミネルヴァ書房、2008

年) があるが、解釈が多少異なるゆえここでは拙訳を用いる。

(2) エドモンド・ゴス (1849-1928) は伝記、詩集、戯曲、小説、文学史などあらゆる分野に筆をそめた。だが、今日では小説的な伝記『父と息子』のみがゴスの文学的生命をつないでいる。アン・スウェイトの『エドモンド・ゴス—ある文学風景 1849-1928 年』(1984) は標準的な伝記であるが、本書で文名が永続すると述べている。またハロルド・ニコルソンは名著『英国伝記の発達』(1928)のなかで『父と子』を「みごとな選択力により科学的興味と文学形式を最大限に結びつけた傑作」と伝記の革新をうながした作品であると評している。

(3) 自伝について、寿岳は「邪心のない年若い時代を回顧した自叙伝」(『自然・文学・人間』) に惹かれると述べているが、それは人生の岐路に直面したとき、多くの示唆を与えてくれるからだという。ゴスは『金枝篇』の著者である人類学者、J. G. フレイザーに対して、「お伝

えたいのですが、ハイネマン社から出版されたばかりの『父と子』という匿名の本に遭遇しましたら、著者はほかならぬ私なのです。子どもの道徳的（あるいは粗野な）考えの成長について、あえてあなたの前に置くべきようなものではございませんが、ただ価値をお認めくださればうれしいでしょう。注意深く凝視しましたが不安が横溢する本書ですが、さらなる重要な研究はあなたに委ねることに致しましょう。」と、子どもの心性の発達という作品の本質を告げている。

(4) たしかに外面的にはヴィクトリア朝後期の社会の変遷と博物学者一家の日常生活が描かれているに過ぎないが、内面の信仰という精神生活に主眼がおかれている。真実を伝えるため、作者(語り手)は『父と息子』に冠した序文のなかで、手法とテーマに関して雄弁に開陳している。「近年、小説がまことに巧妙でもっともらしく語られるようになってきている。だから、ここで、以下の物語はどの部分をとってみても、著者の厳密な注意力が及ぶかぎり、まがいもない真実そのものである、と述べておく必要があるだろう。厳格な言い方をすれば、真実でないものを出版するのは、一読しようとする読者すべてを愚弄することになる。ひとつの『真実を証明するよりどころ』として、過去のある時代の教育と宗教がどのような状態であったか、というひとつの記録として、読者諸賢に捧げようとするのが本書である。その意味で、ピューリタニズム終焉の分析記録として、この物語も意義があることを願ってやまない。/ さらに補足するならば、この物語はまた、道徳観や知性が、幼年期を過ごすうちにどのように形づくられていくか、という研究にもなっているはずである。この発展についてはかなり詳しく忠実に描かれているし、こうした観念が生じたのがいささか異常な状況のもとであったため、多少の価値があろうかと思う」(序文)と本書の真価を述べている。

第1章の冒頭は成長するにつれて父と子の間に生じてくる葛藤とその結果が描かれているが、これは本書の要約にもなっている。「本書に記されているのは、ふたつの異なる気質とも、良心とも、いやほとんど異なる時代とでもいえるものの中に生じた葛藤である。葛藤の結果残されたものは、当然ながら、破局であった。だから、ここに描かれているふたりの人間のうち、ひとりとは過去へさかのぼり、もうひとりとは未来へ進まざるをえなかったのだ。考え方が同じになることも、同じ希望を胸にいただくことも、同じ欲求に心を強くすることもなかった。それでも、少なくとも、遺されたものにとっていくらかでも慰めになっているのは、どちらも最後の瞬間まで、お互いを敬う気持ちを失わず、ともに心に悲しみを秘めながらも相手を寛大に扱っていたことだ」と、どの家庭でも遭遇する親子の摩擦があった。ただ信仰については大きな相違が存在していた。「わたしの両親はともに人生の同じような道をたどり、こと信仰心に関してはほとんど同じところへたどりついた。何とも奇妙な偶然の一致としか言いようがない。当初、母は英国国教会派、父はウェズレー教派の立場からそれぞれ出発し、どちらも他人の忠告に従ったわけでもなく、ただ聖書をいろんなふうに解釈していくうちに、プロテスタント教会のどの宗派にたいしても、まったく同じ態度をとるにいたった。すなわちそれは、世間で通用している解釈や先入観にまどわされずに神を信ずる態度である。特定の宗派と両親との考え方が一致している間は、その宗派は正しい光の中を歩ん

でいるのであるが、ひとたび両者に相違が生ずると、その宗派は、いわば太陽の黒点にあたるような闇の世界になにやら迷い込んでしまっているのだ。そうになると、父も母もその宗派に従おうとはしなくなる。いつしか父も母も、こうして宗派をひとつひとつふりいにかけていくうちに、とりわけ衝突があったわけでもないが、プロテスタント宗派の埒外に出たのであった。最後には自分たちと似た過激なカルヴァン派の人々と出会うのだが、それは両親同様、全否定主義といってもいい教団で、聖職者も、儀式や祝祭も、いかなる祭礼も否定し、何もかもなしという集団である。ただ禁欲的な魂をひきつけてやまない聖餐式と聖書釈義とが行われるのみ、であった。両親と志を同じくする人々は『同胞教会』とだけみずから名乗り、世間からは広く『プリマス同胞教会』という名称で知られるようになっていた」(第1章)とあるように、ここに本書の特異性を見出すことができよう。結婚時、父は38歳、母は42歳を越えていた。結婚した二人は新婚旅行もせず、ロンドン北東部にある花婿の母親の家で同居をはじめた。すでに父は博物誌の本を数冊著しており、母もまた作家で、宗教詩を冊子にまとめて出していたのである。



フィリップ・ゴス

(5) 「父は科学者である」という断定には保留が必要であろう。父親フリップは「観察の人」で、著名な博物学者であり、創造説を信奉していた。そうした父の眼前に「真の科学者」であるダーウィンの進化論(自然淘汰説)が提示されつつあった。「自然淘汰説には博物学者としての父は批判的であった。そしておかしなことに、父のこうした態度が子どもであった私にも計り知れない影響を及ぼしたのである。なんとも悲しい話ではあるが、自然淘汰という新しい考えを耳にした当初、父の知性にそなわっているあらゆる直感力は停止してしまったという事実をまず認めねばなるまい。だが創世記の冒頭を想起し、その力をとりもどしてしまったのである。父は博物学の大家カーペンターに相談したが、そもそもこの学者に古色蒼然とした定説を古くなったとみなして捨てよ、と要求すること自体、しょせん無理な話であった。二人ともいろいろな根拠を持ち出して、あのような自然淘汰などという恐ろしい説にはかかわることなく、種は固定されたものだという見解をしっかりと守っていき、ということで一件落着した。わたしたち一家がロンドンを離れたのがまさにこの時期なら、父が世のすぐれた科学者たちとの交流に終止符を打ったのもこの時期であった。それまではたとえごくたまの、わずかひとときのことではあっても、大英博物館や王立協会において有益至極な交際を欠かさずにつづけていた父であったというのに……。しかも次にとった行動とは、自分の船を燃やしてしまうことであった。組もうと思えば筏のひとつも組める梁や丸太までひとつ残らず燃やしてしまうという暴挙に出てしまったのだ。こんな意地を張ったおかしな行動をもって心の扉を閉ざし、二度と開くことはなかったのである」(第5章)と、進化論と対峙したときの父の学者として凋落しかない絶望的な反応が描かれている。そして以後、この「暴挙」がいかに行なわれたかが説かれてい



く。

(6) 事実を偏重した教育がヴィクトリア朝時代によく行なわれたのは、当時の教科書などをみれば一目瞭然であるが、ゴスの場合、あまりにも極端で虚構化に走りすぎているのではと思わされる。想像力の世界への近接は許されていなかった。「字が読めるようになると、やがて読書が大の楽しみになってきた。もっとも読書の範囲は狭い。それというのも、何であれ『おとぎ話の類い』はかたく禁じられていたからだ。宗教に関するものであろうが、なかろうが、とにかく架空の物語は一冊たりともわが家には持ち込めないことになっていたのだ」とあるように、想像力を駆使し空想の世界で遊ぶ子ども特有の時空はゴスには存在しなかったのである。「幼年時代にただの一度も、あの『むかし、むかし、あるところに……』ではじまるお話はしてもらえなかった。伝道師の話は聞かされても、海賊の話はしてくれなかった。ハチドリに慣れ親しんでも妖精などは耳にしたこともなく、ジャックと豆の木、ジャック、小人のルンペルシュティルツキン、そしてロビン・フッドの名前さえも知らなかった。狼には詳しいのに赤頭巾ちゃんの名前も知らない子どもなど考えられるだろうか。子どもに事実だけを認識させたいがために、ここまでして想像力を排除し、入り込む余地を与えなかった両親の方針は、わたしを『神に捧げる』という点から言っても、誤りとしかいいようがない。両親は子どもに真実には忠実であってほしいと望むあまり、その結果は過信と懐疑心の強い子どもにしか育てられなかったとっていい。幻想の不思議な柔らかい襁でやさしく包みこんでいてくれたなら、両親の守り通してきた信条にも、何ら抵抗もなく安住できただろう」(第2章)と、ゴス自身とおぼしき語り手は述懐しているが、逆に事実のみを偏重した教育が息子を呪縛していく。

こうした読書体験は異様である。「子どものころに読み残したのなら枚挙にいとまがないが、何を讀んだかを語るのはかなりむずかしい。まず博物学の本。やみくもに手を出したためか、未熟なわたしの頭ではまったく消化できなかった。旅行記は多く讀んだ。それも厳正な事実にもとづいて書かれたものがほとんどで、そのなかの一冊、南太平洋諸島発見の航海記を讀むと、おぼろげながらも頭には壮麗な光景がみなぎってくる。地理学と天文学の本のなかには、本当に夢中になれたものもあった。それにひきかえ神学の本は、きちんと理解したいと願ってはいたのに、たいていは齒がたたなかつた(あえてそう言いたい)。そのためわたしを目と舌は、中身を吸収しないで本の字面だけすべっていった。目で追い、声に出して、それもちゃんと強調すべきところは強調して讀んでいたというのに、讀めども、讀めども、ひとつの考えがかたまるとか、忘れ難い印象が残るとかいうことはなかつたのだ。例をあげればジュークスという人の著した予言書の解説本。この本こそ父母の絶賛の書だ。



『ペニー百科事典』

はやくから声に出して讀むように命じられ、言われたとおりの機械のように朗讀したが、おかげでジュークスの本はだんだん見るともいやになってきて、何が書いてあるのか大筋をつかむこともできずじまいである。その後は『ペニー百科事典』という独学用の冊子を読むのが日課となり、かなり長い間、ほとんど

この本から、ものごとを学んでいたのであるが、この大部な本についてはまた後でも触れることにしたい」(第2章)とここで言及されている『ペニー百科事典』は識字率をあげるため主に教養を求めていた労働者階級のために編纂された活字がびっしりと詰まり余白もない本であった。

(7) 事実のみを認める父親は想像の世界を拒絶した。息子の教育も事実のみを基盤としてなされた。「字が読めるようになると、やがて読書が大の楽しみになってきた。もっとも読書の範囲は狭い。それというのも、何であれ『おとぎ話の類い』はかたく禁じられていたからだ。宗教に関するものであろうが、なかろうが、とにかく架空の物語は一冊たりともわが家には持ち込めないことになっていたのだ。禁止したのは父ではなく、母のほうで、実はいまだに釈然としないものがあるのだが、母は『お話をつくること』、つまり架空の物語をつくり上げることはなんであれ罪だ、という考えを強くもっていたのだ」(第2章)とあるが、母親の制約が強かったというのは驚きである。多分に創作力をもっていただけに痛ましい。

(8) シェイクスピアを生活から拒絶していく下りも印象的である。「シェイクスピアという名前をはじめて聞かされたのも、このシェルダン・ノウルズからだ。わたしがいる方面の知識は異常に発達しているのに、別の方面ではまったくの無知なことにこの人も面食らっただろう。わたしくらい神学や地理学に詳しい子どもが、ハムレットやフォルスタッフやテンペストのプロスペロといった名前を聞かされてもまったく何のことかわからないなどというのは、信じられないことだったろう。ノウルズ氏はひとつ校長先生にたのんでみんなでシェイクスピア劇を読んでみてはどうだろう、と提案した。そしてみんなで読むには『ヴェニスの商人』が最適だと思う、と進言した。老人(シェルダン・ノウルズ氏は八十に近かったと思う)に言われるままに提案してみると、M先生はさっそくやってみようと言ってくださった(わたしがはじめて習ったこの先生に関する記憶では、ものすごく理解力があって、親しみやすく、行動力のある人だという印象があるが、それでも校長という職にそれほど向いている人だったとは思えない)。/ こうして、授業でシェイクスピアを読むことにしますと先生は全員に告げた。そして次の日の午後、さっそく『ヴェニスの商人』を読みはじめた。大版の本一冊を生徒全員でまわして朗読する。わたしはボルティアに求婚するパッサーニオの役があたった。気持ちが舞い上がってしまい声をうわずらせて読んだ。

ベルモントに、大変な遺産をもった女性がいるんだ

すばらしく器量よしときている。それどころか

美人である以上にもっといい器量を、えがたい美德を身につけているんだ。

M先生自身、かなり劇がお好きなようだった。シェイクスピアの各場面が朗読されるのを本当に楽しそうに耳を傾けていたし、どこにアクセントをおいて読めばいいかを教えてくれる様子には深い思いが込められているのがよくわかった。わたしはまさに天にも上る心地だった。ところがまだ第二幕に入ったばかりだということになぜか朗読は中止になったのである。そのときには理由はわからなかったが、今にして思えば父のさしがねであったのでは

あるまいか。シェイクスピアなど一頁たりとも読んだことはなく、劇場に足を運んだのも一度きりというのが父の自慢の種だった。シェイクスピアを読んでいることをたぶん家で話したと思うから、父は校長先生に正規の授業にもどるよう忠告したのだろう」(第9章)とあるように、父親はシェイクスピアの世界を拒絶していた。

(9) 本書の核心としてもっとも重要であると寿岳が考える一節を引用しておこう。父との別れが叙述されている一節である。'I was docile, I was plausible, I was anything but combative; if my Father could have persuaded himself to let me alone, if he could merely have been willing to leave my subterfuges and my explanations unanalysed, all would have been well. But he refused to see any difference in temperament between a lad of twenty and a sage of sixty. He had no vital sympathy for youth, which in itself had no charm for him. He had no compassion for the weaknesses of immaturity, and his one and only anxiety was to be at the end of his spiritual journey, safe with me in the house where there are many mansions. The incidents of human life upon the road to glory were less than nothing to him.' (pp. 246-47) 「わたしは柔順で弁もたつが、けっして喧嘩好きではない。もし父が息子にかまわないとする決意ができる人なら、ただ逃げ口上や弁解をあえて追及しないで、よろこんで見逃していてくれば、万事がうまくいっていただろうに……。だが二十歳の青年と、六十歳の賢人の間には気質の隔たりがあることを認めようとはしない。若年期というものに、大きな共感をもつどころか、そんな若さには魅力も何も感じないのである。未成熟ゆえの欠点に同情もおぼえない。そして父が唯一、不安を感じながらも強く願っていたのは、精神の彷徨の末、最後には息子と、いわゆる「住まいの多くある神の家」(ヨハネ伝)に無事おちつきたいということであった。神の栄光へいたる過程に起こる、人生の諸々の出来事ひとつひとつ、それはあくまで段階にすぎず、父にとっては無であり意味がないものであった。」(エピローグ)

#### 【解題】



エドマンド・ゴス

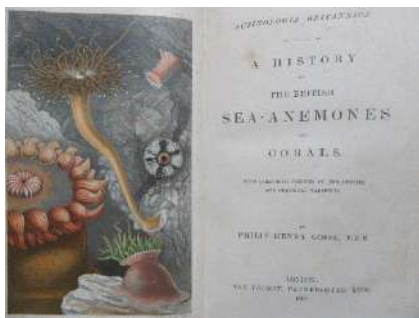
『父と息子』の読後感を的確にしたための寿岳文章は還暦を過ぎても宗教問題にたいする関心はいささかも衰えていない。ただ信仰という内面的な問題からだけではなく、父と息子という親子関係に注目しても、一考すべき課題がひそんでいる。

自身の父親、龍華院住職、鈴木快音についてほとんど書くことはなかった。自らの精神の成長を記述した「心の自叙伝」によれば、酒癖がわるく、経済観念が皆無でだらしない父親と、わずかな断片的にしちか言及されていないように、寿岳にとって、快音は「不在の父」であった。そこに親子という情愛は皆無とはいえないがきわめて気薄であつた。

満10歳のとき、自分を養子に出した父を恨みもしたであろう。晩年、宗教学者、中沢新一との対談で、「私が思うのに、もし何か身を入れて勉強すれば、あの父といえども、もう少しちゃんとしたものになっただろうと思います。けれどもそういう強い知的欲求はな

かった」と、じつに冷淡な感慨しかもらしていない。この「父の不在」を埋めるかのように、寿岳は年長の信頼すべき男性に父親像を重ねていく。

まず河上肇、新村出などが学問上の、人生を先行していく父親となっていき私淑するわけだが、『絵本どんきほうて』の制作依頼者、アメリカ人の実業家カール・ケラーに対しては自分には尊敬する父がいなかったのも、あなたに父親像を重ねたい、と手紙のなかで私的な想いをあからさまに切々と訴えている。以後、不憫に感じたのかケラーは「わが愛する息子よ」



### 『イソギンチャク図譜』

と手紙をはじめのものを常とした。太平洋をへだてて不幸な戦争による中断があったとはいえ、ケラーが逝去するまで40年以上の交友が続いた。お互いの写真（ケラーは騎士、寿岳は紋付き袴姿）を交換しただけで、両者は一度も相まみえることはなかった。こうした交流を「洋の東西をことあげしないこの種の出会いをこそ、私は妙好趣と呼びたい」（「自分と出会う 洋の東西を問わぬ人の縁」『朝日新聞』1990年3月12日）と90歳のときにケラーに対する想いを新たにしている。ゴスの自伝的な小説にふれて、「自伝はすべて興味の多いものだが」と述べているが、本書に自らの「父」との物語を読み込んでいても何ら不思議ではない。

「神の栄光へいたる過程に起こる、人生の諸々の出来事ひとつひとつ、それはあくまで段階であって、父にとってはあまり意味がないものであった」と信仰の到達点しか興味がなく、人間としての息子の成長段階を等閑視する父の態度を糾弾するゴスの物語は、まさに父、快音のなかに見た物語でもあった。

だが、博物学という古い学問が進化論という新しい科学の挑戦を受ける、「宗教と科学の対立」という本書の大きな物語枠に寿岳はあきらかに惹かれていた。寿岳は「父は科学者である」と言及しているが、科学者はダーウィンであり、進化論を否定する父フィリップは聖書の記述をことごとく真実とする、宗教にひきずられた創造説論者であり、決して科学者ではなかった。本書の眼目は科学と宗教の葛藤という、きわめてヴィクトリア朝において先鋭化された問題がひそんでいた。科学を学問の指針とする、また同時に信仰を人生の基盤にした寿岳にとってこの対立は自己の問題そのものであった。



P・ゴスの描画

父、フィリップ・ゴスはヴィクトリア朝を代表する博物学者で多くの読者を得ていた。『カナダの博物史』（1840）、『動物学』（1844）、『ジャマイカ鳥類図譜』（1846）、『ジャマイカ逍遙』（1851）、『英国鳥類誌』（1853）、『イソギンチャク図譜』（1858-60）などが代表的な著作であるが、いずれも緻密な観察と詳細な図像描写に秀でていた。（フィリップの父親は画家であった）。晩年の著述『博物史夜話』全二巻（1860）は広く読まれ、わが南方熊楠も愛読し大英博物館で筆写までしている。

フィリップは、女性たちがこぞって家から出て、海辺に群がり浜に打ち上げられた海草や生息する貝類、小魚を収集して、観察・図解することを研究目的とした「磯採集ブーム」の第一人者であった。加えて採集したものを家庭で飼育する水槽を考案し、水族館建設にも貢献した。今日では『アクアリウム(水族館)―深海の驚異』(1854)はその方面の古典である。

博物学者、ゴスは眼で対象を徹底的に観察して、克明に対象を図像によって再現させ、その精妙さこそ、神の御業になると考えていた。聖書の記述をそのまま信じるゴスは反進化論者であり、創造説を信奉した。進化論以前、すでに偉大な地質学者チャールズ・ライエルはその『地質学原理』のなかで聖書が説く以上に長大な時間によって地球は形成された、と説いていた。ダーウィンやライエルのこうした新説を真向から否定し、自説の主張をゴスは声高く唱えたのである。

絶滅した種の化石はゴスの創造説を脅かす証拠となった。苦悩したゴスはこうした化石は天地創造のときすでに化石として存在していたと説き、持論との整合性をとろうとした。天地創造のとき、エデンの園の木はすでに年輪を重ねていて成育していたのと同様、アダムは33歳で生れたのだが、臍の緒がついていたと考えた。聖書の記述と合わない事実はすべて神の創意にすぎないとされたのである。『オムファロス―地質学的整合の試み』(1857)はその痛々しい主張である。

『父と息子』には創造説が進化論に論破され、博物学者としての築きあげた名声をすべて無惨に奪われてしまう父の姿がじつに印象的に描き出されている。「時はまさに思想界にとって一大転機だった。種の可変性をとなえる説は、およそ人が思考し、行動するすべての部門に波紋を投げかけるべく、このころ準備が着々と進められていた。この説に賛成するのか、反対にまわるのか、そのいずれかの立場を明確にする必要に迫られるときが今まさに訪れようとしていたわけである。」…「先祖がオランウータンだったらどうするつもりだ?」と。科学者たちの提出する証拠の嵐から逃れられず、いまだに神の啓示にしがみついている人たちにとっては、かの有名な「天地創造の痕跡」が存在している根拠こそ、すべての苦悩を解決してくれる飲みやすい妙薬のような役割をはたしていたのだ。…自然淘汰説には博物学者としての父は批判的であった。そしておかしなことに、父のこうした態度が子どもであったわたしにも計り知れない影響を及ぼしたのである。なんとも悲しい話ではあるが、自然淘汰という新しい考えを耳にした当初、父の知性にそなわっているあらゆる直感力は停止してしまったという事実をまず認めねばなるまい。…わたしたち一家がロンドンを離れたのがまさにこの時期なら、父が世のすぐれた科学者たちとの交流に終止符を打ったのもこの時期だった。それまではたとえごくたまの、ほんのひとときのことではあっても、大英博物館や王立協会において有益至極な交際を欠かさずにつづけていた父であったのに……。しかも次にとった行動とは、自分の船を燃やしてしまうことであった。組もうと思えば筏のひとつも組める梁や丸太までひとつ残らず燃やしてしまうという暴挙に出してしまったのだ。こんな意地を張ったおかしな行動をもって心の扉を閉ざし、二度と開くことはなかったのである。…聖書で最初の人間とされるアダムの髪や歯や骨を調べてみたならば、おそらく



は何万年もの変遷をへてできあがったもののように見えるだろう。それでもアダムはやはり、最初からその姿のまま地上に現れたのである。アダムにはた



『オムファロス』の挿絵

しかに一サー・トーマス・ブラウンは否定しているが一臍はあった。だが、母親につながる臍の緒はなかったはずなのだ。こうした滑稽で、頑固な狂信きわまる説を論じた本が大成功を取めてくれるはずと、父はいまだかつてないほどの大きな期待をこめて、全世界に向けて送り出したのである。いくら刷っても刷っても追いつかないほど増刷、また増刷の注文が殺到するのを今や遅しと待ちつづけていたわけだ。この「アダムの臍の緒」論こそ、科学思想界を揺るがせている大騒動に幕を引かせ、地質学を聖書の軍門に下らせ、かくてライオンは小羊と並んで草を食むことになるだ

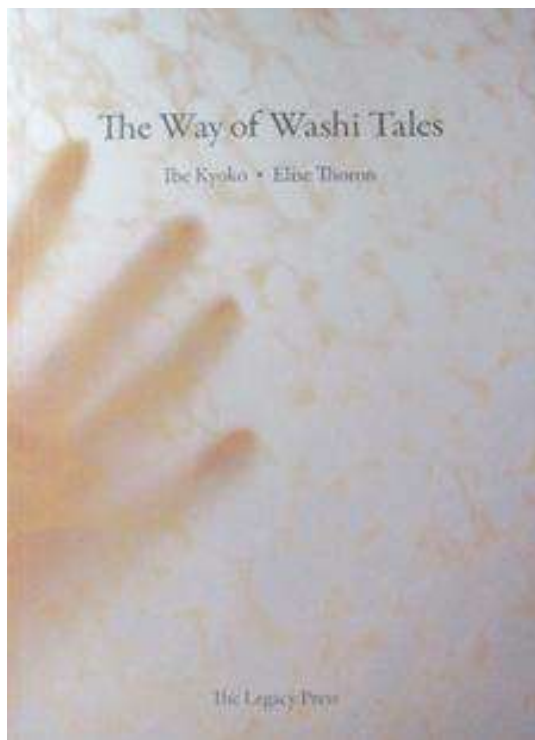
ろうと父は考えた。地質学によって明るみに出される事実と、創世記冒頭の記述とのずれはどんどん広がっていく。こうした様を目の当たりにさせられるのも、これまた無理からぬことであるのは、当の父も認めている。そうなるのは誰の責任でもなく、つまり父、この自分だけが自然界に潜む謎の意味がわかっている、つまり自分だけが地質学の神秘をあざやかな手際で解き明かせる鍵を握っている、というのである。無神論者にもキリスト教徒にもわかるような、はっきりした身振りでそれを示したつもりだった。この説こそすべての問題を解決する万能薬、現代にはびこる悪しき思想を癒せる唯一無二の治療法、とまで考えたのである。だが、皮肉なことに、無神論者もキリスト教徒も一様に、この解決の鍵を目にとめたとたん一笑にふし、投げ捨ててしまったのである。」(第5章) この決別はやがて親子をも断絶させていく、これ以上の悲劇はなかりう。

ダーウィニズムが科学史という枠組みに限定しきれず、思想史、宗教史、政治経済史をも横断していく多義的な概念であることは、ジリアン・ピアの『ダーウィンの衝撃』(工作社、1998)に十全に論じられているが、むろんこの親子の物語も引用・言及されている。また、「現代の狂信的な新興宗教にしても、この書物の教訓は適用する」と寿岳は他宗教を拒絶しわが本尊のみを尊しとする新興宗教について対処する示唆の一端を本書から得ていたのである。

(中島俊郎)

## 会員による新刊案内

最近、伊部京子氏はアメリカの美術館、大学で作品を創作発表され図録や著書を出版されました。



◀ Ibe Kyoko & Elise Thoron, *The Way of Washi Tales*  
(The Legacy Press, 2023)

▼ Meher McArthur & Holis Goodall eds.,  
*Washi Transformed: New Expressions in Japanese Paper*  
(International Arts and Artists, 2021)



## あとがき

今年は春の訪れが早そうです。「向日庵」のある西向日住宅地も間もなく並木のソメイヨシノが満開になり一年でもっとも晴れやかな時を迎えます。2017年に発足しましたNPO法人向日庵も設立から5年を経過しました。この間コロナ禍にあって、研究会等開催が困難になっていますが、会誌『向日庵 6』は関係者のご尽力で刊行できました。さらに寿岳文章の多岐にわたる奥深い仕事について、いろいろな切り口で迫ることができると思います。ご寄稿いただいた皆様には感謝申しあげます。

5年を振り返って、NPO法人向日庵は、寿岳文章の業績に関しては、兵庫県多可町和紙博物館「寿岳文庫」や新村出記念財団「重山文庫」、「紙の博物館」、「日本民藝協会」等の関連する文化機関の協力を得て活動を進めることができました。邸宅の見学は叶いませんでしたが、この間、寿岳邸向日庵所蔵の資料の調査とデータベース化の作業や、10回に亘る講演会の開催、会誌収録の論文・論考は42本に及びます。さらに向日庵の保存・公的活用のための募金活動などを会員やご協力いただいた皆様とともに続けてきました。この調査が、2021年に開催された「寿岳文章 人と仕事展」の中で英文学、書物、和紙研究と国際交流として展示紹介されたことは、この会誌でも報告されました(『向日庵 4』編集後記 玉城玲子)。寿岳文章や当法人への関心は、ホームページなどを通して少しずつ広がっていることは誠にありがたいことで、寿岳文章の日記やエッセイ、文章などの資料の紹介や著書の寄贈、或いは蔵書の問い合わせなどが事務局に寄せられています。

今号で紹介されている『瀬祭記』は向日庵資料の中から見つかった寿岳文章の手書きの読書録ですが、愛書家の寿岳の戦中から戦後にかけての400冊に及ぶ書物の批判や感想が書かれていて、実に興味深い史料です。この解読は昨年からはまったばかりで、今後のリサーチが楽しみです。この史料のように、まだ「向日庵」には埋もれている貴重な史・資料、蔵書が残されているかも知れないという淡い期待も膨らみます。調査活動を続けつつ、その活用についても考えていかなければならない課題です。

邸宅「向日庵」の保存に関しては、2020年に邸宅の保存と公的活用のための募金活動として「募金委員会」を立ち上げましたが、この時世、寄附金の目標にはほど遠く厳しい状況です。「向日庵」は昭和初期の住宅の歴史遺産として保存するだけでなく、ここで営まれた文化的な活動にこそ意味があることは、この5年間の活動の中で詳らかになってきました。いまあらためて文化遺産の保存や活用ということについて考えさせられています。

長尾 史子（特定非営利活動法人向日庵理事）



## 向日庵 6

---

2023年3月25日発行

編集・発行 特定非営利活動法人向日庵

〒617-0002 京都府向日市寺戸町東ノ段9番地9 <https://koujitsuan.kyoto>

印刷 大阪教育図書株式会社